

# 魔法科高校の退学処分者

どぐう

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

? 四葉家現当主、四葉真夜には一人の息子が居た。彼は、彼女の望む魔法を持って生まれてはこなかった。故に、彼は真夜から愛情を受けることなく、生後すぐ分家に預けられた。母親に自分の価値を認めてもらおうべく、必死に彼は世界に抗う。

? 一方、四葉分家の一つである「武倉家」の長男は前世の記憶を持っており、この世界が「魔法科高校の劣等生」の世界と知ってしまう。

○前作「お兄様スレイヤー」の平行。ナチュラルに前作主人公が出てきます。前作↓ (<https://syosetu.org/novel/182863/>)

○原作既読推奨

○原作とスピノフの「司波達也暗殺計画」に準拠しています。

※チラシの裏に投稿していたものを一度非公開にし、九校戦編の途中から書き直した改訂版です。以前のバージョンは公開しませんのでご了承下さい。

# 目次

人物紹介

人物設定集

転校編

入学編ならぬ、退学編

言いたいことは拳で語れ!

夢は逃げない

奇跡を見ているか?

走れ! Knight!

崩れた未来が目にしみる

アンビバレント・アバウト

エキセントリック

こどもたちのジレンマ

横浜騒乱編

夢はサブリミナル

10月の戦場に飛び込んだ

さよなら殺意

優しくするより憎んでほしい

今が思い出になるまで

来訪者編

黙ったままではいられない

ロスト・センチメンタル

合理的よりも感情的に

願いごとの叶う日はいつ?

人生に中指を立てた

150

142

134

126

119

110

102

93

86

79

71

64

57

47

39

31

21

12

3

1

世界にサヨナラを

悪夢から逃げられない

別離編

君は友達だから

抱きしめられたら

正しさを教えてくれ

絶望のはじまり

罪を数えて生きろ

君のために此処にいる

158

166

175

184

191

199

207

216

## 人物紹介 人物設定集

### 登場人物紹介

○津久葉夜久（つくば よるひさ）

? 特異魔法：「精神構造干渉」

? 今作オリ主。not 転生者。

? 大漠での一件の際、冷凍保存されていた真夜の卵子から生まれた子。だが、物質構造ではなく精神構造への干渉を固有の魔法として持っていた為に、真夜の愛情を受けられなかった。生まれてからずっと、津久葉家に預けられてはいるが、数々の彼の突発的な問題行動が理由で相互不干渉になっている。

? 津久葉の秘術である「誓約」を津久葉冬歌よりも上手く行使出来るので、今作では彼が二人の魔法力を制限している。つまり、深雪のキャパシティで閉じた、達也の一部の魔法演算領域を解放する「鍵」は彼だけが任意で開けられる。

? 基本的に彼の行動原理は「母親に認められたい」であるが、彼なりに合理的な考えで起こした行動は、他人から見れば不可解なことが多い。

? 達也が「物質構造に干渉出来る」ことに嫉妬しているが、同じく四葉内で疎んじられている者としてのシンパシーを抱いてもいる。

? 得意系統は放出系。干渉力、発動速度、作用範囲は普通の範疇に入る。

? その分、精神構造に対する知覚力は優れている。そのお陰で、同じ魔法を持っていた深夜よりも細かい精神座標への指定が可能。理由としては、「エレメンタル・サイト」を持っているから。彼のそれは、達也のものとは違って座標指定に特化している。

? 第四研にて実験体の精神を弄る仕事を担わされている。だが、最近は反抗の意味で近づいてすらいない。なので、彼が「誓約」の鍵を

維持し続けているのは、その時だけ真夜に褒められたからである。実の所、真夜もそれを分かかって褒めたのだ。

○武倉理澄（むぐら りずむ）

？ 特異魔法：「ワルキューレ」

？ 前作オリ主。転生者。

？ 四葉分家の一つ、「武倉」の長男。転生者故に、この世界の行く末を知っている。自身に降りかかるであろう面倒ごとを処理する為、本当は第一高校に通いたかった。しかし、一族が集中するので他校への進学を余儀なくされた。

？ 第五高校を勧められたが、あまり行きたくないという理由で第三高校に進学する。その為に、金沢魔法理学研究所の助手職を得た。

？ 吉祥寺真紅郎の研究室に所属しており、個人の研究テーマは「魔法式構造のパターンと変則」である。魔法理論の中で魔法構造学に手を出したのは、魔法工学は難し過ぎたから。最初は、CADを作つて大儲けしようと思っていた。

？ 次期当主候補の一人であり、分家当主の後押しが最も強い。達也を止め得る魔法師の中で、一番彼寄りでない立ち位置だからである。

？ そして、本人も「司波達也の暴走を止めること」を自身の使命と思いついて入っている。その為、策を弄して、他人を勝手に巻き込ませることが多い。

？ 彼の固有魔法である「ワルキューレ」は精神干涉魔法にカテゴリされ、「精神に死を与える」効果を持つ。つまり、精神を「死」の状態に改変することで、肉体の死に波及させる魔法である。

？ また、得意系統は加速・加重系の「重力操作」。その魔法特性的に干涉力は四葉随一を誇る。干涉力の高さに任せて魔法式を幾度も重ねること、疑似的に「飛行魔法」レベルの空中移動を実現させることも可能。

## 転校編

### 入学編ならぬ、退学編

? 司波達也は、本家から一員と認められてこそないが、一応四葉の血縁者で、現当主の四葉真夜の甥だ。

? そんな彼は、国立魔法大学付属第一高等学校——通称、魔法科高校へ妹の深雪と共に入学した。この兄妹が進む道の前には少しも平穩は無く、波乱だけがはつきりとした形で現れるのだ。

? それは高校でも同じで、校内には一科と二科の壁が生んだ根深い差別問題を発端とするトラブルがあり、それは日々を昏く覆い尽くしていた。

? ある日、第一高校は、「学内の差別撤廃を目指す有志同盟」に放送室を占拠される。彼らは生徒会と部活連に対し、対等な交渉を要求。結果、講堂にて公開討論会が実施されることになった。

「一科と二科がほぼ同数……。意外だな」

? 討論日当日。座席の埋まり具合を見て、達也はしみじみと呟く。風紀委員である彼は、有志同盟の行動を逐一警戒しなければならなかったのだ。

「それだけ、この討論会が生徒の関心を集めているということだ。ま、真由美目当てのヤツも居るかもしれないが……」

? 誰に言ったでもない呟きに、返事が返ってきた。言葉の主は、風紀委員長の渡辺摩利だ。

「ファンが多いですからね……。あの人は……」

? 蠱惑的な小悪魔スマイルを思い出してしまい、思わず達也は頭を振る。「本当の性格」を知っている彼にしてみれば、あの表情は厄介事を呼び寄せる予兆だ。

? 何か面倒な事が起こらなければ良いが……。彼は切にそう願う。けれども、残念なことに彼の予感当たってしまうことになる。

? 第一高校生徒会会長、七草真由美は凜々しい佇まいで演説をして

いる。その清廉な雰囲気の前には、どんな反論も跳ね返されてしまうだろう。

「――人の心を力尽くで変えることは出来ないし、してはならない以上、それ以外のことでは、出来る限りの改善策に取り組んでいくつもりです」

？力強く言い切る真由美の言葉によって、万雷の拍手が起こる。紛れもなく、会場の空気は一色に染まっていた。

？しかし、一礼した彼女がマイクの前から去ろうとした時、異変は起こった。一人の一年生が急に壇上に現れ、横からマイクを奪い取ったのである。

「諸君！ 論点をずらした姑息な話術に騙されるな！」

？開口一番、彼はこう叫ぶ。それによって拍手は途切れ、妙な静寂だけがこの場所を包む。会場内の誰もが呆けた顔で、少年を見つめることしか出来なかった。

？達也もそのうちの一人だったが、彼の心を占めるのは動揺ではなく意外感だった。というのも、彼はこの少年についての情報を、この場にいる誰よりもよく知っていたからだ。

？少年の名は、津久葉夜久。彼は、冷凍保存されていた四葉真夜の卵子を基にして生まれた。真正正銘、現当主の息子である。

？苗字が分家のものなのは、彼は生後すぐに津久葉家に預けられた為。その理由は簡単で、彼の固有魔法が母親の「流星群」ミーティア・ライオンではなく、母の姉が持っていた「精神構造干渉」であったからだ。

？望まれて生まれた子ではあったが、愛されはしなかった。それが、夜久という少年だった。

？達也にとっては従兄弟に当たる彼が、自分と同じ学校に入学していることは元から聞かされていたし、校内で偶に姿を見かけることも勿論あった。だが、彼がいつも行動を共にしているのは、入学してすぐに達也達二科生に因縁を付けてきた、あの森崎駿のグループ。それが意味するところは、津久葉夜久は「普通」の一科生だということ。

「そもそも、差別の始まりは当人らの意識などではない！ 単なる制服の発注ミスであり、それを隠蔽する為に、差別を黙認しているに過



ぎない。普通ならば、生徒会はすぐにも学校側に抗議し、各二科生の刺繍代を負担する予算案を審議すべきなのだ。それが出来ないというのなら、独立組織というのも名ばかりで、彼らは単なる職員室の走狗と言わざるを得ないだろう！」

？しかし、彼はこうして「同盟」側を擁護するような演説を行なっている。その辺りが、達也には腑に落ちなかった。

「環境が差別を作る。勿論、予算の不平等、一科生を優遇する項目が書かれた生徒会則……それらも、原因の一部ではある。けれども、我々は原点に立ち返るべきなのだ。考えてみたまえ！ 何故、『花冠』と『雑草』という言葉が校内に蔓延ったのかを！」

？夜久の言動は勢いだけの部分もあり、事前に草稿を練っていたに違いない真由美のものとは違い、言葉の端々に粗さが目立っている。だが、その粗雑さが人々の心を動かし掛けているのも、事実ではあった。

「——それは、『平等に花が咲かない』からなのだ！ ……そこを無視して、問題は解決しない。私立ではなく国策の学校である以上、教育の機会是谁もが得る筈のものだから。十師族であれ、第一世代であれ、魔法の才のある若者を優秀な魔法師に育てる……。それなのに、第一高校では入学前から『補欠』の烙印を生徒に押し付ける。つまり、本学のアドミッシヨンポリシーは間違いなく不履行！ 一科にしろ、二科にしろ、生徒が悪いのでは決して無い。傲慢さを隠そうともしない、このシステムが変わらない限り、確実にこの国の魔法教育は衰退する！」

？懸命に声を枯らす夜久の姿を見ながら考え込んでいた達也は、ようやく合点がいった。

？彼は本心から魔法師社会を憂いているのではない。単なる逆張りだ。きつと、このように騒ぎを起こす事で母親の関心を引きたいのだろう。

？硬直状態から立ち直った風紀委員達に、夜久が引き摺られて行く様子が、達也の居る場所から見えた。それを無表情で眺めながら、彼の短絡的な行動の空回り加減を達也は嗤った。けれども、同時に背反

する感想も浮かぶ。

？それは、感情のままに行動出来るというのは、どれ程幸せなことか本人は知らないだろう……ということだった。



？数日後、夜久は四葉本家に呼び出されていた。理由は言うまでもなく、先日彼が第一高校で起こした騒ぎについてである。

「貴方にも困ったものだわ……。冬歌さんには、ちゃんと釘を刺したはずなのだけれど」

「魔法絡みの騒ぎは二度とやめてくれ、でしたから。今回はそうではありません」

？夜久は朗らかな表情のまま、皿に盛られたアーモンドクッキーを掴む。しかし、アーモンドの欠片が刺さったのか、すぐに顔をしかめた。

「それに、相手は七草ですよ。特に問題は無いでしょう。他の二十八家に喧嘩を売るならともかく」

「……貴方ね、退学処分になったのよ？　もう少し、己の行動を省みようという気持ちにはならないかしら」

「ずるいですよね、アレ。相手が七草だったから、追い出されちゃったんですよ。もしも、おれが四葉を名乗っていたら、なあなあで済まされたに違いありません」

？認知しないことに対する当てつけなのか、と真夜は思った。怒りで眉が僅かに動こうとするのを押し留めて、何とか猫撫で声を作る。

「……それは仕方ないことなのよ？　貴方を守る為にしていることなんだから」

「へえ。それはどうも」

？それに対し、彼は生返事を返すのみだった。何故ならば、紅茶に入れたレモンスライスの果肉を、ティースプーンでほじくるのに夢中だったからである。

「……それで？　次はどこに通う気なのかしら？　私としては、もう

家に籠っておいてくれた方がずっとマシなのだけれど」

「まだ決めてないですね。まあ、一応学校には行きますよ」

「何処でも良いけど、貴方の為に使用人や家は用意しないわよ」

「別にどうぞ。寢床は自分で探します」

？親子とは思えない冷え切った会話が、この後も続く。

「——次こそは、まともに通つてくれることを願うわ。問題ばかり起こされて、こっちもたまったものじゃないんだから」

「起こしたくて起こしてる訳じゃないですからね。おれの周りが悪いんじゃないですか？」

？悪びれた様子も無く、夜久はヒラヒラと手を振って部屋を出て行った。控えていた葉山がそつと扉を閉じると、真夜は大きな溜息をついた。

「……こんなのばかりで、やってられないわ」

「そうは仰いますが。叱られたとしても夜久様は、息子の立場で奥様にお会いできることが嬉しくて堪らないでしょう。微笑ましいではありませんか」

「あの子を息子だと思ったことは一度も無いわ」

？冷たい声で真夜は、葉山の言葉を払い落とす。

「子供が出来れば、幸せになれると思っただけ。そんなことは無かったわね。ただただ、苛つくだけ」

「せめて、『流星群』を引き継いで頂ければ良かったのですがね……」

「姉さんと同じ魔法を持って生まれたら、それはもう姉さんの子供だわ。結局、私は自分の子供を産めなかった……」

？爪のささくれをめぐりながら、真夜は本音を零す。それは身勝手な言い分だったが、魔法師の価値観としてはそこまでおかしいものでも無かった。

？魔法の特質は次の世代に遺伝する。そうでなければ、調整体魔法師などは簡単に開発できない。真夜の子供であれば、物質の構造に干渉する魔法を持っていてもおかしくはない。けれども、夜久はその期待には応えられなかったのだ。

？四葉深夜が司波達也を愛せなかったように。

？四葉真夜もまた、自身の息子を愛せなかった。



？見栄を張って出てきたものの、おれには全く手立てが無かった。転校の手続きなど、どうやるのかも知らない。津久葉の家に世話になっている形ではあるものの、小学生の時に学校一棟を破壊して以来は相互不干渉。「転校したいんだけど」と言っても、聞く耳を持ってくれなさそうだ。

？とりあえず、本家の屋敷周辺をぐるぐると歩き回ってみるが、そう簡単にアイデアが湧き出てくる訳もなく。

「こんばんは、夜久さん」

？急に横から声が掛かる。声の方へ向くと、屋敷の壁に一人の少年がもたれ掛かっていた。

？全体的に顔立ちの整った男だった。元々の色素が薄いのか、光の加減で髪が茶色く反射している。それも相まって、彼の見た目はアイドル然としていた。

「武倉理澄……」

？四葉分家の一つ、武倉家。この家は「交渉」を請け負う家で、次期当主候補を保有している。長男である武倉理澄は、その次期当主候補であった。そして、候補者の中で、最も喰えない野郎なのである。

？次期当主候補は、現時点で6人残っている。四葉家における次期当主の選出は、完全な魔法の実力によるもの。その観点から見れば、おれ、この男、そして叔母様の娘——司波深雪。この三人が最終候補に残るのは確実。おれ達三人は、それぞれ強力な精神干涉魔法を持っているからだ。

？その上、彼は四葉の中でも干涉力が卓越している。それは、彼の得意魔法が「重力操作」であるから。魔法の上書きには必要な干涉力が増大する為に、普通は空中移動できるだけの魔法の重ねがけは不可能になる。しかし、彼は常人よりも多く重複できるので、少々の間は空中で自分の身体を保持可能なのだ。

？だが、一番脅威であるのは魔法ではなく、主に性格面であった。「ええ。覚えて頂けていたようで、何よりです。……確か、第一高校を退学処分になられたとか。あそこの校長は、人を見る目が無いようですよね」

「わざわざ、それを笑いにきたのか。趣味の悪い男だな」

「嫌だなあ。そんな失礼なこと、する訳無いじゃないですか。ましてや、御当主様の御息相手にだなんて」

「……と、こんな具合である。ここまで人間の腐り切った部分を凝縮した奴を推す、分家当主達の考えが分からない。」

「何しに来たんだよ。まさか、転校先を用意するとかじゃないだろう」「いえ、そのまさかですよ。いくらなんでも、四葉家当主の子供が中卒というのは体裁が悪いですからね……。誰かがやらなきゃいけないなら、僕がやろうかと思いましたが」

「何考えてるか知らねえけど、おれは借りを返したりしないぞ」「いらぬですよ。ロクなものが返って来なさそうですから」

？何かしらの目的はあるのだろうか、今の時点でおれが窺い知ることとは出来なかった。だが、転校が出来るのなら僥倖だ。とりあえず、話の続きを促すことにした。

「まず、敬語をやめろ。同い年だし、何より腹が立つ。で、おれのことには『ヤク』と呼べ。親しい奴は、皆そう呼ぶ」

？まあ、親しい奴が居ないので、一度もそのような気安さで呼ばれたことは無い。言ってみれば、大嘘である。それに対して、彼はどう出るのか。良い反応を内心期待する。

「そう。それじゃあ、ヤク」

？ツツコミ一つ無しだった。意外と素直な奴なのかもしれない。彼は端末を取り出し、ある魔法科高校の公式サイトを画面に映す。

「第三高校。ここが、次の行き先だよ。僕も通ってるし、下手に他に通われるよりはマシだ。津久葉も君が東京から離れてくれて、ホツとするだろうし」

？さりげなく、酷いことを織り交ぜる理澄。けれども、おれはその言葉の別の部分が気になった。

「三高に通ってたのか？ てつきり、五高だと思っていた」

？次期当主候補の一人、新発田家長男の新発田勝成を理澄は兄貴分として慕っていた筈だ。彼の母校が五高だったから、彼も同じ所だろうと認識していた。

「ああ……。勝成さんには薦められてただけどど、あまりパツとしなかったんだよね。どうやって断ろうか考えてたら、ダメ元で受けた金沢魔法理学研究所の助手のポストに付けたから。これ幸いと」

「そこ、一条の息が掛かってるんじゃないやねえの？ 良いのかよ、そんな所行って」

「産業スパイみたいなものだよ。あそこは実質、旧第一研だからね。潜り込んだら、何か得るものがある筈だ」

「人間のクズじゃねえかよ」

？角が立たない断り方をする為に、産業スパイになる男。とんでもない奴である。

「というか、何出したら受かるんだ？」

「普通だよ。論文と志望理由書だけだから。審査は勿論あるけど、純日本人で魔法の素質がそれなりに高ければ大抵は通るんじゃない？」

家の格が限られてくるし」

「へえ……。よく受かったもんだ」

「今居るの、カーディナル・ジョージの研究室だからね。僕の研究は、『魔法式構造のパターンと変則』がテーマなんだ。あとは、加重系が得意なものもあるんじゃない」

？割とマトモな返答が返ってきた。顔採用とかでは無かったらしい。まあ、研究所で何を顔によって判断するのか、という問題もある。

？しかし、彼の誘いに乗るか否か。正直、危険だとは思う。だが、このままだとジリ貧なものも確か。だから、こちららを利用してしようとしているに違いない理澄を、逆に利用してやるのだ。彼のバックには分家、しかも黒羽や新発田などの有力な家がついている。

？お母様に自分の存在を認めてもらう。

？その為なら、この男と三高で学生生活を送るのも悪くない。そう思った。

?

言いたいことは拳で語れ！

？第三高校は「尚武」の校風で有名だ。

？だけれども、一高を退学処分された奴に積極的に絡もうとする奇特な人物はいないらしい。理澄にしたって、別に元々仲が良い訳でもないし、すれ違っても挨拶したりしないくらいだ。

？だが、友達が居ないなりに、おれは普通に過ごしている。今のところは特に不満も無い。今日も校内のカフェテリアに残って宿題をしているところだ。

？ただ、一つだけ心配していることがあった。

？それは、九校戦に出場出来るのかということ。

？魔法師としての才能を、分家に押し込まれて隠されている自分の存在を、声高に世間に主張したい——そんな願いをいつも抱いているおれにとって、九校戦は逃え向きの舞台だった。

？一高時代と違って、三高では実力を隠していない。このまま普通にしていても、メンバーに選出されるとは思っている。けれども、理澄はおれが目立とうとすることを良しとしないだろう。彼は骨の髄まで「四葉」が染み込んだ男で、自分の力を隠すことに忌避感が無い。こちらの妨害をしてくる可能性もあり得る。それならば、すぐにでも行動をしなければならぬ。

？そう思い立ち、すぐさま風紀委員会本部へと向かった。本部の扉を開け、目的の人物を探す。部屋には数人が書類仕事をしている。だが、そこまで数も居ないので、容易に見つけることが出来た。おれは目立つ茶色い髪の毛の生徒を指差し、高らかに叫んだ。

「一条将輝！ おれと模擬戦をしろ！」

？その瞬間、場の空気が一気に凍る。武闘派の三高の癖に模擬戦が珍しいのか？と怪訝に思ったけれども、そうでは無かった。

「……あの、一条は俺だが」

？後ろから声がした。振り向くと、扉の所に一人の男が立っている。間違いなく彼の外見的特徴は、「クリムゾン・プリンス」のもの。

？暫しの間、無言で一条（？）と向き合うおれ。



「じゃあ、さっきのは誰だ……？」

「先ほど指差してしまった相手を確認しようとする、向こうも端末から顔を上げた。」

「僕と一条を間違えないでくれるかな……。ヤク」

「嫌そうな顔で、理澄がこちらを見ていた。彼が風紀委員だとは知らなかった。バレないよう、直接赴いたのに。大失敗である。」



「はじめまして。俺が一条将輝だ。君のことはよく知ってる。ここでもかなり有名だぞ？ 七草に喧嘩を売ったせいで、退学処分された奴として」

「ふーん。結構売名になったのかな」

「そんな売名要る？ 僕だったら、絶対要らないけど」

「？おれは一条と理澄を引き連れ、カフェテリアに戻ってきていた。「ここで騒ぐな」と、追い出されたからである。おれも所構わず噛み付くのは得策ではない、と分かっているので素直に従った。」

「戦う相手をビビらせられるだろ」

「普通にカッコ悪いよ、それ」

「？おれの言葉に、理澄は呆れた様子を隠さない。」

「——それにしても、そちらから来てくれるとはな。俺たちの間でも、九校戦に向けてお前を引き入れたいという話は出ていたんだ。な、武倉？」

「まあね。だからこそ、一高を叩き出されたヤクをこつちに呼んだ訳だし。そうじゃなきゃ、顔見知りレベルの相手にそこまでしない」

「？おれの予想に反し、理澄は俺を九校戦の戦力に数えていたようだった。その点には、どうも違和感がある。」

「？四葉であることを隠したがる筈の人間が、心変わりする理由がわからない。おれの存在を目立たせてまで、他に隠したいものがある？

「？一条が咳払いを一つし、話を切り出し始める。理澄のことも気になるが、まずはそちらを聞くことにした。」

「……三高はここ数年の九校戦で、毎回一高に苦杯を舐めさせられ続けている。学校側もこれには忸怩たる思いを抱いていて、解決策を提示するよう風紀委員会にお達しを出した。まあ、これは俺の存在が大きいと思う。正確には『俺とジョージ』だけだな」

？ 自信満々なことである。生まれながらに「十師族直系」であることが人生に裏打ちされているのだ。

「確かに、俺とジョージが組めば無敵だ。けれども、校内の柵が本戦出場を妨げる。どこも『一年生は新人戦に出とけ』という不文律があるけれど、中でも三高は特にそれが顕著だ」

「つまり、問題児を逆手に取ろうと？ おれに『本戦に出たい』と大騒ぎさせて、『コイツが出るくらいなら、一条の方が良いだろ』という風潮にする……。そういうことか」

「話が早くて助かる。——武倉、お前の予測通りだな」

？ このアイデアは理澄が考えたらしい。一条を本戦に出すことが、彼の利益に繋がると考えれば良いのだろうか。

「元から異常者扱いされてる奴がやれば、一条は火の粉を被らずに本戦メンバー入り出来るからね。棒倒し本戦に一条、早撃ち本戦に吉祥寺、モノリス本戦に一条・吉祥寺コンビを捻じ込めれば、優勝の確率はぐつと上がる。出たいなら、ヤクも本戦に出てくれても良いし」

？ それを聞いて、おれは少し考える。

？ 正直、自分を追い出した一高が優勝するのは気に食わない。それに、新人戦より本戦に出た方が目立てるのもそうだ。メリットはあれど、デメリットは殆ど無い。少々、上級生に睨まれる程度なら、いつものことだ。

「……条件がある。理澄も本戦のどれかに出て、優勝しろ。お前だけは高みの見物、なんてさせねえよ」

「ええ……。僕、実技の成績そこまで良くないよ。一年だけの新人戦ならギリ入れる、程度でしょ」

？ 嘘つけ！ この期に及んで、コイツは実力を頑なに隠そうとするのか。

「じゃあ、何で風紀委員なんだよ。三高の風紀は、実力無い奴は入れな

「いんだろ？」

「ああ……。それには訳があつて」

？割つて入った一条が、その辺りの細かい事情を説明し始めた。

「まず、教職員枠でジョージが風紀委員にスカウトされたんだ。だが、アイツは研究でかなり忙しいから、仕事を全部担ったらパンクしてしまう。でも、助手を勤めている生徒が同級生に居た。それなら、助手にも仕事を分担させて、名前だけでもジョージを置こうつてなつたんだ。——そうだろ？」

「……職場の序列を学校にまで持ち込まれるとは思わなかつたよ。僕だって、暇な訳じゃあないんだ。研究以外のことを押し付けられないで欲しい」

？研究所にわざわざ入つたりするからである。可哀想だが、自業自得だ。

「でも、金沢魔法理研は一条が資金を出してるんだろ。コイツは十師族。お前はそこら辺の魔法師。どうしようもない。実力ないのにコネで風紀委員会入りしたなんて、結構悪口言われまくつてそうだな」  
？そう言つてやると、理澄はこつちを鋭く睨みつけてきた。「僕も十師族だぞ！」とか言いたいのだろう。苛立つくらいなら、手を抜くのをやめれば良いのに。

？おれだつて、一高の件では腹を据えかねている。だからこそ、次は実力を存分に発揮してやろうとしているのだ。追い出したことを、後悔させる為に。

「そこんとこどうなんだ、一条？　コイツ、三高でめちやくちや嫌われてるじゃねえの？」

「その傾向が無い……。ということとは、まあ……。俺やジョージと居るから、別に何かされるつて訳でもないが」

「うわー、かつこ悪。高校生にもなつて、金魚の糞かよ。おれの方がまだロツクだわ」

？わなわなと震えだす理澄。煽つた方が言うのも何だが、気持ちは分からなくもない。一番理不尽に感じているのは、本人である筈なのだから。

「……分かったよ！——それなら、やってやろう！ 一条！ 模擬戦だ模擬戦！ 僕はお前に勝負を申し込む！」

？手でテーブルの天板を思い切り叩いて、彼は椅子から立ち上がる。そのまま、一条の鼻先に人差し指を突きつけた。突きつけられた側は、目を白黒させている。一条にとつて、今までの理澄は「ちよつと頭が回るだけの、まあそれなりに普通の奴」だったのだろう。

「おい、待てよ。おれが先に模擬戦の申し立てしてるんだぞ。横入りすんじやねえよ」

「は？ 本戦出ろつて言ったのはそつちじゃん。お前は模擬戦なんかせずに、適当に騒いどいてくれたらいいんだよ。何なら、一条よりも上級生に狙いを付けてくれよ」

？ 険悪な空気が漂い、近くのテーブルの人達もチラチラとこちらを見始める。それに気づいた一条は、何とかおれ達を取りなそうとした。

「じゃあ、とりあえず二人で模擬戦をしたらいいだろ？ 演習林を取つといてやるよ。今日はもう無理だろうが、明日なら空けられる筈だ」

？ 彼の提案も尤もだ。特に反論することなく、それに同意した。

？ 実を言えば、おれは理澄との対戦経験が一度も無いのだ。彼は黒羽の双子や新発田の長男と一緒に訓練をしていることが多く、四葉の戦闘訓練では殆ど鉢合わせなかった。成り行きとは言え、一条と戦うよりも良かったかもしれない。



？ 次の日、夜久と理澄は模擬戦が行われる演習林に居た。CADは昨日、武倉家の魔工師にどちらも調整させている。条件を同じにする為だ。プロテクターやヘルメットも身に付け、準備は既に万全。

？ 審判役を請け負った、高3の風紀委員長が注意事項を二人に告げる。

「死に至らしめるような攻撃、あるいは魔法。それらは禁止です。有

効フィールドは演習林Bエリアのみ。そこから出ると、失格扱いになるので注意を。『跳躍』などで、演習林上空に飛び出すのも禁止です。それから——」

「？——その様子は演習林周辺のカメラで撮影され、そのまま校内ネットで配信される。模擬戦がさかんな三高特有のシステムだ。映像は個人所有の端末でも閲覧可能になっており、画面右上に表示されるリアルタイム視聴数カウンターはかなりの数。

「？かの「退学処分者」と「カーディナルのおまけ」という変わった組み合わせの模擬戦は、三高生の関心を集めるのに十分だった。

「？そして、第三高校ダブルエースと名高い、一条将輝と吉祥寺真紅郎もこの配信を見る為に待機していた。

「ジョージ、これをどう見る？」

「うーん……。普段の武倉の実力から考えれば、厳しいんじゃないかな。でも、『今までが本当の実力』であればだね。津久葉夜久は、彼が本戦に出れると思ってた訳だろ？」

「まあ、アイツが手を抜いていたとは限らないけどな。魔法は心理的な側面に左右される。高校入学前に何らかのトラブルがあって、それが無意識下で魔法力をセーブさせた可能性もあり得るんだ」

「？わざと魔法力を低くする——ということとは将輝の常識の中に入っていない。だから、彼は自分が納得出来る理屈を立てようとする。

「勿論そうだよ。——でも、本音を言えば実力を隠してただけの方が良いね。彼には『不可視の弾丸』インビジブル・ブリットもあげているし……。渡したからには、使いこなして欲しい」

「そうだったな」

「？真紅郎が理澄に研究用のダミーやノイズが混ざったものではない、実戦用『不可視の弾丸』インビジブル・ブリットの術式を提供していることは、将輝も知っていた。数居る助手達の中で、それを貰ったのは彼一人だけだということも。

「そーいや、どうして武倉のことを買ってるんだっけ？ 割と面白い奴だけど、お前のことだからそんな理由じゃないだろう？」

「うちの研究室のメンバーで僕以外に基礎研究をしているのが、武倉しかないから。他は軍事系か魔法工学系の研究所出身。やっぱり花形だからね」

「ジョージの研究は脚光を浴びたじゃないか？」

「基本コードが注目されたのは、本当に運が良かったただけだし。けど、基礎研究は技術発展の基盤としては一番大事な部分だ。だから、後進が居るのは、すごく嬉しいことなんだよ」

「ふーん……」

「少々、面白くなさそうな顔をする将輝。真紅郎は慌てて「いや、将輝は『尊敬』だから！」と言い、特にまだ代わり映えのしていない画面を指差す。

「——あつ、ほらっ！ 始まるみたいだよ!? 多分……?！」

「?その様子を見て、将輝は少し口許を緩めたあと、肩をすくめた。ポンツ、と自分の手のひらを真紅郎の肩に置く。

「いや……。始まるみたいだぞ?」

「?端末には、演習林内部の様子が映し出された。ようやく、模擬戦はスタートしたようである。

「範囲も狭いし、すぐぶつかるところな。何より、武倉は足がかなり遅い。津久葉は……体育の測定で見たけど、結構早かったかな」

「開き直って自己加速術式を使うかもしれないけど、Bエリアは特に遮蔽物が多いからなあ……。普通に危険だよ」

「?エリアが狭いのは本場で、二人が話している間に理澄と夜久は遭遇してしまっていた。先手必勝とばかりに、夜久がCADを操作。使った魔法は「スパーク」。薄暗い中を眩い光が駆け抜け、全てが理澄へと襲いかかる。だが——

「——領域干渉!? あの距離で無効化するのか!? 一撃で意識を刈り取れそうな威力だったのに……」

「干渉力が化け物じみてるな……。俺の『爆裂』は何とか通るかもしれないが……」

「?反撃に、理澄が「インビジブル・ブリット不可視の弾丸」を使った。しかし、すぐに夜久は大岩の陰に隠れたので、魔法式が定義破綻を起こす。

「あー、勿体ない。これなら、単一加重の方がマシだったね」

「分からないぞ。ジャブのつもりかもしれない」

？普通の攻撃では領域干渉を突破出来ないと見たか、夜久は圧縮空気弾を幾つも作り出した。移動した空気弾は理澄の干渉下に入ると、どれも動きを止めた。だが、加速に伴う強い風だけはそのまま残る。足場の悪いフィールドで、もろに突風を受けた理澄は足を滑らせた。

？容赦無く夜久は、そこに追い討ちをかける。精神干渉魔法「フォボス」を行使したのだ。この魔法は、想子光を媒体に精神に直接「恐怖のイメージ」を生み出させる魔法。この魔法を受けた者は、精神が著しく衰弱する。

「精神干渉魔法、だよな……。あれってアリなのか？」

「二応ルール上は問題無い……。筈。今までそんな突飛な奴が居なかったんだろうね、きつと。流石は、一高退学処分者だよ……。多分、この先は規定に『情動及び精神に干渉する魔法は使わないこと』って入るだろうけど——って、あれ見て！」

？夜久の攻撃により精神にダメージを負ったと思われていた理澄だが、そうではなかった。

？彼の周囲は今、黒い半球で覆われている。これは、系統魔法「ミラー・ケージ」の効果によるもの。光の進行を反転させる定義が想子光にまで波及し、「フォボス」の効果打ち消したのだ。

？しかし、それこそが夜久の狙いだった。理澄の視界が閉ざされた間に、彼は「ドライ・ブリザード」によるドライアイス弾をばら撒く。そして、もう一度彼はCADのボタンに触れる。すると、理澄の足元に向けて電流が発生した。

「あれ、何処から出してるんだ？」

「地中だよ。電荷を弄って、擬似的に電極を作り出したんだ。『スパーク』は弾かれたからだろうね」

？いくらなんでも身体に電流を流し込まれれば、どうしようもない。理澄は力尽きたように、地に倒れ臥す。けれども、彼は転んでもただでは起きない男だった。

「遅延術式!？」

？倒れた理澄の周辺にあった数十個程の小石に想子が送り込まれ、慣性を増大させた状態で、夜久目掛けて一気にぶつけられる。夜久は想定外の攻撃に為すすべ無く、されるがままで。プロテクター越しであっても、やはりダメージは免れない。結果、どちらも戦闘不能状態に。

？遅延術式とはいえ、発動した時には既に理澄は動けなくなっていたので、模擬戦の判定としては負け扱い。一応、夜久の勝利という形になった。

？——配信が終了し、画面が暗転する。顔を寄せ合って端末を見ていた将輝と真紅郎も、大きく伸びをして立ち上がった。

「中々、見応えがあったな。問題を起こした不良生徒が転校してくると聞いた時は、どうなることかと思っただが……。津久葉のお陰で、武倉の実力も見れたわけだし」

「そうだね。世の中、意外と上手く回っているのかも」

「ああ……。——さて！二人を探しに行こう！茜が見つけてきた、良い雰囲気のカフェがあるんだ。そこでアイツらを質問攻めにしてやるんだ！さあ行くぞ、ジョージ！」

？言うだけ言って、将輝は昇降口へと走っていく。真紅郎は急いで彼を追いかけた。

？……どこまでもついて行く。君は僕の将で、僕は君の参謀なんだ——心の中で、そう呟きながら。



## 夢は逃げない

? 模擬戦の後、念の為おれ達は医務室に向かった。だが、養護教諭は生憎不在で、自分で全てをやらなくてはならなかった。

? プロテクターを外すと、痣がいくつか出来ていた。石をぶつけられたからだ。隣に座る理澄に恨みがましい目を向けると、「電流流し込む方が悪いと思うよ」と返してきた。

「意外と平気そうだな」

「情報強化で何とかね。でも、下からは……。もしかして、知覚系持つてる? 『エレメンタル・サイト精霊の眼』とか?」

「一応。エイドス視認の拡張スキル……って言ったら良いのか。座標の細かい指定を可能にする為に、分解能を上げるって感じ」

「なるほど……。結構便利だね、それ」

? 呑気な感想を述べる理澄。

「ところで——」

? そう口を開きかけた時、医務室の扉が勢いよくスライドされた。ボタン式なのに、わざわざ手で開けたようだ。

「ここにいたか!」

? 一条がドスドスと大股でこちらに歩いてくる。その後ろには、吉祥寺も居た。

「良い試合だったな。面白かった。だが、お前達に聞きたいことがある。特に武倉!」

? そう言つて、一条は理澄と無理矢理肩を組もうとする。理澄は顔をしかめて、彼の腕を振り払う。

「うへえ……。こうなると思つてたんだよなあ……。吉祥寺、コイツ引き取つてよ。相棒でしょ?」

「残念ながら、今は将輝と同じ気持ちだよ。どうして、実力を隠しているのか……。僕も気になる」

? どう言い訳するのか、とおれは理澄の顔をチラと見た。だが、彼は平然として「実力を隠さないと、困るような家の生まれなんだ」と答えた。あまりにも、正直過ぎる。これには、おれの方が驚いてし

まった。しかし、向こうはそれを違う風に受け取っていたのである。

「あつ……」

「ごめん、無遠慮だった」

？受け止め方の違いの理由が分からず、おれの脳内にハテナマークが幾つも浮かぶ。少し考えて、やつと意味が分かった。

？二人は、理澄が「数字落ち<sup>エクストラ</sup>」だと勘違いしたのだ。いや、勘違いするように誘導されたというべきか。「武倉」という苗字から連想されるのは、数字の6。第六研出身は熱量操作が得意らしいが、遺伝子操作を第四研並みにやっていたらしいので、加重系を得意とする魔法師の存在も有り得ない話では無い。

？本当に、詐欺師みたいな奴だ。口から生まれたという形容が、ここまでピツタリ合うのも中々居ないだろう。

「気にしなくて良いよ。ここでは、割と楽しくやってるし。——そう  
だ、今から皆で何処か寄ろうよ?」

「あつ、ああ……。勿論！ 良い店を知っている。そこに行こう。津  
久葉も来いよ。今日は全員分、俺が奢る」

「えっ!? 将輝、そんなの悪いよ」

「やった！ 大感謝だよ、一条!」

？吉祥寺は遠慮していたが、理澄はとても凶々しかった。そして、  
一条の肩に手を回す。さつき、振り払っていたのは何だったのか。

「良いのか?」

「構わない。津久葉、君からも話を聞いてみたい」

「ああ。おれも三高について色々聞きたい。それに……理澄はこんな  
明るい奴だと思わなかった。それも驚いている」

？おれの知る彼は、もつと嫌味で陰湿な男だった。分家に祭り上げ  
られて、偉そうに踏ん返り返るイメージが強い。

「ちよつと変わってるよな。一緒にカラオケとか行ったら、コイツは  
謎の歌しか歌わない。インターネット黎明期の歌らしいけど、誰が  
知ってるんだ」

？一条の言葉に、理澄はすぐさま反論する。

「うるさいな！ 僕が知ってるんだよ!」

「でも、僕も変わった趣味だと思うけどなあ……。津久葉も思わない？」

「変だと思う。生まれる時代を間違っただんじやないのか？」

？そう話しながら、おれ達四人は校門を出る。誰かと放課後に寄り道するなんて、初めての経験だ。間違い無く、今回の模擬戦は人間関係を再構築させている。軽いノリで風紀委員会本部に押しかけたことが、ここまで繋がるとは思わなかった。



？学校を出て向かったのは、「古き良き」と接頭語を付けたくなる雰囲気のお茶店だった。「妹から聞いた」と言っていたが、一条の妹はデート用に紹介したのではないか。彼本人は意味を分かってない辺り、きつとモてるのに理想だけは高いタイプなのだろう。

？そして、本当に一条は全員分の軽食代を奢ってくれた。そういうところを女に見せれば良いのに。男に見せてどうする。

？おれを含めた皆はケーキセツトを頼んだのに、理澄だけは「ケーキセツトに好きなのが無い」と言っって、単品のケーキとドリンクを別々に頼んでいた。ワガママな奴だ。黒羽や新発田が、コイツを甘やかしに甘やかしまくっているのでは無いか。

？ケーキを食べつつ、一時間程は喋っただろうか。思ったより楽しかった。その頃には、時間も時間なのでお開きになったが、本当は一条だけが帰る方向が違う。だが、吉祥寺は一条の家に寄るらしく、必然的におれと理澄と一緒に帰ることになる。

「なあ、理澄」

「なに？」

「おれと模擬戦したの、わざとだろ」

？今考えると、あの時のキレ方はえらく雑だった。そもそも、コイツは厚顔無恥で凶太い人間だ。いくら悪口を言われていようが、平然と引退まで風紀委員を務め上げていてもおかしくない。

？新人戦の枠には入っていたらしいから、彼は本戦に出なければな

らなかつたのだろう。その理由は一体何なのか。

「……わざとだよ。僕には本戦に出なくちやいけなかつた。ヤクとは違う理由で、目立つ必要があつたんだ」

「それ、何だつたんだ？」

「聞きたい？　じゃあ、ちよつと待って。車を回させるから」

？　そう言つて、端末を操作し始めた。部下に連絡しているのだから。少し待っていると、最新モデルの自走車が近くに止まつた。

「乗りなよ。こんなところじゃ、説明できないし」

？　車に乗り込むと、理澄が運転手に向かつて「適当に走らせといて」と言つた。そして、端末をこちらに放り投げてくる。

「香港系国際犯罪シンジケート『無頭竜』。ソーサリー・ブースターの供給を独占的に行なつてる」

「これが、九校戦と関係あるのか？」

「ウチが優勝すると、この組織に莫大な金が入るんだ。簡単に言えば、賭けみたいなもの。その為に、一高へ妨害仕事を仕掛けようとしている」

？　端末で組織のデータを読む。ボスについてのデータは書かれていない。どうも、警察のデータバンクから引つ張つてきたもののようなのだ。

「まあ、僕一高生じゃないし。放つとくつもりだつたんだけど、ヤクがこつちにきたから。上手くやれば優勝を狙えるし、適当なダミーを挟んで僕も賭けに参加した。まあ、他にも理由はあるっちゃあるけど、それが一番かな」

「金をむしつてから片付けると」

「そう。公安にでも流そうか」

？　確かに方法としては悪くない。何なら、満点の行動だ。だが、おれはそれを認めることは出来なかつた。

「——それ、却下。九校戦の間は隠しきれても、結局分かる奴には分かる。三高の優勝が出来レースと思われたら、一高を完膚無きまでに叩きのめしたことはない」

「別に構わないだろ。噂が流れても、握り潰せば良い」

「妨害工作があつたことは隠せない。『テロに屈せず戦つた第一高校』となつてしまつたら、おれが目立たなくなるじゃないか！」

「？おれは理澄に詰め寄り、肩を掴んで前後に揺らしまくる。そして、自分の想子を活性化させた。」

「ノリ：ヘッド・ドラゴン無頭竜』を潰せ！ 何なら、今から潰しに行け！ 拒否権は無い！ 拒否した瞬間、お前の魔法演算領域を閉じるからな！」

「わかつた！ わかつたから！」

「？泡を食つたような反応で、仰け反る理澄。魔法を使えなくされたら堪らない、と言わんばかりに彼は慌てて首を縦にぶんぶんと振つた。」

「あーあ……。賭けた金、実質全部溶けたんだけど。穴埋めしないと……。——行き先を変更。とりあえず、空港に向かつてくれる？」

「？運転手に命令した後は一度も言葉を発さず、端末と同期した仮想キーボードを叩きっぱなし。おれは退屈になって、動画を見て暇を潰すことにした。」

「？数十分すると、空港に到着。足早に施設内を歩く理澄の後を、おれは急いで追う。明らかに通常の客用では無い通路を、ずんずんと進んでいく。？十分後には、旧神奈川県に向かう飛行機の中だった。言い出したのはおれだが、展開が早すぎる。」

「あそこには、国防軍の飛行場があるから。そこから向かえば良い」「軍の施設だよな？ 普通に素性がバレないか？」

「大丈夫。助っ人を呼んでるから」

「？飛行場に到着し、理澄は先に軽やかな足取りでタラップを降りていく。それに続いて、おれも地上へ降り立った。」

「こんばんは。理澄さん、夜久さん」

「？誰も居ないはずの空間から、鈴を転がすような声でした。周りの空気が一瞬揺らぐと、そこにはロリータファッションの少女が立っていた。」

「こんな時間にごめんね。亜夜子ちゃん」

「お気になさらないで。他でも無い、理澄さんの頼みですから——夜久さんも、直接お顔を合わせるのは初めてですね」

？彼女は四葉分家の一つ、黒羽家の長女である黒羽亜夜子。そこま  
で面識は無いが、顔くらいは知っている。彼女の得意魔法は確か、「極  
致拡散」。気配を隠すのにはもってこいの魔法だった。

「津久葉夜久です。はじめまして、亜夜子さん」

「はい、はじめまして。黒羽亜夜子と申します。よろしくお願いしま  
すわね。——では、行きませう。車を用意させていますわ」

？敷地を出て、車で目的地へ移動。

？横浜グランドホテルは、この地域では一番ランクの高いホテル  
だ。内装も割と豪華だし、接客も丁寧。客のリピート率も高いとい  
う。だが、そんな有名なホテルが、犯罪シンジケートにアジトを提供  
している……。嫌な世の中である。

？正面から堂々と入り、おれ達は従業員エレベーターに乗った。

「極散」の魔法で気配を消せているので、この辺りはスムーズに事が運  
んだ。最上階に置かれた、隠し部屋への直通路の扉に辿り着いたと  
ころで、理澄はおれに言った。

『「酸化崩壊」使える？』

「使える。……ドアを壊せば良いのか？」

「うん。僕だとブチ抜くくらいしか出来ないから。ここは隠密第一で  
行こう。亜夜子ちゃんもいるし」

？おれは手首に巻いた腕輪型CADから、「酸化崩壊」の起動式を呼  
び出した。一瞬で魔法式を構築し、エイドスへ投射。金属製の扉は黒  
く変色して脆くなる。こうすれば、手でも取り外す事が出来る。取り  
外したそれを、廊下に立て掛けておいた。扉の向こうは、細長い廊下  
が続いていた。侵入者に先へ進ませない為かもしれない。壁には値  
の張ってそうな絵画が、幾つも掛けられていた。

「マグリット……の複製だな。本物は流石に持ってこれなかったか」

「最近、うちは本物を入手しましたの。お父様が欲しい、と言い出し  
て」

「良い趣味だね。叔父様らしい。でも、どうせ絵の向こうに隠し部屋  
を作ったんでしょ？」

「ええ。文弥が呆れていましたわ。私は結構、そういうギミックが嫌

いじゃないのですけれども」

？黒羽の懐古趣味は、おれもよく知っていた。分家の中でも、黒羽家はとても派手な家だ。それは、「諜報」を請け負っている反動なのかもしれないなかった。

「そういえば、何でおれ達3人なんだ？ お前、部下とかいるだろう。呼ばなかったのか？」

「ああ……。そっちは別口。『無頭竜』ノリ・ヘッド・ドラゴンが小額紙幣や武器を保管している倉庫を襲わせてるんだ。何処かの誰かさんのせいで、大損したからね」

？随分と根に持っているらしい。

「あと、少人数で片付けて撤収する方が早い。このホテルには金を握らせて、黙つといてもらおう。最初から、ここにはアジトなんかなかったということの一つ」

「それ、もう脅しだろ」

「まあ、そうとも言うね。僕達は貰うものだけ貰って、掃除はホテルの人にやってもらおう。餅は餅屋だ」

？確かに、清掃といえばホテルだろう。だが、何とも気の進まなそうな清掃活動だ。

？通路を更に進む。すると、亜夜子が「一度止まってください」と言った。

「恐らく、入り口には見張りがいますので」

「了解。見張りは僕が片付ける」

？理澄がポケットから端末型CADを取り出す。コマンドを打ち込み、精神干渉魔法「ワルキューレ」を発動した。彼だけが使えるこの魔法は、精神に直接「死」を与える一撃必殺の魔法。彼はこの魔法で、次期当主候補の地位を掴んだ。

「あ、死んだね。じゃあ、行こう」

？エイドスが改変されたのを感じ取ったのか、彼はのんびりとした声音で言う。

「なんか、軽くないか？」

「しんみりしてる場合でも無いでしょ。早く終わらせて、さっさと帰

らないと」

？少し進むと、そこには死体が三体転がっていた。亜夜子と理澄が躊躇することなく、死体の服を漁る。

「あつ、ありましたわ。カードキー」

「これだけで開けられたら良いんだけど……」

？彼の懸念を余所に、カードキーを翳すと扉は開いた。亜夜子が「疑似瞬間移動」を使って、おれ達を一気に部屋の中心に移動させる。突如現れた闖入者に、「無頭竜」の幹部達は驚きを隠せないようだった。おれは即座に「フォボス」を放ち、動揺中の幹部達を更なるパニックに陥れた。彼らも魔法師だし、銃も所持していた。冷静な判断をされたりすると、ちよつと困るからだ。

？その後、すぐに理澄が床に鉛直下向きの加重系魔法を掛けて彼らを気絶させる。そして、気を失った幹部ら全員の顔を確認し、一人の男だけ端に移動させた。

「ダグラス・黄<sup>ウオン</sup>。彼のみがボスの素性を知っている……。情報を取るのにはコイツからで十分。後は殺しておこう」

？彼は魚を捌くような気軽さで、ナイフを使って男達の頸動脈を掻き切っていく。「ワルキューレ」などの魔法を使わなかったのは、魔法で殺した際に残るエイドス改変の痕跡に気づかれることを恐れていたろう。

？仕事を終えたので、おれ達三人はホテルから撤収した。下に武倉の車が待機していて、理澄はダグラスとジェネレーター<sup>ジェネレーター</sup>の死体を引き渡していた。

「ヤク。これを渡しとく」

？ひよいと渡されたのは、五万円が入ったマネーカード。何でこんなものを……と思っていると、彼はこう言った。

「それ、宿泊代と交通費。あげるから、自分で帰ってね」

「えっ、お前はとうするんだ？」

「黒羽に泊まるから。それに今日、文弥がボクシングの大会に出たんだ。優勝したみたいだし、今からお祝いで焼肉に行く」

？おれは、黒羽文弥の中性的な容姿を思い浮かべる。彼がボクシン



グをするのか。何だか、意外な感じだ。

「ていうか。おれだけ仲間はずれかよ？　横浜で放り出すなんて、酷くないか？」

「叔父様が居て良ければ、別に」

「……やめておく。あの人にはあまり会いたく無い」

「？　そう言うと、亜夜子が微妙な顔をした。よく考えてみれば、黒羽貢は彼女の父親だ。これは紛れもなく、失言だった。」

「？　彼らと別れ、おれは一度東京に向かった。泊まっても良かったが、そうできない理由があつた。理澄が途中で置いて行こうとしたのは嫌がらせのつもりだったのだろうが、おれにとつては好都合なことであつたのだ。今回のことについて、「スポンサー」に話しておく必要がある。下手に話が拗れてしまう前に。」



「——というのが、今回の顛末でして」

「？　次の日、おれは純和室の部屋で正座していた。湯気が立った湯呑みと、皿に置かれた和菓子が脇にある。だが、おれはまだ手を出せていない。四葉の後援者であり、おれ個人の後援者でもある人間を前にして、そこまで失礼なことは出来なかつた。」

「……では、君が四葉本家に与したという訳ではないのかね？」

「ええ。面白半分に付いていったというのが近いかと。何より、おれが四葉をそこまで愛しているとお思いですか？　——東道青波閣下」

「？　目の前の僧形の男は哄笑した。そして、横に除けていた湯呑みを手取る。」

「思わないねえ。君は四葉に、十師族に、帰属すべきとは欠片も考えていない。だからこそ、君が必要なのに——新しい魔法師社会の秩序に」

「？　東道閣下は茶を啜った。」

「九島烈は失敗した。相互に監視し合う十師族は、足の引っ張り合いだけを生んだ。結局、国際社会の監視があるのだから、国内にはそこ

までのシステムは要らなかったのだね」

？おれも黙って、茶を飲んだ。まだ少し熱い。

「十師族は解体すべきだろう。数字を消し、全てを在野に紛れ込ませる……。まあ、ある意味今の四葉か。そこから適当に人を選び、新たな権力者を作れば良い。——その中心は、君になるだろう」

？おれと閣下の目的は偶然にも一致していた。

？四葉から拒絶され、人体実験の道具としてしか扱われていないおれは、幸せそうな他の十師族の人間が憎い。七草真由美にしろ、十文字克人にしろ、一条将輝にしろ。勿論、武倉や黒羽、新発田などの分家連中もだ。だから、おれは十師族を破壊したかった。

？閣下は閣下で、十師族システムが形骸化していることや、国家機能が騙し騙しで動いていることに懸念を示している。日本の国力が落ちてしまったら困るからだ。

？そもそも、裏の権力を使って各方面が好き勝手しているのに、この先も上手く回り続ける筈が無い。

？魔法師が、魔法師と非魔法師を管理する社会。それがおれ達の出した答えだった。

「期待しているよ。『四葉』夜久君……。この国を救えるのは、君しか居ない」

？おれは一礼し、部屋を去る。

？この素晴らしい未来を、お母様は喜んでくれるだろうか。きっと、いつかは分かってくれると思う。

奇跡を見ているか？

？横浜の問題を片付けた後、おれは上級生相手に模擬戦を挑みまくった。何を隠そう、本戦に出場する為だ。一条や吉祥寺、理澄も偶に出ていたが、連日戦っているのはおれ一人。いわば、エンターテイメントを毎日提供しているようなものだ。上級生は、そんなおれを馬鹿にして「決闘野郎」という変なあだ名を付けた。けど、気にしなかった。

？いつも模擬戦に出ているのもあって、クラスメイトの何人かには少し話しかけられるようになった。「退学処分者」というインパクトも、そろそろ薄れてきたのもあるかもしれない。三高での生活は、おれにとつても中々悪くないものになってきていた。

？そして、数々の根回しの末に、一年生の本戦出場は何とか認められることになった。実力の違いをあれだけ見せつけたのだから、当たり前だ。

？スピード・シューティングに吉祥寺。クラウド・ボールに理澄。アイス・ピラース・ブレイクにおれと一条。モノリス・コードにおれと一条と吉祥寺。これだけ出場出来たら、十分だ。ちなみに理澄は、新人戦モノリス・コードに出場することになった。二分の一換算でも、優勝できれば高い点数が入るからである。

？代表メンバーが決まった後も、風紀委員は忙しそうだった。ユニフォームの発注したり、ルールブックを読み込んだり、やることは山程あるのだろう。

？7月も終わりに近付き、九校戦本番が近づいてきた。金沢にある第三高校は、九校戦会場に2日前から現地入りすることができる。とはいえ、練習場所には限りがあるし、そこまで大規模な練習はできない。その上、変に練習して怪我をするのが一番問題だ。なので、懇親会前日と当日は完全オフとなっている。

「……暇じゃね？」

？会場内の宿泊施設。その部屋のベッドに寝転がり、おれは端末でテキストを読んでいた。本当に何もすることがない。あまりにも退

屈なので、机に向かって書き物をしている理澄に話し掛けた。

「そうかな。まあ、あれだけ頻繁に模擬戦を吹っかけてたら、反動で暇に感じるのかもね」

「直近は練習もしていたけどな。とりあえず、何も出来ないのが……」  
「本番前に大怪我、っていうのもよくある話だし。学校側の心配も分からなくはない。一高に勝たなくちゃいけないからね」

「勝つって言えば……。なんか、大会委員から届いてたよな。もしかして、あれはお前がやったのか？」

「一ヶ月程前、大会運営委員会からの文書が各高校に送られてきた。内容は「飛行魔法の使用禁止」や、「目潰しなどの危険行為の禁止」などのルールが追加されたことだ。

「今年就任した大会委員長のさ、不倫の証拠。僕、持ってるんだよね。だから、結構顔が利くんだよ」

「うわ、可哀想……」

「？思わず、そう呟いてしまう。大会委員長の人生に幸あれ。

「でも、ソイツをそのポストに置いてあげたのは僕。感謝してほしいくらいだね。そもそも、不倫することがまず良くないよ」

「確かに……。けど、どうして急に？」

「九校戦のルールはガバガバ過ぎる。未来の後輩の為にも、整えておいた方が良い」

「はあ……。それはまた……」

「？決まりを更に厳しくするのが趣味なのか。とんだマゾヒストだ。普通なら、そのルールの穴を突こうとするだろう。」

「でも、正攻法で勝たないと。そうだろ、ヤク？」

「？反論の余地も残さない程に、徹底的に勝利する。それが、おれ達三高の目標だった。成る程、そういうことか。」

「そーいや、お前さつきから何書いてるんだ？」

「？おれは腹筋を使って起き上がり、壁際の机に寄っていく。デイスプレイには、ずらずらと文字が並んでいた。

「激励会の演説文。一条に読ませて、皆の士気を高めさせようと思つて」

？顔を画面に向けたまま、理澄は言葉を返す。

「良いなあ。演説とか羨ましい。おれじゃダメなのか？」

「普通に迷惑だから、やめて欲しい。メンバーのメンタルに甚大な被害が出そうだ」

？酷い言われようである。しかし、ここは聞き流しておこう。

「とにかく、目算がギリギリだからね。新人戦を完全に捨てて、本戦に絞るとはいえ限度がある。絶対優勝しなきゃ、OBとかからバツシングが来そうだ」

「いや、それは分かる。けど、行きのバスでこっそり見せてきた点数予想シート、新人戦女子の点数があまりにも低過ぎないか？ お前、男尊女卑思想だったりしないよな？ それなら、普通に付き合い方を変えたいんだが」

？理澄が「誰にも見せるな。特に吉祥寺には」というメッセージと共に送ってきた点数予想シート。その数字はあまりにも悲観的なものだった。一番点数が取れていないのは新人戦女子の項目。ほぼ全ての競技でトップ3を一高に取られると、彼は予測していたのだ。

「精一杯、女子を尊重した結果がそれだ。大体4位には入ってるだろう？」

「吉祥寺が前に書いてたやつは、もう少し点数は良かったぞ？」

「一高には達也がいる。アイツがエンジニアで出てくると、もう何もかも狂ってくる。恐らく、新人戦女子は結構出張ってくるぞ」

「ああ、アイツか……」

？司波達也。血縁上、おれの従兄弟だ。しかし、彼は四葉の一族と見做されていない。序列の低い使用人などは、あからさまに彼を見下している。だが、彼は魔法工学に造詣が深い上、一部の魔法に限定するなら実力はかなり高い。

？特に、彼の持つ固有魔法の「分解」と「再成」は脅威だ。特に「分解」を応用した戦略級魔法、「質量爆散」マテリアル・バーストは下手に使えば世界を滅ぼす。

？それを防ぐ為に、彼には常時ストッパーが掛けられており、「誓約」オースという魔法で、深雪が持つ魔法力のリソースを一部割き、達也

の魔法演算領域をある程度閉じている。そして、おれがその魔法を行  
使していて、おれだけがその魔法を解除することが出来るのだ。

?しかし、おれと達也の関係はそれだけに留まらない。一時期同じ  
学校に通っていたとか、彼と彼の妹に魔法を掛けたとか、そんな瑣末  
なこととは違う。

?あまりにも、おれ達は正反対なのだ。

?叔母様の息子で、物質構造に干渉出来る達也。お母様の息子で、  
精神構造に干渉出来るおれ。これが、逆だったら良かったのに。

?どちらにしろ疎まれるのであれば、物質構造に対する才能が欲し  
かった。お母様の魔法に似た魔法を使えるようになりたかった。た  
だ、お母様に褒めて欲しかった。

「深雪だけを担当してくれば良いんだけど。そんな訳無いだろう  
し。出来る限りの手は打ったけど、五分五分だよなあ……。手首でも  
折ってやろうか。ああ、ダメだ。アイツはすぐに治しちゃう」

?おれが柄にも無くセンチメンタルになっている間も、理澄はぶつ  
くさと文句を言っていた。こっちの顔が見えていないからだろう。

?五分以上も彼は愚痴を零し続け、ようやく椅子をこちらへと回転  
させた。

「……勝とう。絶対に勝とう。ここまでやったからには、もう後には  
引けない。必ず、三高を総合優勝に導く」

?彼はそう呟いた。おれも、同じ気持ちだった。



?その頃、第一高校では明日の出発に向けて、校内で最終チエック  
が行われていた。選手は原則休みだが、役職を持っている生徒はそう  
いう訳にもいかない。生徒会、風紀委員会、部活連の生徒、そして有  
志メンバーは今日も学校へ登校していた。

「何とか目処がついて、本当に良かった! もう、今年はバタバタだっ  
たものだから……」

?生徒会室では、真由美がだらしなく机に突っ伏していた。

「会長。いい加減、ちゃんとして下さい」

「あー……いいのよ、リンちゃん。ここには気心の知れる仲の子しか、居ないんだから。ね、達也くん？」

「何故、ここで俺に話を振るのは分かりませんが……。まあ、俺も市原先輩には同感です。仮にもレディが、そのようなことでは問題かと」

「れ、れれれレディ!？」

？達也の斜め上からの切り返しに、真由美は目を白黒させる。彼女は頭を抱えながら、「いや、嬉しくない訳じゃないけど……。」とモゴモゴと口籠る。

？達也の横に座っていた深雪は、自身の身体を兄にぴったりとくっつけた。そして、拗ねたような口調で達也にこう言う。

「お兄様、私にはレディと仰ってはくれないのですか？」

「確かに深雪は、どこに出しても恥ずかしくない淑女かもしれないけど……。遠くに行ってしまうのが寂しいから、まだまだ子供でいて欲しいな」

？達也は深雪の柔らかな黒髪に自らの指を入れて、優しい手付きで梳いた。深雪は目を瞑り、彼の手に身を委ねる。

「その、いつも思いますけど……。司波君達って、本物の恋人みたいですね……。」

？その様子を正面から見ると、あずさがしみじみと呟く。何なら、彼女の方が恥ずかしそうだ。

「あー！ もう！ 変な空気になっちゃったじゃない！」

？復活した真由美が立ち上がり、机をバンバンと叩いて、場の空気を何とか戻す。

「——さて。だけど、四月からの騒動を考えると、九校戦の準備が何とかなったのは本当に奇跡だわ。あんなの、前代未聞よ。あーちゃんの『梓弓』を二回も使うことになるなんて」

「ええ……。私も、まさか使うことになるとは思いませんでした」

？真由美の言葉に、あずさは頷く。というのも、夜久の置き土産とも言うべきあの演説は、一高に多大な影響を残していったからだ。

「制服の真実」を知ってしまった二科生らは、荒れに荒れた。

? 怒りに任せて暴れ出すような、血の気の多い生徒も現れだした。同盟に参加するまではいかなかった生徒達も、心情は同盟寄りに変わっていった。

? 魔法技能による差別を無くせ!

? 全ての生徒に平等な教育を!

? 一科生だけを優遇するな!

? ——そのような主義主張を掲げた同盟の運動は、日に日に加速していった。

? 校内の同盟の正体である「エガリテ」。その上位組織である「ブランシュ」を理澄が壊滅させていなければ、事態はもっとややこしいことになっていた筈だ。一高に入学出来なかった彼は「一度くらいは原作介入」と称して、ブランシュのアジトを襲撃していた。それは、ラツキーなことにより高を良い方向に転がしたのである。

? 制服の件は、学校側の不手際であることが既に明らかになっていく。格好の叩き相手を見つけた生徒達は、こぞつて「体制側」を批判した。つまり、ターゲットは職員室や生徒会、部活連などである。

? しかし、生徒会には「七草」、部活連には「十文字」がいるのだ。第一高校の校長である百山は、特別十師族を鼻屑する人間では無いのだが、この状況では忖度をしない訳にもいかなかった。故に、職員室は重い腰を上げて、事態の収拾に動き始めた。

? まず、校内の巡回の頻度を上げた。その為に風紀委員会の人員を倍に増やし、それでも足りない分は生徒会や部活連から人間を割くことで対処。だが、生徒だけでは抑止力があまり見込めず、やむなく教員も見回りのシフトに入ることに。それでようやく、暴動は収まりをみせた。

? ただ、この対処法だけだと、いずれは均衡が崩れるのは目に見えている。なので、一番に今回の騒動の遠因となった、津久葉夜久を退学処分にした。彼は学校だけでなく「七草」にも喧嘩を売っていたから、処分の理由は付けやすかった。

? しかも、夜久は一科生だ。「学校の秩序を壊す者はコースによら



ず排除する」という強硬な姿勢を見せつけるには都合が良い。

？実際、夜久が退学した後は、二科生や同盟の動きも弱まってしまった。日和つたと言えればそれまでだが、彼らだつて退学処分になるのは嫌だろう。

？そして、そうなるのを狙っていたかのように、タイミング良く「校章刺繍注文フォーム」が学内ネットに設置された。二科生専用ではなく、全校生徒に向けた「私物に校章を刺繍するサービス」だったが。「ですが、これがきつかけで、兄の制服に花が咲いたのは喜ばしいことです。——以前よりも、よくお似合いだと思いますよ、お兄様」

「大して変わりはないだろう」

「いいえ！ 私にとつては、とても大きな変化なのです！」

？深雪はまるで自分のことであるかのように、嬉しそうな顔をして胸を張った。

「けど、刺繍が付いたのは良かったわね。達也くんはエンジニアとして出る訳だし、懇親会の制服に校章が無かったら流石に困るじゃない。前のままなら、ブレザーを借りなくちゃいけなかったかも」

「そうですね。司波君も、折角なら自分の制服の方が良いでしょう」

「やはり借り物はサイズが微妙に違ってくるので、それはラッキーだったかもしれません」

「淡々としてるわねえー。もうちよつと、素直に喜んだら良いのに」

？達也の悟りきつたようなセリフを聞き、真由美が呆れたような顔をした。

「まあ、退学した生徒も一応顔見知りでしたからね。手放して喜ぶ訳には、というのが」

「えっ、そうだったの!? 全然知らなかった……」

「仲が良い、とかそういう訳では全く無いです。本当に言葉通り、顔を知っている程度ですがね」

？達也と深雪が夜久と会ったのは、沖縄戦から戻ってきた後の一度だけだ。その際に、彼は二人に「誓約<sup>オース</sup>」を行使した。

「そうなんだ……。あの子、三高に転校したらしいのよ。深雪さんは女子代表だし、達也くんも担当する選手は皆女子だから、あまり関係

は無いだろうけど」

？真由美は世間話の延長として、その話をしたのだろう。しかし、達也と深雪にとっては全く違う意味を持って、向かってきたのだった。

？第三高校に在籍する、四葉の血縁者が二人。偶然にも、彼らの立ち位置は兄妹と鏡合わせだ。どちらの学校に通っていても変わらない。二人を取り巻く波乱の日々は、入学から始まった。そして、それは校内という枠を超えて、学外へと飛び出していく。

？この時間を駆け抜けた先にある未来は、まだ誰も知ることは出来なかった。

走れ！ K n i g h t！

？懇親会当日の昼。昼食を兼ねて、三高の選手や応援メンバー、教員とOB OGなどを集めた激励会が行われた。このようなイベントは、三高の歴史でも異例だという。

？貸し切ったホテル内の宴会場は人でいっぱいだ。壁には「三高絶対優勝」と書かれた、大きな横断幕が掲げられている。理澄が書道部に書かせたらしい。この辺りの準備は、全て彼が取り仕切っていた。

？逆に、競技に関する準備にはほぼ関わっていないかった。あの点数予想シートも、彼が個人的に作成したものだ。

？チームリーダーである風紀委員長、生徒会長、後援会代表と挨拶が続く、トリは一条の演説。理澄が練ったそれは、意外に好評。感極まって泣き出す人も居たほどである。

？そして、おれはどうしても一条よりも目立ちたくて、昨日から演説させると理澄に粘りまくっていた。その結果、「一条の演説の後にマイクを奪って、シユプレヒコールするのなら良いよ」という許しを得た。あの一高の事件をオマージュして、笑いに変えてしまおうという趣向のようだ。

？とはいえ、本番でそれをするに不安が無い訳では無かった。しかし、実際には大いにウケた。本当に良かった。恙無くプログラムは進み、激励会は終了した。終わったあと、何となく一体感が残った。それを見越して催したイベントではあるのだろうか。

？懇親会という名のパーティは、夕食の時間。それには、まだまだ時間がある。おれと理澄は、一条と吉祥寺が泊まる部屋に遊びに行っていた。

「武倉、あんなの良くやったね。卒業生もかなり呼んでたし……。『激励会開くから予算くれ』と職員室に言いに行った、って聞いた時はびっくりしたけど」

？吉祥寺が、先程の会についての感想を述べる。

「僕は、そういう仕事の方が向いているから。食事の仕出しは、一条家が懇意にしてる店に頼んだだけだね。——紹介してくれてありがとう、一

条。おかげで予算を節約出来た」

？理澄が、一条に軽く頭を下げる。それに対して彼は「気にするな」と言い、ヒラヒラと手を振った。

「ごちんごそ。今までに無い感じで楽しかった。来年もやりたいな、あれ」

「そう言うと思って、マニユアルは残してる。まあ、続くかは結果次第だけど。盤外戦術の一環としては、悪くないと思うけどね」

？他の学校には無いイベントで、優越感や特別感を感じさせる。それによって、他でも無い「第三高校」に通っているのだ、という誇りを持たせたかったのだ。変に「一丸となつて」や「三高の自覚を持つて」と言葉のみで煽るよりは、場の雰囲気のを借りた方が良い場合もある。

「思うんだけど、これ体育会系の校風があったからだよな。他の学校でやったら、あまり盛り上がらなかったんじゃないか？」

？三高は他の学校よりも、実技に力を入れている。雰囲気は体育科高校や、国防軍などに割と近い。卒業後の進路も、軍関係が多いのだ。「ヤクの言う通りかもね。四高だったら、ウケなかったかも」

「確かに。三高で良かったよな！」

？一条が嬉しそうに言う。どれだけ、学校が好きなんだ。よく考えたら、彼のCADはスクールカラーの赤色。その上、私服も大体は赤だった。

「それにしても、一高は複雑だろうね。退学した生徒が三高にいるんだから。他の学校だって、津久葉のことは知ってるだろうし」

「良い宣伝になるんじゃない。『一高よりも三高の方が懐の深い学校だ』って。言っても、優秀な生徒は東京に集まりがちだから。金沢まで来るのはあまり居ない」

？金沢は別に田舎でも無いが、東京と比べてしまうとやはり微妙だ。しかも、敵国の大亜連合と新ソ連が、海を挟んで向こうにある。実際、過去に佐渡侵攻もあったので、「日本海側はやっぱり危ない」と思われがちだ。カリキュラムが実技偏重なもの、「危ない場所にあるので、自分で何とかさせます」という方向性もあるかもしれない。

「今年は俺とジョージが入ったし、武倉も津久葉もいる。けど、来年はどうなるか分からないしな……。活躍して、人を呼び込めたら良いんだが」

「その為には勝たないと。一高を下して、ようやく価値を見せられる」  
「？おれ達は顔を見合わせ、領き合った。おれは「一高に仕返し」だし、一条と吉祥寺は「次世代獲得」。理澄は、何を一番の目的としているか分からない。だが、「優勝」という目標だけは全員同じだった。」



「？ホテルの大ホールを貸し切り、九校戦前のパーティは行われる。形式は立食パーティーの形式で、おれはこのタイプのパーティが好きだ。人と話さず、延々と食べ続けられるからだ。間が持たない、とかそんなこととは無縁の時間を過ごせる。」

「？おれは悪い意味で顔が知られているので、ここでは変に目立とうとせずに、一条達と固まっていることにした。他校生は一条を見て、「クリムゾン・プリンスだぜ……」とか「カツコイイ……」とか言うので、他の有象無象には焦点が当たらない。正直、これは助かる。」

「？一条は上級生に連れられて、他校の生徒会長などに挨拶へ行く。すると、必然的に一緒に居るおれ達も付いていくことになる。つまり、一高の生徒会の面々との遭遇は避けられないのだ。しかし、同級生達はおれが出てくることによる「悲劇的結末」カダストロロワイを避けたかったらしく、一高生が来た時には先輩から皆かなり距離を取った。けれども、一高を意識せずにはいられなかったようで、遠くから彼らはそっと眺めていた。」

「見ろよ一条。あの子、超可愛くね？」

「超って……。お前、いつの時代の高校生だよ」

「えっ、僕めちやくちや超使ってるけど。日本語の最上級表現じゃん」  
「武倉は時代がズレ過ぎなんだよ！ 絶対、コイツの言葉使いもお前の影響だろ」

「そんなの、どっちでも良いんだって！ ——見ろって。ホント、あの

子可愛くね??? 顔が小さい。芸能人か？」

？同級生の一人が深雪を見て、はしゃぎ始めた。おちやらけた性格の彼は九十九という男。名前の通りに百家の一つ、九十九家の生まれである。空気の流れを操る魔法を得意としていて、新人戦バトル・ボードの代表だ。

？彼に辛辣なツツコミを浴びせているのは、理澄と同じ新人戦モノリスのメンバーの水無瀬。「水」と付く癖に先祖を辿ると、土のエレメンツの系譜だという。水が無いから草が生えず、土が剥き出しになっている……という意味らしい。移動系魔法が得意で、掘り起こした土砂の塊をぶつける「陸津波」が得意魔法だ。

「——お前なんか絶対相手にされないって。あんな美少女、高嶺の花だろ」

「うるせー！ 俺じゃ駄目でも、一条ならいけるかもしれないんだ！ そのおこぼれを俺たちは貰うんだよ！」

「威張って言うことじゃねえ。情けなさ過ぎるわ。しかも、俺たちを勝手に数に入れるな」

？えらく馬鹿な会話が繰り広げられるのを、先程取ってきたチキンを齧りながら聞く。盛り上がっているのは、九十九一人だけだが。

「津久葉、元は同じ学校だろ？ 接点とかさあ」

？あるにはある。しかし、言いふらすと面倒なことがやってきそうだ。

「別に無い。同じ学校、同じクラスだからって、絶対仲良くなるとか無いだろ」

「残念だ……。どうしたら良いんだよ！」

？九十九が頭を抱える。すると、彼の肩に理澄が手を置いた。

「諦めるな。まだ手はあるぞ……。九十九。直接話し掛ければ良いんだよ。よし、僕が呼んでこよう」

？元から知り合いであることを隠し、勇気あるパイオニア感を出している。これは、明らかに誇大広告だ。

「おい、武倉！ 正気かよ!？」

「不審者に思われたらどうするんだ！」

「任せな。確実に任務をこなしてきてやるよ」

「お前、そんなことして……下手すれば死ぬぞ!!」

「やめとけて!」

? 混乱する仲間達にサムズアップを残し、彼は一高生の集まる場所へと歩いて行った。

「すげえな、アイツ……。心臓が鋼で出来てる。事象改変したのか?」

「しかし、武倉が成功すれば……。俺たちは美少女とお近づきになれる!」

「付き合えるとは言っていないけどな」

「津久葉! それを言うんじゃない! ——って、どうしたんだ、一条? さつきから呆けた顔して」

? 水無瀬の指摘で、おれも一条の異変に気付いた。彼はずっと、一高の方——つまり、深雪の姿を目で追っているのだ。

「ああ……。将輝、さつき『彼女は誰なんだ?』って僕に聞いたきり、こんな調子でさ」

「一条が!? 珍しいな。普段なら、そんなのどうでも良さそうなのに」  
「黙ってても、向こうから寄ってくるもんな。顔良し、実力良しで、一条の跡取り。何とも羨ましい……」

? その時、理澄が深雪をこちらに連れて来た。皆は緊張して、時が止まったかのように固まる。

「一条、こちらが司波深雪さん。お前が三高のエースだって話したら、是非お会いしたいと」

? めちやくちや適当なことを言う理澄。深雪の表情を見るに、そんなことは一言も言っていないなかったのだろう。

? 一条は鯨張った動作で、深雪の前に立つ。

「はっ、はじめまして! 一条将輝ですっ!」

「初めまして、一条さん。司波深雪です。一高と三高は九校戦では敵同士。ですが、ひとたび舞台を降りれば、同じ魔法科高校の生徒です。

一緒に頑張っていきましょうね」

「そうですね! 頑張りますよう!」

「ええ。それでは、皆さん。私は失礼させていただきます」

? 深雪は丁寧に一礼し、さっさと戻って行った。ここに居るのが、物凄く嫌だったに違いない。多分、理澄は深雪と初対面であるという印象を一高側に付けたかったから、話し掛けて来ただけだったのだ。そのダシに一条を利用したのだろう。

? ぼんやりと突っ立つたままの一条を残し、おれ達は彼から離れてコソコソと話をする。

「おい、あれってさ……」

「馬鹿野郎！ それを口にするな！ 将輝が可哀想だろ！」

「お前ら、絶対本人に言うなよ。今一条に潰れられたら、計算が完全に崩れる。負けられちゃあ困るんだ」

? 理澄の言葉に、この場に居る全員が神妙な顔で頷いた。

? 一条の初恋は、恐らく叶わない。それは皆分かっていたが、九校戦の間は誰もそのことに触れないよう必死だった。もしバレたら、その時点で三高の負けは確定するからである。



? 夕食後、おれは一人ホテルの屋上に上がった。夜風は涼しいが、少し肌寒い。所々に配置されている街灯が九校戦会場を幻想的に照らしている。ベンチがあつたので、とりあえずそこに腰掛けた。

? 第三高校に来て、生活がこれまでとはがらりと変わった。確実に生きやすくなっている。目立ちたいと思って何か行動を起こした時、一高ではここまで望んだレスポンスは返ってこなかった。意外と、校風が合っていたのかもしれない。

? 最初に一条などと関わった時は、憎しみを腹の底に抱えていた。彼らが羨ましいからだ。それでも、一条や理澄は十師族の割に気安いところもあつた。理澄がおれを三高に呼んだ理由は、「三高が優勝する為」だったし、光の当たる場所で生きている筈の一条は、深雪に緊張して挙動不審になっていた。皆、単なる普通の人間だったのだ。

? 何となく庭を散歩したくなって、屋上から飛び降りた。慣性制御魔法を併用すれば、安全に降りることが出来る。魔法師しかないこ



の場所は無断の魔法使用も許されているので、使っても構わないのだ。

「うわっ！」

？落下地点近くには男子生徒が一人居た。彼も散歩中か何かだったのだろう。暗かったので、気づかなかった。危ないところだった。「ごめん。大丈夫だったか？」

「何とか……。——って、あの退学処分の人！」

「あれ、知ってる？」

「現場を見たんだよ！ 僕、一高生なんだ」

？こんなところで一高生に会えるとは思わなかった。しかし、彼の反応も怖がるなどでは全く無くて、有名人を見た時のようなノリだ。何だか、複雑な気持ちである。

「あれは本当にびっくりしたよ。十師族、それも七草に喧嘩を売るなんて……。学校も辞めさせられてたし……。まさか、三高に居るとは思わなかったけど」

「知り合いに通ってる奴がいて、誘われたんだ。そうじゃなきゃ選ばなかったし、ラッキーだったな。——それじゃあ。お互い、九校戦頑張ろうぜ」

？適当に話を切り上げ、一高生くんと別れようとした時だった。彼は「待って！」と叫んだ。びっくりして、おれは足を止めた。

「……実は僕、代表でも何でもないんだ。僕は二科生でさ、九校戦には懇親会のバイトで来ただけで……」

？彼は拳を固く握り締めている。やばいぞ。地雷を踏んだかもしれない。どうやって逃げるかを考えていたら、それよりも早く彼は再び口を開いた。

「勿論、出れないのは悔しいし、魔法を上手く使えない自分が不甲斐無いと思う。——だけど、君のおかげで、必要以上には自分を卑下しなくても良いようになったんだ。君がああ演説をしたから、一高の二科生制服には刺繍が付いた」

？おれは目を瞬かせた。そんなことを言われるとは、思わなかったからだ。

「見た目だけなら、もう一科も二科も変わらない。変えてくれたのは、紛れも無く君なんだ。だから、本当にありがとう」

「?正直、あの演説は自己満足だった。七草の演説の矛盾を突いて、大騒ぎしてやろう以外の動機は無い。退学処分になったのは想定外だったが、二科生のことを考えてやった訳ではなかったのだ。」

「なんか、そう言われると照れるな……。褒めすぎじゃないか?」

「?口から出てきたのは、そんな素直な感想。理澄だったら、こんな時に気の利いたことの一つでも言うのだろうか。」

「僕はそれ程じゃない。二科生の中には、君のことをもつと神格化してる人も居るし。これは純粋な感謝の気持ちなんだよ」

「……いや。こちらこそ、ありがとう。——ところで、君の名前は?」

「一年E組の吉田幹比古。幹比古って呼んでくれ」

「そう。幹比古、来年は本戦で会おう。待ってるよ」

「?握手を交わし、おれは幹比古と別れた。」

「?ホテルに戻る道を鼻歌を歌いつつ歩く。お母様に褒められるのはまた違う充足感が、おれの中を満たしているのを自覚した。」

「津久葉! やつと見つけたよ。どこ行ってたのさ?」

「?廊下で吉祥寺に会った。どうやら、おれを探していたらしい。」

「先生がアイスの差し入れしてくれてさ。メンバー全員に集合を掛けているところなんだ」

「アイス!? いいな、それ」

「?どうやら、集合場所は風紀委員長の部屋らしい。おれは吉祥寺と連れ立って、そこへと向かう。」

「……なんか、さつき見つけた時のことだけど。津久葉、嬉しそうだったね。何か良い事あった?」

「ちよつとな。——じゃつ、お先!」

「あつ! 待ってよ!」

「?吉祥寺を置いてきぼりにして、思い切り廊下を駆けて行く。気分は最高だった。」

## 崩れた未来が目にしみる

？九校戦1日目は、本戦スピード・シューティングが行われる。それは当初の三高の目論見通りに、真紅郎が優勝した。上級生達も奮闘して、男子の部は他に三年生が三位入賞。女子の部は一位こそ一高に取られたが、二位と三位には入ってきている。

？そして、2日目のクラウド・ボールは理澄が優勝。他の代表メンバーも何人かは入賞はしているので、悪くない結果と言えるだろう。？とはいえ、まだ序盤。状況次第では一高に抜かれるから気は抜けない。それは一高側も同じで、虎視眈々と逆転の機会を狙っている。例年のように一校だけが大きくリードしている訳ではないので、先の展開が全く読めない。

？しかし、3日目のアイス・ピラース・ブレイク本戦。そこで大番狂わせが起こった。最大の優勝候補であった十文字克人が、三回戦で夜久に負けて敗退したのである。これまでの九校戦で負け無しだった彼が「勝てなかった」という事実は、人々に衝撃を与えた。

「十文字君が三回戦落ちするなんて……」

？第一高校の控え室となっている天幕内では、真由美が顔を青ざめさせていた。彼女以外の生徒も、皆顔色は良くない。それほど、「十文字」の敗北は大きいものなのだ。

「しかも、当たったのは一条君じゃなくて、『あの』津久葉君だなんて……」

「驚きましたね……。あそこまでの実力を持つていたとは……」  
？普段は冷静な態度を崩さない鈴音も、今日ばかりは歯切れが悪い。実は、問題があったのはアイス・ピラース・ブレイクだけでは無いのだ。バトル・ボードも、女子は摩利が優勝しているものの、男子の方は三高に取られている。気が滅入るのも、仕方のないことであった。

「どうりで退学処分が決まっても、態度が大きかった訳ね……。あれだけの才能があれば、何処の学校でも拾ってくれるもの」

「三高は実戦向きの魔法に特化していますからね。受け入れ先として

は、良かったのかもしれませんが……。こちらとしては、あまり喜ばしいことでは無いかと」

「二条君以外にも、化け物みたいな一年生が何人も居るなんて。そんなの、私聞いてないわよ……。」

？真由美が近くにあったパンフレットを丸め、机をバシバシと叩く。

「終わったことばかり見ている、仕方ありません。気持ちを切り替えるべきでしょう。作戦スタッフを召集し、緊急会議を開かなくては いけませんし」

？端末の電源を落とし、鈴音は淡々とそう告げる。そして、幕の向こうから様子を伺う、不安そうな顔をした一年生達に彼女は声を掛ける。

「本戦の借金を一年生の皆さんには、押し付けたくはありませんでしたが……。この状況では新人戦の点数が、そのまま優勝に懸かっています。無責任で申し訳ありませんが、ここは皆さんに頼らせて下さい」

？一年生達は皆、押し黙っている。何と答えて良いのか、分からないのだ。

「……頑張ります！」

？そんな中、雫が最初に声を上げた。いつもは口数の少ない彼女が、そう力強く言い切ったのは珍しいことだ。

「一高に入学する前から、私……。何度も九校戦を観に行つて！先輩方と一緒に優勝したいって、ずっと思っていました！だから、絶対勝ちます！」

「わたしも同じ気持ちです！」

？雫に呼応して、ほのかもそう叫んだ。それがきつかけとなり、他の生徒達も口々に決意を述べた。

？いつのまにか真由美が立ち上がり、鈴音の横に立っている。彼女は唇に笑みを浮かべ、全員の顔をゆっくりと見た。

「……皆さん、ありがとう。——全員で、優勝しましょうね！」

？真由美の言葉に、一年メンバー達の表情も緩む。暗かった雰囲気

がそれなりに改善され、皆がそれぞれ天幕から引き揚げ始める。それを眺めながら、ポツリと鈴音が眩く。

「今まで、あまり実感が湧いていませんでしたが……。意外と、良いものですね。……後輩というものも」

「あれ。知らなかったの、リンちゃん？ 後輩って、可愛いものなのよ？」

「そうですね。——ところで、後輩と言えば。司波君と司波さんは、何処へ行ってしまったのでしょうか？」

「……そういえば。すっかり忘れてたわね。まあ、良いわよ。あの二人はそんなことで、動揺するタイプでも無いし……」

？その言葉で、達也と深雪のことを片付ける真由美。どうせ、臨時の作戦会議で顔を合わせるだろうから、わざわざ会いに行く必要の無いのもある。

「さてー。摩利の所に行こうかな。せっかく優勝したのに、何だか悪いことした気になってるでしょうから……。思い切って、お祝いをしてあげた方が良いわ」

？真由美達は天幕を出て、会場の何処かに居る筈の摩利を探しに行くことにした。タイミング良く、服部もテントに戻ってきたからだ。仕事を押し付けたと言えなくもないが、真由美を敬愛している彼なら喜ぶだろう——その信頼を、後輩愛と言うのかどうかは……。誰にも分からない。



？その頃、達也と深雪は部屋に戻って、男子アイス・ピラーズ・ブレイクの試合映像を確認していた。

？端末と同期させたモニターには、夜久と克人が激突した三回戦の様子が映し出されている。ランプが上から点灯していき、最後に青色のランプが点いた。その瞬間、魔法式がエリア内に吹き荒れる。1秒も経たないうちに、克人側の氷柱は全て溶けていた。夜久が行使した広域干渉魔法「ムスペルス Heim」によるものだ。彼は、克人の「ファ

「ランクス」が発動するよりも早く、魔法を発動していたのだった。

「？しかし、夜久の魔法発動速度は極めて平凡。普通なら、克人よりも早く魔法式を展開出来ない筈であった。」

「……間違いない。これはフラッシュ・キャストだ。手首のCADは使っているフリだ」

「？四葉家の秘匿技術「フラッシュ・キャスト」。

「？洗脳技術を応用した、記憶領域に起動式をイメージ記憶として刻みつける特殊な方法を使う。それによって、CADからではなく記憶領域から起動式を読み出すことを可能にするのだ。そして、起動式の展開・読み込み時間を省略して、スピードを大幅に短縮させる。」

「でも、お兄様。フラッシュ・キャストはCADを使わずに、CADと同等のスピードで魔法を発動する技術ではありませんか？」

「普通ならね。恐らく、変数を固定しているから、少し速くなるのだと思う」

「サイズや威力などを固定していたとしても、座標は逐一決め直す必要があるのでは？」

「多分、それは試合開始前に決めておいたんだ。確か、夜久は『エレメンタル・サイト精霊の眼』を持っていて」

「？エレメンタル・サイトアイデア拡張スキル「エレメンタル・サイト精霊の眼」は、スキル所持者の得意魔法によって、特性が分化することがある。」

「？達也であれば「分解」と「再成」の為に、物質構造の理解とエイドスの遡及が可能である。そして、夜久は「精神構造干渉」の為に、精神座標の精密な指定を実現している。その能力は、現実世界にも波及効果を表していた。つまり、それによって、起動式に変数を代入して座標を定義する手間を省いたのであった。」

「それって、反則ではありませんか？」

「言ってしまうえば、ズルだ。だから、一条とは戦わずに同率1位で終わらせたんだろう。2回もやるのは、流石にマズいからな」

「二回戦まで普通にCADを使っていたのはフェイクでは無く、十文字先輩と戦う為に温存していたという訳ですね……」

「？深雪は納得したように、何度か頷く。」

？二人がそう結論付けたところで、ドアのチャイムが鳴った。深雪は達也に一度目配せし、ドアを開ける為に席を立つ。

「やつほー、達也くん。それに、深雪もやつぱりここに居たのね」

？扉の向こうから、顔を覗かせたのはエリカ。その後ろには、レオや幹比古、美月も居た。彼らはそろそろと部屋の中に入ってきて、適当な場所に腰掛けた。

「あら、エリカ。どうしたの？」

「遊びに来たのよ。それに……。今年の棒倒し、あるでしょ。そのことで、美月が達也くんに聞きたいことがあるんだって」

「そうか。どうしたんだ、美月？」

？あまり気は進まなかったが、一応達也はそう質問してみた。

「達也さん達は、同じ時間に女子バトル・ボードを観ていたんですね？　けど、エリカちゃんは観たく無い、って言って。だから、わたし達は男子棒倒しを観に行っただですよ。それで——」

？達也の懸念通り、美月の疑問は「夜久はCAD無しで、魔法を使ったのでは無いのか？」ということだった。CADから出た起動式が、「ムスペルスヘイム」の効果が現れる前にキャンセルされたのを見たらしい。

？舌打ちをしたくなるのを、懸命に彼は堪えた。美月が悪い訳では無いのだ。悪いのは、夜久と理澄である。

？自分がフラッシュ・キャストを使ったのでは無いし、彼らの為に隠蔽に協力する義理は無い。だが、このままだと彼女は危ない——コンマ数秒の間に、彼はそこまで考えを巡らせる。

？当たり前だが、達也は理澄が転生者だとは知らない。故に、何かあれば本気で、理澄が口封じに動くと考えていた。そもそも、彼は四葉の同世代の中でも、一番「四葉らしい」人間だからだ。

？感情の希薄な達也は、美月が死んでしまっても本気で哀しむことは出来ない。けれども、数ヶ月一緒に過ごした仲間が亡くなって、平気な顔でいられるような人間にはなりたくなかった。何よりそんな態度を取れば、深雪が達也の在り方を思い出し、悲しみに囚われてしまうだろう。それは、彼にとっても辛いことだ。

「俺は映像で見ただけだから、正しい見解とは言えないかもしれないけど……」

？そう前置きをし、達也は咄嗟に考えた言い訳を述べる。

『ムスペルスヘイム』とマルチキャストで、自陣の氷柱を守る魔法を使ったんじゃないかな。いくら速く発動したとはいえ、成功しなかつたら自分の陣地が危ないからね。だけど、成功したから、その起動式はキャンセルしたんだろう」

？そんなことはあり得ない。それは、アイス・ピラーズ・ブレイクにおける、克人の戦い方の傾向を調べていけば簡単に分かることだ。

？試合序盤の彼は「フアランクス」で自分の陣地を守り続けるだけ。相手の繰り出す魔法を全て防ぎ切ったあと、攻撃に転じるのである。それだけ、高い魔法技能を持っているという自負の表れだ。

「なるほど……。そうですよね、自分の柱も守らないといけませんものね……。達也さんに訊いて良かったです。ありがとうございます」  
？しかし、人の良い美月は、達也の言葉を素直に受け入れた。自分よりも魔法に詳しい人間が言うのだから正しいだろう、という判断もあつたかもしれない。

「——そろそろ、夕食の時間だな。こうして集まってるし、何か買ってきてここで食べようか？」

？細かいことを突っ込まれる前に、急いで話題を変える。

「良いじゃない。さんせー！」

「良いですね。そうしましょう」

「自動調理機、何処に置いてあつた？ 幹比古、覚えてねえか？」

「ラウンジ近くに何台か置いてあつたよ」

？食事を調達する為に、全員揃って部屋を出た。エリカ達の少し後ろを、達也と深雪は並んで歩く。深雪が達也の方を見上げ、前には聞こえないくらいの声で囁いた。

「深雪は嬉しいです。お兄様自身は気付いていなくとも……。お兄様はご友人を案じる、お優しい心をお持ちなのですから」

「そうかな？ 自分では、よく分からないな……」

「そうなのです！ お兄様は私の誇りなのですから！」



? 気付かぬうちに、エリカ達は先に進んでいる。彼らは後ろを振り向き、「何か言った?」と尋ねてきた。

「何でも無いよ。——さあ、行こうか。……深雪」

? 達也は、深雪に右手を差し出した。彼女はその手を取り、嬉しそうに微笑んだ。

「……はい! お兄様と一緒になら、何処でも私は幸せです!」



? 僕——武倉理澄は転生者だ。その為に、前世の記憶を持っていて、この世界の行く末を知っている。

? 今、僕達が生きる世界は、前世ではフィクション小説の中にあつた。だから、人の命が紙屑みたいに軽く飛んでいくこの世界を、偶に現実だと思えない時もある。けれども、ここで生きて行かなくちゃならないのだ。

? だが、この世界は僕の持つ知識とは、少し差異があつた。

? 御当主様の息子である、津久葉夜久の存在。

? そんな人物は、原作には出てこなかった。勿論、原作に登場しない人間は幾らでも居る。真柴や椎葉、静といった分家の子供もそうだし、何より自分の存在もだ。しかし、何処か違和感を感じざるを得ない。

? 四葉の子供は、精神的な成熟が基本的に早くなる。死と隣り合わせの過酷な環境に日々置かれているので、防衛本能が働くのだろう。皆、昔から大人びていた。

? だが、夜久だけは違つた。彼は普通の子供よりも、更に子供っぽい。良く言えば、感情豊か。悪く言えば、自分を律せられない。

? 小学一年生の時、慶春会の会場だった和室を「プラズマ・ブリック」で破壊していたのを目撃したことがある。とにかく、誰かに構つて欲しいのだ。

? 高校生になっても、極度の目立ちたがり屋は治っていない。むしろ、悪化していると思う。魔法科高校を退学させられるなんて、どう

考えてもおかしい。彼を三高に呼んだのは、津久葉家に「何とかしてくれ」と頼み込まれたからだ。優勝云々は後付けである。

？実際に話してみると、頭の回転も早いし、まともなところもあった。だけど、僕はまだ彼を信用すべきかは決め兼ねている。頻繁にスポンサー様と接触している点も、気になるのだ。

？原作の知識があっても、僕の人生はままならない。逆に、知っているからこそ、ここまで振り回されているのか。何だか、生きることが嫌になってしまいそうだ。

？九校戦3日目の夜のこと。僕は文弥に呼び出され、一緒に食事をしていた。

「周公瑾に逃げられた？」

？僕は思わず、手にしていたフォークを取り落とした。

「こちらが動くよりも、早く勘付いたみたいで……。ごめん、理澄兄さん」

「いや、文弥は悪くないよ。横浜グランドホテルの件を握りつぶしたから、逆に警戒されたんだろう。それなら、僕の責任だ」

「公安や内情とかが何も動いてない状況で、無頭竜を壊滅させてたからね。あれだけ手際良くやれば、逆説的に四葉の仕業って思われそうだし……」

「まあ、それはそう。しかし、どうするかなあ……。もう、国外とかに逃げてんじや無いの？」

？周公瑾を消してしまうつもりだったので、予定が完全にズレてきてしまった。日亜戦争を起こす為に、方々の組織間を折衝するエージェントの役割は彼が担っている。だから、殺すなり行方不明にするなりすれば、横浜侵攻の話は立ち消えになる筈だったのだ。

「後で調べたら、その時間にちょうど東南アジアに向かう輸送船があったよ。多分、それだね」

「どうせ、日本に舞い戻ってくるだろうけど……。もう、中華街には行かないだろうね。また一から、探し直しか……」

？下手すれば、横浜騒乱編は避けられないかもしれない。今から、

憂鬱になりそうだ。

？だが、今の達也は「質量爆散」マテリアル・バーストを使えない。夜久が封印してしまっているからだ。恐らく、彼は封印を解いてやったりはしないだろう。夜久が達也に嫉妬していることは、四葉家でも知られていることである。原作よりは何かかなるだろう。

？とりあえず、攻めに来た侵攻軍には、横浜からおかえり頂こう。その後は海軍でも出して、適当な場所を占領し、講和を結んでしまうのが一番早いか。早急に根回しをしておかないといけない。

「その辺は、姉さんが今洗ってるところ。明日にはここに來るって」「ごめんね。本当なら、二人とも初日から居れたのに」

？文弥が亜夜子よりも一足先に会場にやって来たのは、僕にこの情報を伝える為だ。

「ううん、大丈夫。新人戦には間に合ったからね。理澄兄さんのクラウドは見れなかったけど……」

「ああ、あんなのどうでも良いよ。あれはもう、クソスポーツだから」「仮にも出場して優勝した競技なのに、酷いこと言うなあ……」

？実際、クラウド・ボールはスポーツとしては、あまり楽しいものでもないのだ。

？テニスじゃないので、コート内を走り回らなくても成立するのだが、そもそも前提としておかしい。コートの後ろの方に立って、飛んできたボールを無心でベクトル反転するだけ。どうも、作業的に感じるのだ。

？

「加重系魔法でボールを重くして、相手にぶつけてコート外に出すルールだったら、絶対楽しいのにね。それはレギュレーション違反になるんだよなあ……」

「二体、理澄兄さんはクラウドに何の夢を見てるの？」

？尤もな指摘を受けてしまう。けれども、スポーツなのだから、もっと楽しい方が良いに決まっている。スリルは多い方が、観客も盛り上がるだろう。

「と、ここで。文弥は一高と三高、どっちを応援してくれるの？」

? 食事をする彼の手が、ピタリと止まる。

「えつと……。その、一高かな。」

? 幼馴染よりも、憧れの「達也兄さん」の方が良いらしい。こう返ってくるのは分かっていたけれども、少しショックを受けてしまった。

## アンビバレント・アバウト

？おれ達は一条の部屋に集まって、新人戦の点数結果を難しい顔で眺めていた。元々、何個か一位を取られることくらいなら想定していた。一高は決して、弱小校などではない。

「全てじゃないとはいえ、新人戦女子で上位三つを一高に取られるとは……」

？吉祥寺は沈痛な面持ちで、競技名が書かれた部分をタップしている。

「早撃ち、棒倒し……。二つとはいえ、全部取られたのは痛い」

？理澄の予想が当たった形となる。司波達也は明らかに、三高の邪魔をしてきているのだ。いや、邪魔をしているという感覚も無いかもしれない。

？彼は目立とうと考えなくても、目立つことが出来る。

？片手間に行くことが、世界を驚嘆させるから。

？だからこそ、彼の才能を人々は理解せざるを得ない。どうやって折り合いをつけるかが、それぞれ違うだけだ。

？司波深雪は、崇拜することだ。

？黒羽文弥と黒羽亜夜子は、憧れることで。

？武倉理澄は、同じフィールドで戦わないことで。

？過程はどうあれ、彼らは「彼」を心底理解している。

？——でも、おれはどの方法を選べば良いのだろうか？ まだ、答えは出せていない。

「早撃ちとかは、確かに北山って子の魔法力は卓越してた。だけど、他の二人はそうでもない」

「棒倒しもそうだよ。北山さんが使った『共振破壊』と『フォノンメーザー』、司波さんが使った『氷炎地獄<sup>インフェルノ</sup>』と『ニブルヘイム』……。高等魔法を使えるレベルなのは、あの二人だけだった。——つまり、問題はCADの違いだ」

「あの競技の担当者は……。司波達也。アイツは何者なんだ？」

「それなら、もう調べてきたよ」

? 理澄が、さも最初から準備していたかのように、話し始める。彼は、こういった演出をするのが非常に上手い。

「彼は一科生ではなく、二科生だ。三高でいう、普通科だね」

「ということは、担当教師がいなくていいってことか!? よくそれで……」

「まあ、普通なら基準を下回る魔法師の才能は、その時点で出廻らしまいたいなものだよ。だけど、BSなどの一点特化した奴っているからね……。そういう意味では、紛れもなく彼は天才だ」

? 魔法に分類されない特殊技能を持つ、BS魔法師。「BSの一つ覚え」と揶揄されることもある彼らだが、特定の分野に限るならば、極めて優秀な結果を残すこともある。達也も、無理に分類すればBSに入るかもしれない。

「なあ、理澄。奴のCAD調整は、他とどんな違いがあるんだ?」

? おれは個人的な興味で、そう尋ねてみた。

「調べた限りだけど、ツールは全く使っていない。完全マニュアル調整だ。あと、起動式をアレンジ出来るらしい」

「は!? 起動式をアレンジ!? もう、完全におかしい部類だつ!」

? 理澄の言葉に、吉祥寺が裏返った声を上げる。そして、頭を抱えながら、後ろのベッドに倒れこんだ。

「ジョージ。それはどの辺りがおかしいんだ?」

「全部だよ! 変に素人が書くこうものなら、脳に極度の負担がかかるような代物しか出来ないんだから! あれだけの結果を出せるようなのは、業界でも中々お目にかかれない」

「だけど、ジョージならアレンジくらい出来るんじゃないか?」

「出来るけど、僕はやりたくない。魔法力を失うようなことになったら、責任を取らなくちゃいけないんだから」

? 保身まみれの台詞だったが、理解は出来た。研究所の正規メンバーで、自身の研究室まで持っている立場なのだ。面倒ごとなんて、真っ平御免だろう。

「それは仕方ない。ジョージの存在は唯一無二だから。——じゃあ、武倉。お前は?」

「僕に出来るのは、術式をダウンロードしてくるところまでだね」

？それは、全く出来ないのと同じだ。

？とはいえ、おれも魔法工学なんか、何も知らないのだが。あれは難し過ぎて、何を言っているのか分からないのである。適当に魔法をぶっ放す方が楽だし、何も考えなくて良いのだから。

「そもそも、そういう一条はどうなんだよ？」

「全然ダメだ。普段から、家の人間任せだからな」

？三高生は割合脳筋ばかりだが、理由はそれだけではない筈だ。

？基本的に九校戦は、パワーと才能でゴリ押すもの。だから、一高と三高が一応双壁扱いされるのである。エンジニアの腕で大きく左右されるとは言うが、それは差が拮抗している時だけ通じる理論だ。それが通るならば、四高が毎回優勝していないとおかしくなる。

「今からエンジニアのことを考えたって、どうしようもない。ミラージを取られてしまったら、新人戦優勝は一高に譲る形になるだろうが……」

？空気を交えるべく、おれはこれまでの話をまとめる。すると、理澄が目を丸くした。

「ヤクが、そんなマトモなことを言うなんて……。『一高に勝てないなら、選手を直接ボコってこよう』くらい言うと思ってた」

「その発想の方が最悪だ」

？おれのことを、頭のおかしい奴だとも思っているのか。全くもって、失礼である。

？三高が優勝することで、七草と十文字を擁する筈の一高の評判を下げるのが本来の目的なのだ。それは回り回って、十師族の評価下げに繋がる。そのまま、最終的に第四研だけを生き残らせて、おれがその遺産を引き継ぐ。スポンサーの援助をおれ経由でしか繋がらないようにすれば、十分可能な芸当である。

？つまり、総合優勝が一番重要。すぐに忘れられてしまうような新人戦の勝利など、向こうにくれてやる。

「津久葉、それは止めておいてくれよ。三高が失格になりそうだ」

「何で、そんな釘をさすんだ。んなことしねえよ」

「いや、退学になったことあるんだから……」

？思ったよりも、退学というのは人生に付いて回るらしい。彼らの忠告に対し、おれはため息だけを返した。



？新人戦モノリスは、三高の独壇場だった。特に、ステージが渓谷や草原などの、開けた場所だった時は最高であった。理澄の「擬似瞬間移動」の連続行使によって、メンバー全員が、相手校モノリスまで10秒ほどで飛び、ディフェンスを強引に突破。放たれる魔法を全て領域干渉や障壁で無効化して、モノリスをすぐに開けてしまった。

？理澄と水無瀬もそうだし、もう一人の選手も第一世代だが魔法技能は優秀だ。「九校戦はパワーと才能」ということを、分かりやすく体現した形になる。

？一高との決勝戦も、やり方は滅茶苦茶だった。三高モノリスに向かって、自己加速術式で走ってきた森崎を、「擬似瞬間移動」で上空に打ち上げたのだ。哀れ、彼は見当違いの場所に移動させられたのである。だが、観客には物凄くウケていた。

？また、ミラージュ三位には三高生が滑り込めた。その理由は、深雪が新人戦に出場しなかったからだ。一高も、流石にマズイと思い始めたのかもしれない。だが、そんな対策をされてしまったら、こちらも困る。

？飛行魔法をレギュレーション違反にされてるとはいえ、深雪はもしかしたら優勝するかもしれない。そうなると、おれ達がモノリスで優勝しなければ、逆転を許される。ギリギリの状況だ。

？決勝戦まで駒を進め、一高との戦いは目前となった。控え室におれ達が詰めていると、理澄が急にそこへと入ってきた。

「……やばいね。司波深雪は優勝したよ。三高は四位で、5点しか入らなかった。ミラージュで出来た、一高との差はマイナス40点」

？現時点での本戦の点数は、一高・240点、三高・295点。新人戦が、一高・235点、三高・200点。完全にデッドゾーンに入っ



ている。

「これは一高も気合を入れてくるな……。津久葉に負けてるから、十文字も挽回しようと考えてるだろうし。というか、師族会議の通達で『十師族の威厳を見せろ』みたいな話が、十文字家には回ってきていた筈だ」

「まあ、向こうの事情は関係ない。こつちも勝たなきゃいけない理由がある」

「？おれは立ち上がり、試合場所——今回は草原フィールドである——に歩き出す。一条と吉祥寺も、慌てたように続く。後ろで理澄が、気楽そうに手を振っていたのが見えた。コイツは競技が出終わったから、他人事なのだろう。」

「？決められたルートを移動し、モノリス近くで待機する。そして、ポジションの最終確認をした。遊撃は一条で、ディフェンスが吉祥寺。オフフェンスはおれだ。」

「……絶対に勝つ」

「？開始のブザーが鳴る前、おれは口の中でそう呟く。」

「？——数秒後、ブザーの音が会場中に鳴り響いた。」

「？試合開始だ。始まった瞬間、おれと一条は自己加速術式で走り出す。障害物が無いことが分かっているから、脳内処理の限界を超えたスピードだ。」

「？周りの様子など、何も見えない。それはつまり、向こうも変数定義が非常に困難だということ。しかし、事象改変を知覚し、おれ達は術式をキャンセルした。」

「障壁魔法！」

「？一高モノリスを守る十文字が、遠くから障壁を生成したのだ。このままだと、これ以上は進めない。」

「？おれは「エレメンタル・サイト精霊の眼」を使い、地中の座標を定義する。そして、移動系魔法「エクスプローダー」を行使。特定の地点から、等距離で円形の範囲を吹き飛ばした。クレーターが出来たことによって、「地面に垂直な壁を生成」という定義が破綻。魔法は維持できなくなる。」

「？先へ進むとした時、ドライアイス弾がこちらに飛んできた。そ

れを、一条が「偏倚解放」で吹き飛ばす。

「津久葉！ 先に行け！ ここは俺が片付ける！」

「了解！ 頼むぞ！」

？ 一条は地面の下を精密に照準する能力は持たないが、発散系統は得意だ。障壁と地面の間ギリギリを狙い、発散系魔法を使えば大丈夫だろう。それに、一高選手側が使う魔法も、彼の領域干渉で押し潰せる。心配することは、全く無かった。

？ もう一度、自己加速術式を使い、モノリスに向かって駆け抜ける。多分、相手もおれを邪魔したいだろうが、一条が使ってくる「空気弾」エア・ブリットを避けるのに精一杯の筈。特に障害もなく、離脱は可能だった。

？ モノリス前には、十文字が仁王立ちしていた。先手必勝とばかりに、「スパーク」を放つ。しかし、それは防がれてしまった。おまけに、普通の障壁魔法ではなく、「フアランクス」だ。

「……随分、過大評価されたものだ」

「アイス・ピラーズ・ブレイクでお前は、俺を倒した。『フアランクス』で不足はあるまい！」

？ 地中からの「エクスプローダー」を試みたが、あえなく失敗。干渉力が先程の比では無い。理澄でも、これを破れるかは怪しい。

？ とりあえず、半球シールド型の「フアランクス」からの領域干渉が届かない場所から、一回り大きい半球状の範囲を「精霊の眼」エレメンタル・サイトで指定。そこに「酸素空洞」オキシゲン・チェンバーを発動し、高濃度の酸素の膜で障壁周りを覆った。

「……！」

？ 彼は確実に焦っている。このままだと、酸素中毒になるのは目に見えているからだ。しかし、「フアランクス」を解除する訳にはいかない。かといって、空気まで遮断してしまうと途中で酸欠に陥る。これが実戦ならば、「攻撃型フアランクス」を使えば良い話なのだが――

「――がふっ！」

？ 急に、おれは見えない壁に突き飛ばされた。不意打ちによって、地面を無様に転がる。これは、まさか……。

「攻撃型フアランクス!? レギュレーション違反だろ！ クソ野郎

！」

「この『ファランクス』は防御型魔法に分類されている！ 決して、違反ではない！」

？そんな言い分、詭弁だ。十師族だから、許されているんだ。おかしいだろ、こんなの。

「俺は十師族の一員！ こんな所で、負ける訳にはいかないのだ！」  
「うるさい！ 数字が付くのが、そんなに偉いか！ 十師族の直系は、そんな立派なものかよ！ それなら、何で——!？」

？——おれは、それになれないんだ。その言葉は、無理に飲み込んだ。

？ゆっくりと立ち上がる。先程の重たい攻撃によって、身体はとても痛い。本当は立ちたくない。だけど、ここでは終われないのだ。

？手首のCADに手を伸ばす。向こうは、最後の悪あがきと思っ  
ているだろうか。CADから起動式を読み込む。遮音フィールドを自  
分の周りに生成した後、振動魔法で作った嫌な音——あの、黒板を  
引っ掻くような音だ——を、大音量で周りにばら撒いた。

？今、観客達は、パニックかもしれない。しかし、そんなこと知る  
ものか。「ファランクス」は物質非透過。音と光は、そのまま通す。

？勿論、それだけではない。マルチキャストで、精神干渉魔法「マ  
ンドレイク」を重ねている。想子フィールドは作っ  
ていても、想子が生む音は防げない。こちらは前方150。の範囲が元から決まっ  
ているので、多分バレない筈だ。十文字の方も、音が生んだ不快さを恐  
怖と勘違いするだろう。

？睨んだ通り、彼の「ファランクス」は途切れた。そこを狙い、お  
れは「スパーク」を送り込む。為すすべなく、彼は地に伏した。

？一拍置いて、終了のブザーが鳴る。一条は宣言通り、倒しておい  
てくれたらしい。もしかしたら、吉祥寺かもしれないが。

「……おれの勝ちだ！」

？拳を大きく振り上げ、空に向けて叫んだ。太陽の光が眩しくて、  
思わず目を細める。

？この夏は、きつと忘れられない。

## エキセントリック

? フィールドから退場した後、すぐに天幕テントに戻る気にもなれず  
にいた。何とかいうか、余韻をまだ大事にしたかったのだ。

? 適当に歩き回っていると、キッチンカーが並んでいる場所に行き  
着く。その近くには、一人アイスクリームを食べている知人——つま  
り、理澄が居た。

「何してんだよ」

「見たらわかるでしょ。アイスを食べてる。僕、チョコミントが好き  
で」

? 聞いてもいない味の好みを言っ、彼はスプーンを口に運ぶ。ち  
なみにおれは、その味は嫌いだ。歯磨き粉の味がするのだ。

「あつ、ちよつと。これ持って」

? 食べかけのアイスを手渡してきた。おれは無言でそれを持つ。  
すると、彼はCADを操作して、遮音フィールドを構築する。フィー  
ルドを作つてすぐ、アイスをおれの手からひったくった。

「優勝できたね。十文字の『フアランクス』を破るとは。流石にもう無  
理かと思つてた」

「まあな。人間、やれば何でもできるらしい」

「今頃、師族会議は大騒ぎだ。どの家も必死になつてお前の素性を  
探っているだろう……四葉以外は」

? 彼はそう言いながらも、アイスを食べるペースは落とさない。  
掬つては食べ、である。

「ふーん」

「それで、だ。ヤクの十師族をぶつ倒すという”大活躍”によつて、御  
当主様も色々考えたみたい。今、ここに2つの道が開けている」

? 理澄は思わせぶりな口調でそう言い、おれの目の前で二本の指を  
振った。

「二つ目はある意味、朗報かもね。津久葉夜久を『現四葉当主の息子、  
および次期当主』と公表する道……」

「公表!? 本当に……?」

？涙が溢れそうだった。

？お母様はおれを見ていたのだ。息子として……もしかしたら、もう一度最初からやり直せるかもしれない。

「出自を隠さないということは、これからは存分に目立っていいということだよな？」

「今までも散々好き勝手だった気はするけどね」

？非常に彼は何か文句を言いたげではあったが、おれは気に留める事はなかった。

「二応、二つ目も教えておくよ。『十文字を倒したのは偶然、と言いつ張って普通の生活を続ける』という道。まだ時間はあるから、ゆつくり選ぶといい」

？選ぶまでもないだろう、と言いつ返す前に彼はスタスタと去って行ってしまった。消化不良の気持ちを残したまま、おれはそこに立ち尽くす。

「——津久葉！ やつと見つけた！ 何で戻ってこないんだよ！」

？不意に、おれの名を呼ぶ声が。振り向くと、一条がそこには居た。

「一条、何してんだよ？ 主役はちゃんとテントに居ろよ」

「その主役を探してこい、と先輩に追い出されたんだよ。今日の主役は……津久葉、お前だろ」

「おれ？」

「当たり前だ。優勝の大貢献者なんだから。ほら、行こう。三高のみんなが待ってる」

？さざりと言われた言葉が衝撃的だった。

？家名を出さなくとも、ナンバーズでなくとも、「夜久」という個人に価値を見出してくれる誰かは存在するのだと。

？自分は一体、何者であるべきなのか。このまま、おれは「四葉夜久」を選んで、良いのだろうか。急に迷いが浮かんた。先程まで、迷うことは一つもなかったのに。

「……ああ。そうだな」

？東道閣下、または「スポンサー」達は、きっと四葉の道を望むだろう。四葉家内でのおれの立場が安定することで、干渉をさらに強め

ることができる。彼らが目指す「秩序」の構築も進んでいくことだろう。それは自分自身も願っていたこと——けれども、”そんなもの”の為に今を手放してしまう？



？夕方の閉会式。三年生達に続いて、おれ達三高生はそろそろと会場に向かう。三高は優勝校だからか、他校生が気を遣って道を空けてくれた。やはり、優勝は良いものである。

「——津久葉……少しいいか」

？そんなパーティーを楽しむ気持ちに水を差してきたのは、少し前に雌雄を決したばかりの十文字克人だった。

「スカウトとかならお断りだ」

「いや、少し話したいことがあつてな。場所を変えよう」

？強引な男だ。ちょうど持っていた炭酸ジュースのグラスを投げてやろうかと思つたが、一応思いとどまる。近くに居たウェイトレスにグラスを渡し、おれは十文字の後ろに続く。会場の外、庭の人気の無い場所で彼は足を止めた。

「つまらない話ならすぐに帰る」

「案ずるな。すぐに済む」

？ホテルの広い庭に、今はおれ達しか居ない。ホールから聞こえる微かなBGMが、寂しさを感じさせる。

「——津久葉。……お前は、十師族だな？」

？短いそれには、言葉以上の圧力が込められている。だが、おれは屈しなかったし、屈する必要もなかった。

「もし、おれが十師族だとしたら……。貴方が格下の魔法師に負けた、という事実を誤魔化することができる。そんな事の為に、そもそもあり得ないような質問を？」

「……いや、違う。お前は俺に勝つた。最強の魔法師の一角を担う十

師族に、お前は勝利したのだ……。——それ故、お前も十師族という立場に立たなければならぬ」

「ふーん。見合いの斡旋か。お節介なことで」

「？おれは肩をすくめた。やっぱりつまらなかつたじゃないか。もう帰りたい。」

「例えば、そうだな……。七草なんか、どうだ？」

「正気か？七草に一高を追い出されたのに？」

「お前を受け入れるとなれば、七草家が折れる形になる。悪い話ではないだろう」

「……断る」

「？考えるまでもなかつた。おれは四葉で無いと嫌なのだ。十師族に価値は何にも見出していない——その答えが浮かんだ時、自分の中の矛盾に気付いた。」

「？おれは、十師族になりたい訳じゃ無い。お母様に愛して欲しいだけだ。形だけの「息子」になって、自らの望む未来はあるのだろうか？」

「そうか。気が変わったら、いつでも言ってくれ」

「？彼はそう言い残し、去って行った。勝手な奴だと思いつつ、おれも会場へと戻る。そして、三高生の皆が集まっている場所へ向かつて歩き出す。」

「？もう、答えは決まっていた。」



「——えっ、やっぱり四葉バレはしないことにした？ どういう風の吹き回し？」

「？九校戦、および夏休み明けのこと。三高の適当な空き教室に理澄を呼び出し、結果を伝えていた。」

「？結局、おれは四葉真夜の息子であることは公表しないことにした」

のだ。このまま魔法師コミュニティに紛れ、普通の魔法師として生きる。つまり、今の人生を受け入れようということ。何だか、それも良い気が今はしていた。

「ああ、なんか文句あるか？」

「無いけど……なんなら、割と好都合ではある。カバーストーリーを作らなくて済むから。それに作ったからって、みんなにそのまま信じてもらえる訳じゃ無い。色々と工作が必要なんだ」

？なるほど、「四葉夜久」としての知り合いだったなら、どういう出会いをしたのか誤魔化すことが彼には必要だった訳だ。

「こっちは逆に色々あったけどな」

？おれは東道閣下との共闘関係が解消されたことを理澄に告げた。彼はそれらの事情を全て聞いたあと、納得したように頷く。

「なるほどね、お前が達也と同じ立場になっていなかった訳だ。それほどに『精神構造干渉』を、スポンサー様も手元に置きたかったと」「それだけじゃない。あの人達は『魔法師コミュニティの一元化と、それによって政官財システムの全てを一手に掌握すること』を目的に動いている。けど……魔法師を纏め上げる題目が今のところ無い以上、単なる机上の空論のままだ」

？だからこそ、スポンサーはおれを選んだ。

？かつての「アンタツチャブル」のような——つまりは大漢崩壊時代のように四葉を暴走させ、既存の魔法師社会に反旗を翻す為の——苛烈さと軽率さを買われていたというだけ。

「まあ、とりあえず……おれが四葉内での地位を蹴ったことでスポンサーとの関係は悪化。とはいえ、四葉の中でも問題は解決した訳でもない」

「最悪だね。どう考えても、選ぶべきじゃなかっただろ。ヤク的には」  
？そうだな、と頷く。だからこそ、これからのことには問題が山積みだった。

「……就職とかどうしよう。魔法大学は推薦でどうにかなるだろうが」

？スポンサーの斡旋を当てにしていたので、このままだとワーキン



グプアの未来しか見えない。とはいえ、他のナンバーズの傘下魔法師になるのも癪だ。かといって、魔法と関係ない職に就きたくもない。「非合法的な仕事でもしたら？ 暗殺とか。特に黒羽は仕事が多過ぎてキヤパ崩壊寸前らしいし、いくつか横流しして貰えるように頼んであげよ」

「要らん」

？そんな馬鹿話をしている時、急に理澄の端末がけたたましく音を鳴らした。

「うるせえな」

「いや、これは緊急用の着信音なんだけど……！」

？画面を確認したあと、彼は急に顔を青ざめさせた。

「どうした？」

「……七草の狸、やりやがったよ——お前と御当主様のDNAを勝手に鑑定して、ご丁寧に本家に結果を送ってきたそうだし！」

？端末をこちらに放り投げてくる理澄。それを見ると、確かにその旨が端的に書かれているメールが表示されていた。

「予想外過ぎる……七草だぞ？ 四葉の情報保護システムを破れるとは思えない」

「正攻法じゃないんだろう。知ってる奴が知らない奴に教えるのなら、ハッキングも何も必要ない。どうせ、九島烈辺りだろう」

「九島烈が？」

？九校戦前のパーティーで何か挨拶をしていたことを思い出す。初手で精神干渉魔法をかましていたので、「変なジジイだな」とは思ったものの、それ以上のことは特に思わなかった。

「あの人、『可哀想で魔法が良くできる子供』が大好きだからね」

？おれを見て「可哀想」と思うということは、ほとんどの事情を知っているということだ。

「多分、ウチ的には七草の捏造という形に着地させるだろう。それが一番都合が良いからね。ただ……あちらもそれが分かった上でカウンターを仕掛けてくるはずだ」

？恐らく、彼というか彼の実家が七草との交渉テーブルを握るのだ

ろう。武倉は「交渉」を一番得意とする、四葉でも異色の家だ。

「師族会議でバラす、つてか？」

「？そう、と理澄は首肯した。」

「嘘か本当かなどは、あまり関係がないのだ。疑惑さえあれば、それを議論の場に持ち込めてしまう。」

「それを避ける為に交渉するとして……きつと、ヤクと七草家当主の面会の場を設けるくらいはカードとして切らないと無理だろう」

「マジかよ」

「だって、こっちは四葉の縁者とは口が裂けても言えないんだから。『七草が一高から追い出したんだし、まずは謝罪しろよ』で押し切るしかない」

「……面倒だな」

「？心を入れ替えて、真っ当に生きようとしたところでこのザマである。この世に神がいるとするならば、よほど捻くれているらしい。」

？

## こどもたちのジレンマ

?その日は朝から憂鬱だった。というのも、七草家現当主——つまりは、七草弘一との面会があるからである。行きたくないに決まっているし、ギリギリまで抵抗したのだが、やっぱり行かないままはマズいのも分かっていた。

?家の近くに迎えにきたコミュニーターで、七草家の本邸へと向かう。四葉の村とは違って、明るい雰囲気洋館であった。玄関近くまで歩いてくると、非常に見覚えのある人物が現れた。一高を退学することになった原因でもある——まあ、あちらもとぼちりだったのだろうが——七草真由美であった。

「ようこそ、我が家にいらつしやいました。お久しぶりね、津久葉くん。九校戦の時は、とても驚かされたわ」

「一高が弱すぎたんですよ」

?そう言うと、真由美は一瞬だけピクリと顔を動かした。客人をもてなすホストとして、苛ついた感情を表に出す訳には行かないと思っただろう。

「……応接間へどうぞ。まもなく、父も参りますので」

?変に無駄話をしないで、案内役という役目だけを果たすことに決めたらしい。そのまま、応接間へと通された。

?しばらく待っていると、七草弘一が部屋へと入ってきた。写真などで見る通り、彼はサングラスをしている。「どこでも掛けてるんだな、コイツ」という感想を抱きかけたところで、着けていないとけない理由を思い出した。

?彼もまた、おれと同じように「四葉真夜」の残滓を追っているのかもしれない。

「——似ているな……特に目の辺りが真夜にそっくりだ」

?おれの前のソファに腰掛け、弘一は開口一番にそんなことを言った。

?お母様に似ている、それは初めて言われたことだった。四葉にいる人間は、誰も言ってくれなかったから。

「……」

「？けれども、ここで何か反応するのは問題があることも分かっていた。」

「いや、最初に話すべきことは別にあつたな」

「？わざわざ席を立ち、潔く彼は深く頭を下げる。こういう時、どうすればいいのかわからない。なので、何もできなかった。」

「——津久葉夜久君、君を結果的に一高から追い出してしまったことは、本当に申し訳なく思っている。もしも君が望むのなら、百山先生に便宜を図ってもらえるように口添えするが……」

「彼のその態度からは、本気の謝意が伝わってきた。」

「結構。三高では割と楽しくやってるんで」

「そうか。なら、他に困っていることがあるなら言いなさい。手助けできるようなことなら、最大限応えよう」

「……そもそも。前はああいう態度だったのに、おれが『四葉真夜の息子かもしれない』というだけで急に掌を返すのはおかしくないか？」  
「？あからさま過ぎではないかという、おれの指摘に、椅子に座り直した弘一は「その通りだよ」と悪びれずに答えた。」

「君が単なる魔法師であるなら、さほど興味はないね。真夜の息子であることに価値がある」

「？四葉家は一切認めていないことなのに、おれが息子である前提で話を進め続けている。実際、本当のことではあるのだが。」

「——だからこそ、夜久君の抱えてる問題を解決してやりたいのさ。」

「……君が母親から認知してもらえらるようにね」

「恩を売って、貸しを作ろうとでも？ お断りだ」

「別に見返りは求めないさ。単に他家の隠蔽疑惑を十師族として糾弾したいだけなのだから」

「？弘一はそう言い、「まあ、考えておいてくれ」と続けた。」

「余計なお世話だ。人のプライベートに口出すな」

「？おれはそう言い残し、席を立った。帰り道がよく分からなかったので、「エレメンタル・サイト精霊の眼」を発動して出口を探し出した。」

「？という訳で、七草弘一との面会はめちやくちやな終わり方をした」

訳である。そして、もう二度と会うものかと決意した——しかし、七草家当主が「狸」だの「策士」だの言われる所以はあるものである。

？確かに彼は四葉家との約束通り、おれの秘密を師族会議には公表しなかった。

？けれども、三高が設置されている北陸方面を管理・監視している一条家当主——一条剛毅にはそのことをもう既に伝えていたのだ。



「——津久葉、事情を話して貰おうか。それに、武倉も」

？固い表情で、おれ達を見回しているのは一条将輝。彼の横には吉祥寺もいる。

？なぜ、こんなことになったのだろうか。一条達に連行される途中、理澄が「七草にしてやられたね」と書いたメモをこっそり見せてきた。どうやら、彼にとっても想定外の事態らしい。

「……何の話？ いきなり呼び出しておいて」

？理澄が不満そうに唇を尖らせる。とぼけられるうちはとぼけ続けよう、という作戦なのだろう。おれもそれには同意だった。

「コイツに四葉の縁者の可能性があるという話だ。元からコイツと知り合いだっただのなら、お前もその辺りのことは知ってたんじゃないか？」

？コイツ、と一条はおれを指差した。そして、彼は手元の端末へと目を落とす。恐らく、おれについての何かデータが映し出されているのだろう。

「改めて見てみれば、津久葉……お前のPDはあまりにも不自然すぎる。親族についての項目は何も情報がない。ただ『津久葉夜久』という戸籍が単体で存在するだけだ」

？おれは四葉を名乗れず、仮の名字として「津久葉」を与えられた

ただだ。なので、書類上は分家としての津久葉家と一切関係していない。

「親に認知されてないからな」

「？そんなことを馬鹿正直に説明する訳もなく。言える部分だけを明かし、PDの不足を認める。」

「だから、今はその親の話をしたくないんだろ！ 要は——」

「？はぐらかされていると感じたのか、一条が目に見えてイライラし始める。そんな時、今まで沈黙を貫いていた吉祥寺が軽く手を挙げた。」

「——将輝、ちよつといいかな」

「どうした、ジョージ？」

「僕たち……というか、実際は将輝だね。一条家が、どういう理由で素性を問い質せねばならないか。その情報を一体どうするのか。それを2人に説明するのが、まずは筋じゃないかな。このままじゃ、警戒されるばかりで欲しい答えは手に入らないと思うよ」

「確かに……」

「？親友の言葉に、一条も落ち着きを取り戻す。うん、と一度頷き、おれ達に向き直った。」

「津久葉の話を持ってきたのは七草家だ。前提として……七草が提供してきた情報は、真偽こそはともかく公的な信頼性には欠けていて、ゴシップと大差ない。だから、これをソースに四葉へ問い合わせるのは厳しい。モラル的にも問題だ」

「だが、師族会議の極秘議題としては出せるんだろ？」

「？それこそ、四葉が一番警戒していたことだったのだから。」

「ああ、けど……」

「そうはしないんだろ？」

「？その時、理澄が口を挟んだ。以前あれほど怖れていたこと——その為におれを七草家にまで行かせた——なのに、何とも余裕綽々の顔である。」

「まあ、そうなるな……議題に出すのは簡単だ。けれども、それをしてしまうと四葉との関係が悪化する。このまま知らない振りをする方

がマシだろう」

？七草は元から確執があるので、別に失うものが無かったただけだ。普通の考えなら、「アンタツチャブル」に正面から喧嘩を売る愚行はしまい。なるほど、そういうことだったのか。

「特に大義名分も無い上に、あの大漢の一件があるから何処も突っ込みにくい。そうするしかないよね」

「……満足してるところ悪いけど、まだ話は終わってないよ」

？吉祥寺が理澄に釘を刺す。よく考えてみれば、何も事態は解決していないかった。

「あー……あのね、ヤクの戸籍を作ったのは僕の身内なんだよ。だから、ちよつとばかり事情を知ってた訳」

？身内は四葉であるから、あながち間違つてはない。

「めちやくちや非法なことしてるじゃないか、お前の家」

「生きていくためには必要なんだよ」

「なんか、ごめん……失言だったな」

？一条が申し訳なさそうな顔をする。

？そういえば、理澄は「エクストラ」を詐称していた。魔法師社会からあぶれた彼らの現実を知っていれば、数字を失わなかった者は罪悪感を持つことを知っているからだろう。悪辣な奴だ。

「……纏めると、一条家は四葉の問題に関しては不干渉を貫く。ただ、うちの管理地域で行動される以上、事実関係を本人に直接確認したいというのも本音だ。津久葉の口から真実を聞いたとしても、どうせ裏付けは取れないだろうが」

？ここまで来たなら、言ってしまうしかない。あちらがここまでの譲歩をする以上、こちらも応えるのが義理だ。四葉側は「息子を名乗る狂人がいるだけだ」と言い張るだろうし、有耶無耶になるのは目に見えていた。

「……お察しの通り、おれは四葉真夜の息子だ」

？一条と吉祥寺が揃って息を呑んだ。頭では分かかっていても、実際に告げられると衝撃だったのかもしれない。

「でも、四葉とのメッセンジャー的な役割は担えないぞ。絶縁状態だ」

から、連絡もほぼ取れない」

「それは問題ない。余程のことがない限り、魔法協会を通した方が拗れないからな」

「そうか。それじゃあ……改めてよろしく」

「？おれは一条に右手を差し出す。すると、彼はその手をしっかりと握り返してくれた。」

「よろしくな。夜久」



「？夜久が素性を明かした日の夜。四葉本家の執務室では、真夜が葉山から報告を聞いていた。」

「——以上が、今回の件についての理澄様からの報告でございます。危なげなくはありましたが、何とか乗り切られたようですね」

「そう。……夜久——あの子も何を考えているのかしら。あれだけ認知して欲しがっていたのに、その餌をぶら下げた途端に嫌がる。全く分からないわ」

「？真夜は眉を潜め、端正な顔を少しばかり歪ませた。彼女には、夜久の心情を何も理解できないのだ。」

「まともな当主教育でもさせれば、落ち着くと思ったのだけれど。上手くないものね」

「命令なさればよろしかったのでは？ 率直に申し上げまして……奥様が夜久様に選択の余地を与えたのは意外でございました」

「自分で選ばせないと文句を言うでしょう」

「？夜久が「四葉夜久」の道を受け入れたなら、仕事のやり方を山ほど詰め込ませるつもりだった。もちろん、真夜が教えるのではない。専用の講師にさせるのだ。だから、嫌がって逃げ出さないよう、彼の言質を取る必要があったのである。」

「そうですね……では、夜久様は次期当主の内定からは外れるという



「ことで？」

「ええ、どうしようもないもの。けれど、『四葉』的には、姉さんの魔法を手放すことはできない。このまま、飼い殺しにするしかないわね」

「？精神構造干渉魔法。真夜にとつて、その魔法は彼女の姉のものだ。夜久のものではなく、単に姉の魔法を引き継いだけ———そう思い続けている。

「———理澄さんに伝言しておいて頂戴。ちゃんと手綱を握っておきなさい、とね」

「かしこまりました」

「？葉山は一礼し、真夜の居る執務室を去る。動画通話用の部屋へ移動しようとしたが、その必要は無くなってしまうた。

「おや、理澄様。こちらにいらしていたのですか？」

「はい。研究所の方に用事があったので……」

「？研究所というのは、もちろん四葉の村の地下にある研究施設のことだ。金沢魔法理学研究所に在籍している今でも、彼はたまに自分の実験の為に四葉の機器を利用している。

「どうですか？ 夜久様のご様子は」

「正直言つて、謎ですね……御当主様への反抗という理由だけではないのでは？ 今回の一件は」

「つまり、彼の心情に何かしらの変化が現れたと」

「？この葉山の推測はそれなりに的を射てはいた。

「とはいえ、彼が人間的に成長したのならば……喜ばしいことではありますな。親がいなくとも、子供は立派になっていくのやも知れません」

「本当にそう思ってます？ 葉山さんも、アイツが子供のままでいることを望んでいたのではないかと考えていましたが」

「？主人である真夜の不興を買うことを分かっているとしても、葉山は比較的夜久に優しかったのである。その理由というのは———。

「———理澄様はお耳がよろしいようで」

「相手よりも情報を得て、イニシアチブを握れ……———そういう育て方を

されましたからね。僕には今まで育ててくれた親がいます」

？ 理澄と葉山の視線が交差した。先に勝負を降りたのが葉山であつたのは、やはり年の功だろうか。

「私は真夜様の側近であり、四葉家の人間です。夜久様を案じる気持ちには、嘘偽りのない本心なのですよ」

「ええ、分かっています。言ってみただけですから」

？ そんな無邪気な言葉を聞き、葉山は好々爺らしい優しい優しげな笑みを浮かべた。今の彼は、四葉家を自分の居場所だと感じている。そして、四葉の子供達を心の底から慈しんでいるのであつた。

？ 夜久や達也、深雪、そして他にも——アンタツチャブルな一族に生を受けた、「四」の哀れなるこどもたち。

？ 歪んだ境遇で懸命に生きる姿は、かくも美しい。

## 横浜騒乱編

### 夢はサブリミナル

？論文コンペの時期が近づいてきたからか、「発表者募集」とコピー用紙に黒字で打ち出された、無味乾燥なポスターが校舎の壁に何枚か貼られ出した。代表者のセレクションを行うため、それにふさわしい論文を募っているのだ。

？だが、脳筋で溢れた三高だからだろう。あまりコンペに意気込んでいる生徒の姿は、さほど見かけない。九校戦の時の方がよほど盛り上がった。

？けれども、数少ない頭脳派達も——吉祥寺や理澄のことだ——やる気は全くなさそうだ。放課後には2人とも、おれや一条と一緒にずっと駄弁っている。論文を書いているようには、全く見えない。ある日、おれは理由を尋ねてみた。

「あんまり出たくないんだよ……論文コンペに」

？吉祥寺の答えは、あまりにもあっさりしたものだ。出たくない、って何だ。

「まあ、どうせ論文出さなくてもさ。出てくれって言われるんだろうなく。まともな候補者居なさすぎて。ね、吉祥寺？」

「だろうね。そうだったら……アレでいいかい？ 酸素を加重系の重ね掛けで金属酸素にするので」

「いいんじゃない？ 酸素ボンベ、山ほど余ってるから。誰だよ、あんなに発注したスタッフ」

？理澄と一緒にあって、明らかな内輪ネタで盛り上がっている。どうしていいか分からず、おれと一条は互いに顔を見合わせた。

「ジョージが武倉と関わって、どんどん不真面目になっている……昔はそんなじゃなかっただろ！」

「いや、元からでしょ。コイツ、しれっと図書館のプロテクト破ろうとして、教頭先生に大目玉喰らってたじゃん」

「お前、そんなことしてたのかよ……」

「？下手したら退学寸前のことを起こしているではないか。おれは退学させられたのと思うと、本当に解せない。これこそ、一条の威光か。」

「でも、大丈夫なのか？ ジョージだって、急に発表ってなったら困るだろう。論文くらいは……」

「一晩で書けるよ。先行論文とか引用しなくても怒られないし、質疑応答も全く無いからね。発表慣れしてるなら、ぶっつけ本番で大丈夫なんだ」

「？そういうものなのか。おれは論文コンペの実態を初めて知ったので、何とも言えなかった。」

「大体あんな変な発表会するから、魔法大で下手な論文を書く学生が多発するんだよ。……そもそも、募集から選考までが短すぎる。あれじゃあ、落書きみたいな文しか書けない」

「実際、『論文コンペしに来たの？』は魔法学研究者が文章を貶す時に使う常套句だしね。あれ言われると心に来るよ。基本コードの論文は何度も書き直さなくちゃで、本当に辛かった……」

「？彼らの話を聞いているうちに、ふとある考えが浮かんだ。」

「？おれが論文を書いて、コンペに出場するのである。研究レポートは四葉の研究所で書いたことはあるものの、論文を書いた経験は一度もない。でも、論文コンペのレベルを聞く分には行ける気がした。何なら、理澄達に手伝って貰えば良い。」

「——なあ、聞きたいことがあるんだが」

「？思いついたアイデアを言うと、三人は目を丸くした。」

「……悪くはないんじゃないかな。津久葉がやりたいなら、アドバイスくらいはするよ」

「？何度か領き、吉祥寺はどのように言った。他に出てくれる人物がいるなら、それで構わないのだろう。」

「けど、テーマはどうするんだ？ ジョージ達と夜久じゃあ、得意魔法とかも全く違うだろう」

「？一条が尤もな疑問を呈した。確かに、おれは加重系はあまり得意」

ではない。系統魔法なら放出系が得意だが、それもそこそこという感じだ。

「簡単だよ。おれの得意魔法……精神干渉系の論文を書けば良い」

「バカだろ。なんで、自分から『四葉』感を押し出そうとするのさ」「隠してる感を出してる方が怪しい筈だぜ？　堂々としてたら良い」

？　理澄の言葉にそう反論する。四葉であることを隠さなければならぬ筈の奴が逆に精神干渉魔法を見せつけたならば、逆に違うかもしれないと周囲は思うに違いない。

「それは本人の決めることだから、俺は別に構わないと思うが……ジョージはどうだ？」

「精神干渉系なら理論だろ？　それなら、来年の京都会場の時の方がウケやすいよ。横浜の年は、派手に実験機を使うものが賞を取りやすい傾向にある。今年は様子見で、来年にしたら？」

「嫌だ。絶対、今年やるんだ」

？　皆が揃って呆れた顔をする。

？　そして、おれの固い意思を感じたのか、理澄は「僕、もう知らない。やりたいならやれば」と投げやりに言った。



？　九校戦前に理澄や夜久の手によって、組織の瓦解まで追いやられた「無頭竜」。壊滅までの手際の良さから、裏事情に詳しいものは、それが四葉の仕業だと勘付いていた。

？　周公瑾もまた、そういつた「鼻が利く」人間の一人である。だからこそ、すぐさま彼は東南アジアへと逃げ出した。しかし、華僑コミュニティの柵ゆえ、数ヶ月もしないうちに中華街に戻らざるを得なかったのだ。故に、彼は日本へと舞い戻ってきた。

？　輸送船から密猟グループの船に乗り換え、都市部地下の整備用ルートを介して侵入するという、非常に手の込んだ密入国だ。とはい

え、元いた自分の店を使うのは危険過ぎる。知人の持つテナントの一部を間借りして、彼は隠遁生活をしていた。外から認識できないよう、明かりを絞った室内はとても暗い。ゆらめく蠟燭の炎だけが、この部屋唯一の光だ。

?そこで彼は一人、骨牌を弄びつつ、今後のことについて考えていた。

(……地下の監視が増えていますね。私が一度このルートで侵入した以上、二回目以降の使用は厳しいでしょう)

?元崑崙法院の人間であった周は古式系の術者だ。修得している技術の一つに、「鬼門遁甲」というものがある。これは時間と方向の組み合わせで意識に干渉する魔法であり、意識誘導によって自らの居場所を読めなくする効果を持つ。

(予定が狂って残念ですが……手引きする予定だった方々は、揚陸艦で入国して頂きましょう)

?けれど、魔法は魔法だ。その時こそ認識することができなくても、優秀な魔法師であれば「魔法が使われていた」ということは分かる。二度目は確実に仕留めようとするだろう。特に四葉配下の魔法師であれば。そんなリスクを周は負う気にはなれなかった。

?そして、この勘は正しかった。

?武倉家——つまり、理澄は持ちうる人脈を使って警察や千葉家をまず動かした。その上、諜報工作を得意とする黒羽や追跡魔法を得意とする真柴などの分家にも声を掛け、万全の態勢で周の搜索を行なっている。再び彼が地下で「鬼門遁甲」を使用していたならば、見つかつてしまう可能性は高かっただろう。

(レリックの回収も後回しです。まずはスケジュール通りに横浜一帯を戦場に出来るかだ……)

?戦争の手引きと同時に進める予定だった仕事——国防陸軍が保持する「聖遺物」が再解析の為に民間企業であるFLTへ移されたので、それを強奪するという作戦——が彼にはあった。

?けれども、華僑とのバランスで緩かった筈の港の港の警備が非常に厳しくなっている。強襲揚陸艦をすり抜けさせる為、正規の輸送船を大

量に送って、警備局の処理能力をパンクさせる必要もあつた。他にも無駄な用事が増えていて、正直レリクどころではないのだ。

「……かの国とこの国が戦争になれば、少しくらいは世界も面白いものになるでしょう」

？ 誰もが自らの利権を得る為に争い、疲弊し続ける世界。周や周の仲間達はそんな世界を見たいのだ。彼らの残り少ない人生を、ただ理想の実現に費やしている。

？ 争いが全ての時代になれば、今は息を潜めている「四葉」も表舞台へと飛び出すに違いない——その喉元に噛み付けたなら、どれほど甘美なことだろうか！



？ おれが書いた「精神の所在と認識」という論文は、三高の選考を見事通過した。

？ 実験機を使わないので、用意すべきものはスライドのみ。そして、発表者はおれ一人だから、特に擦り合わせなども不要だ。スムーズに説明できるように練習をしておくだけで良い。

「……よくこれを書き上げたね、津久葉。結局、僕らの助けはいらなかったじゃないか」

？ 論文のPDFを眺めながら、吉祥寺がそのように言った。

？ 確かに彼の助けを借りたのは、文章の組み立てにミスが無いかの確認程度だ。内容自体にアドバイスは貰っていない。

「だが、大胆な仮説だな。『精神はヒトに認識された時だけ表出する、いわゆる幻に過ぎない』だなんて。まあ、俺に精神干渉魔法の適性は無いから本当のところは分かんが」

？ 一条が文章を読み、そんな感想を述べた。

？ そもそも精神の所在というのは、とても曖昧なものだ。おれは精神の座標を認識できるが、それが精神そのものだという実感はない。

対応するボタンという感覚が一番近いような気がする。

？要は、精神などというものは目に見えて存在しないのだ。けれども、人は感情などを表に出すことはある。心は確実にある筈——つまり、「心」の影響を受けとる受容器の改変こそが精神干渉系魔法の実態なのかもしれない。

？実際、魔法演算領域は起動式に反応して魔法式を半自動的に構築するのだ。今でこそCADの機能に頼るが、本来ならば自分で起動式を組まねばならない。

？無意識領域にある起動式と相補的に結びつく受容器官が魔法演算領域であり、それは精神受容器の一部であるという考え方もできるという訳だ。

？この辺りは理澄の書いていた論文を参考にした。彼の研究テーマは「魔法式構造のパターンと変則」。魔法適性の有無は起動式の想子型が演算領域の形と噛み合うかどうかだ、というアプローチ方法の非主流派魔法構造学である。

「——ところで、理澄はどこ行つたんだ？」

？そういえば、今日は彼の姿を目にしていない。一条の家にも来ていないということは、他の場所で何かをしているということだ。

「なんか『研究が進まない』って言って、休暇を取つてた。学校も休んでるし、旅行でも行つてるのかな？」

「武倉は自由人だからな。まあ、論文コンペまでには帰ってくるだろう」

？そんな話を聞いているうちに、自分の中で合点がいった。恐らく、四葉関連の仕事をしているのだろう。これまでも用事がある度、適当なことを言って誤魔化していたに違いない。何だか可哀想だ。

「そうか。——コンペ中、風紀委員は会場警備をするんだっつたよな？」  
「ああ。横浜は中華街が近いだろ。だから、よく生徒とのトラブルが起きるんだ」

？魔法科高校生に絡む輩が多い為、しっかりと対処しなければならぬということらしい。それなら横浜で開催するのをやめたらいいのと思うが、魔法協会が立地している関係上、変更することは難し



いようだ。

「とはいえ、シフトはちゃんとあるからな。三高の発表の時は、俺たちも見に行く」

「そうだね。楽しみにしてるよ」

「おお……ま、見とけよ。きっちり優勝して帰ってくるぜ」

？おれは親指を立て、自信満々にそう答えた。

？もう既に各校の発表者は開示されている。だから、自分の従兄弟も代表になっていることを知っていた。ならば、彼よりも目立つただけだ――

？――そして、お母様にみつめてほしい。

？その為なら、「夜久」はここにいるのだと声高に叫びつつける……  
いつだって

？この時のおれはそんな気持ちだけでいっぱいだった。

？でも、それが叶うことはなかったのである……「希望」は打ち砕かれ、業火と破壊に包まれて「地獄」と化してしまう――そう、横浜は戦場へと変わり果ててしまうのだ。

## 10月の戦場に飛び込んだ

? 例年、三高生は横浜にある論文コンペ会場まで大型バスで移動するらしい。けれど、今年は少し違う。もちろんバスではあるのだが、20人前後が定員のマイクロバス。大きな実験機を運ばないので、風紀委員と見学希望の生徒数名だけが乗っている。本来なら、補助スタッフが何人も付いてくるのだという。

「……なんか狭いな。——なあ武倉、この数なら現地集合で良かったんじゃないか?」

? 風紀委員長である3年の先輩が座席越しに、理澄にそう尋ねる。

? 委員長の名前は、百目鬼大我。百家の一つである、百目鬼家の次男だ。彼の父親は魔法協会関東支部長なので、結構大物の家の出身である。

「僕も現地集合で良いかなとは思ってたんですけど、それをしちゃうと職員室から交通費が貰えなくなるんですよ。それに大型と違って、このバスはレンタル料安かったんで……残りを打ち上げ代に使います」

「じゃあ、良しとするか。——おい、一色! お前ら一年女子で食べたいもの決めて良いから、今のうちに相談しとけ!」

「わかりました」

? 一色、というのは師補十八家の一色愛梨のこと。風紀委員でもある彼女は、一年女子ではトップの成績を誇る。おれと同じクラスなのだが、あまり関わりは無い。見た目が派手で怖そうだから、こちらからも話しかけることはしない。

? けれど、まず気になる事があった。何故、打ち上げの決定権が彼女らにあるのか。おかしいだろう。

「ちよつと、百目鬼先輩!? 今日の代表、おれ! おれが決めるべきでしょー!」

? あわてて文句を言うと、「津久葉は九校戦のときリクエストしただろ」と一蹴された。

「悪いが、今回はわしらが好きに決めさせてもらおうぞ? 案ずるな、お

ぬしも気に入りそうな所にしてやる」

？四十九院沓子が身を乗り出し、こちらに声を掛けてきた。彼女は明るい性格をしているので、割あい話をする機会も多いのだ。

「いいのか？」

「構わぬよ。——栞もそれでいいじゃろ？」

「私はどうだっていいわ」

？端末に目を向けたまま、そう言うのは十七夜栞。一色と同じように、彼女にもおれは怖いイメージを持っているので、せいぜい挨拶程度の関係でしかない。

「ねえ、十七夜！ そんなクールぶらなくてもいいでしょ。前に研究所でやったバーベキューで、散々飲み食いしてたじゃ……っつうわっ！」

？理澄が軽口を叩いている途中で、言葉を急に途切れさせる。想子塊が飛んできて、彼の顔前で破裂したからだ。

「……武倉、ちよつと黙って頂戴」

「ごめんなさい」

？十七夜は金沢魔法理学研究所の研究員ではない。けれども、テクニカルスタッフという立場ではある。所内にある訓練施設を使う代わりに、計測された自分のデータを提供するという契約で研究所に籍を置いているのだ。その為、理澄や吉祥寺とは比較的話している姿を見かける。

？まあ、吉祥寺はともかくとして、理澄は大抵しようもないことしか言っていないが。というより、彼は女子と話すときはいつもそんな感じなのである。前に「僕は深雪と仲が悪いんだ」と言っていたが、原因は推して知るべしだ。

「だけど、栞はよく食べる方よね。見た目からは想像つかないけれど……」

？薄く笑みを浮かべた一色が十七夜を少し揶揄う。すると、彼女は拗ねたようにそっぽを向いた。

「——そういえば、やっぱ来てるんですかね？ あの一高の美少女！  
なあ、一条も気になるだろ？」

? 同じく風紀委員会である2年の先輩——佐久間という第一世代の男子生徒だ——が一条に話を振る。

「し、司波さんのことですか? い、いやあ……別に!」

「すぐく気にしてるじゃないか、将輝」

? 一条の顔色が赤や青に忙しく変わっていく。初心な反応は、見ていて非常に面白い。笑っていると、ポケットの中に入れていた端末が震えていた。理澄からだ。隣の席なのに、わざわざ何を送ってきたのだろう。

『一条も報われない恋路で気の毒だね』

? チャットには、こんな一文が送られてきていた。

『ウチに「一」を入れることは無さそうだもんな。秘密保持的にも』

『基本はスポンサー側の血を入れるからね。僕達も、いずれは何かしら言われるよ』

? 魔法師は早婚が推奨されている。次世代に進むほど、魔法力が上がる傾向にあるからだ。けれども、おれはあまり気が進まない。自分もまた、お母様と同じことをしてしまつたら……という不安がいつもあるのだ。

「……魔法師ってのは、難儀な生き物だよな」

? おれの呟きに、理澄も「そうだね」と頷いた。



? 一高の発表のあと、三高に順番が回ってくる。そろそろ準備を始めて大丈夫だと、まだ一高生が残っているが壇上へと移動する。端末をモニターに繋げたりと、細かい作業を手早く進めていく……だが、その手を止めざるを得なくなった。いきなり轟音と地響きが起こつたからだ。間髪入れず、けたたましい警報音が鳴り響く。

「何が起きたんだ?」

? 思わず、問いが口から溢れる。答えを求めていた訳では無かった

が、すぐに疑問は解消された。達也が結構大きな声で独り言を言っていたからだ。

「装甲車両が走行する時の音だ。あと、ロケットランチャーの爆撃音も聞こえるな。……敵襲か」

？どうすべきか迷う暇は無かった。ホールの出入り口から、武装した人間が5名ほど雪崩れ込んできたからだ。

？それを目にした瞬間、咄嗟にCADへ指を走らせる。おれの発動した精神干涉魔法「ワン・コマンド」によって、襲撃者は動きを止めた。この魔法は、想子波によつて対象者の意思を支配するものだ。「動くな」という命令を出した為、彼らは指先一つ動かさない。

「——やっちまえー！」

？一番反応が早かったのは三高生数名で、それぞれが一気に魔法を行使し、相克を起こすことなく効果を表させた。

？吉祥寺は「インビジブル・ブリット」で襲撃者の身体に打撃レベルのダメージを負わせ、一色が「神経攪乱」で彼らを行動不能にする。そして、一条が振動・減速系魔法「凍フリーズ・火フレイム」で銃火器類の暴発を防ぐ。また、百目鬼は移動系魔法「停止」で、彼らが這つてすら逃げ出せないようにしていた。

「……助かった。『ワン・コマンド』じゃあ、1分程度しか止められないからな」

「いや、こちらこそありがとう。夜久のおかげで、敵にライフルを撃たれなかった」

？壇上から降り、三高の皆と合流する。理澄が何処からかロープを持ってきてくれたので、それでゲリラ兵らしき襲撃者を縛り上げた。

「……百目鬼さん、この後はどうされますか？ 一高は現地集合だった為に移動手段を持たないので、生徒をシエルターに避難させる予定にしていますか」

？十文字克人がこちらへ歩いてきた。

？今年も共同警備チームの纏め役が、百目鬼だったので——九校戦のモノリス優勝校が、チームリーダーを出すのが不文律なのである——一応方針を尋ねに来たのだろう。

「三高生は脱出させます。ただ、ここから直接ではなく魔法協会に一度移動しますけれど……支部に父がいるので、装甲車を融通してもらいます」

「分かりました。では、こちらの方は俺に任せてください。……御武運をお祈りしています」

？彼はそう言い残し、一高生が集まる方へ去って行った。

？すぐさま、百目鬼は点呼を取り始める。三高生が全員居ることを確認したのち、彼は声を張り上げて言った。

「——お前ら、魔法協会へ行くぞ！ CADをサスペンド状態にしておくこと！ そして、攻撃よりまずは防御だ！ 対物障壁を忘れるな！」

？おれも特に異論は無かったので、そのまま着いていく。道中でも何度か襲撃に遭ったが、何とか対処して目的地へと辿り着いた。一条の「爆裂」で大抵は片付けられたし、他のメンバーも戦い慣れていたのでパニックもさして起こらなかったのもある。

？魔法協会で脱出に向けての用意を始めようとした時のこと。

「……俺は義勇軍に志願します。だから、横浜に残ります」

？一条が真剣な顔で、そう切り出した。

？十師族としての生き方とか、きつとそんな陳腐な理由だろう——などと考えていたら、彼は宣言の後、おれの方へと顔を向けた。

「津久葉、お前も一緒に来い！ 言っておくが、俺は十師族だからって戦場に出る訳じゃない。戦える力があって、その力で誰かの命を救えるからだ。それはお前も一緒の筈だろう」

？魔法力は血の濃さに依存しがちだ。故に、魔法名家などというものが成り立つ。

？けれども、一条はそれを理由にしなかった。いや、「誇り」自体は彼も持ち合わせている筈。だが、そこでは無い所での戦う意味を、おれに提示してきたのだ。「十師族として生きられなかった」としても、逃げる理由に使ってはいけないのだと。

「……分かった」

？おれは戦場に出ることを決意した。誰かを救いたいとか、そんな

殊勝な心がけは全くない。でも、一条の言葉は道理が通っていて納得できた。

「年下に熱いことを言われちゃ、立つ瀬が無いな……俺もここに残る。他に志願する奴は？」

？百目鬼の言葉に、数人が手を挙げる。殆どは上級生であり、1年は一色のみだった。

「……残ります。怖くない訳はありませんが……私は、十師族に続く師補十八家の家柄です。やらねばならぬことは、果たさねばなりません」

？彼女は「有力魔法師らしい」理由での志願だった。それもまた、一つの選択だろう。

「無理しなくてもいいんだぞ？」

「いえ、大丈夫です。——栞と沓子も気をつけてね」

「そちらこそ……」

「無事に帰ってこれるよう、祈っておくからな」

？女子三人は互いに手を握りしめ、励まし合っていた。

「——本当なら、将輝と一緒に行きたい。だけど、僕が死んでしまったら、研究室は解散することになる。そうしたら、所属してるポストクや助手達が皆露頭に迷ってしまうから……研究室の長として、彼らの生活を保障する義務が僕にはある」

？吉祥寺は葛藤した顔で、そのように一条へ告げていた。

「ああ、ジョージの分も戦ってくる。任せておけ」

「ありがとう」

？彼らは拳を軽くぶつけ合う。爽やかな光景を横目に、おれはふと理澄を見る。

？普段は戦いとは関係ない仕事ばかりしている彼は、実のところ四葉でも一二を争うレベルの戦闘魔法師であり、荒事にも滅法強い。特にしがらみも無いのだし、戦いに参加しても良さそうなものなのに。

「おい、お前はサボリかよ」

「馬鹿。脱出組も戦場を抜けるんだよ？ 戦闘要員が残ってないとマズいだろ」

? 確かにそうである。吉祥寺だけでは、少々心許ない気もした。

「……まあ、死なないように頑張つて。致命傷を『戻す』ことは、僕らには出来ないんだからさ」

「分かつてる」

? 普通は怪我をしても、すぐに治すことは出来ない。治癒魔法も割と気休めで、「治りを早くする」という効果でしかない。

「——とにかく、やるしかないんだ」

? 今後の方針が固まったので、各自がそれぞれ動きだす。

? ある者は戦闘服を調達し、ある者は脱出ルートを確認する。準備が全て終了し、最後にもう一度おれ達は集合した。

「——全員生き残つて、三高でまた会おう!」

? 別れの言葉は、そのような明るいもので締められた。暗い雰囲気は、体育会系の三高生には似合わない。まだ打ち上げも出来ないのだから、おれ達はきつと生きて帰る。そんな未来を信じて帰ってきた。



## さよなら殺意

? 横浜は、全てが変わってしまった。

? ミサイルが撃ち込まれたからか、道路は瓦礫だらけ。もはや、元の街がどのようなものだったかも分からない。

「ひどいものだな……」

? 百目鬼がそう呟いたあと、おれ達の方へと振り向く。

「一般市民の避難はほぼ完了している。だから、俺達がやるのは直立戦車のお片付けだ。さつき決めた分担を守って、魔法式が被らないようにしろよ。一個ミスると、全員お陀仏だ」

? 直立戦車は「対歩兵用人型有人機動兵器」であり、地雷や対戦車ライフルを想定した複合装甲板で全体が覆われている。だが、あくまで「対人兵器」であって、車体は軽い上に火力も装甲もかなり貧弱。通常の戦車どころか偵察警戒車でも対応できる。

? けれども、これが国によつては主力兵器として採用されているのには、理由がちやんと存在する。それは「人型」という点だ。

? 実は、直立戦車はゴーレム魔法の亜種によって強化する前提で使われている。中東欧の古式ゴーレム魔法をブラッシュアップした術式により、滑らかな機動性と戦車以上の戦闘力を付与するのだ。また、必然的に魔法師が搭乗するので、全体に領域干渉や情報強化が掛かる。

? だから「対魔法師用掃討兵器」という認識が近い。そもそも、歩兵に魔法師が混ざってる場合への対処から生まれた兵器なのだ。

「――来たぞー!」

? 話しているうちにも、十数台の直立戦車が列を成してこちらへ突撃してくるのが見えた。

? 重機関銃がフルオートで連射される上、たまに榴弾も飛ばしてくる。瓦礫を利用してそれらを避けながら、CADでそれぞれが魔法を掛けていく。

? 前方については、この中で一番高い干渉力を持つ一条が、「爆裂」を使つて一気に潰す。気化したガソリンがこちらに飛ばないように、気

体運動を減速させる障壁魔法を全員に掛ける。流石に一人では厳しいので、百目鬼を含めた上級生数人で分けて行う。一色が収束・移動系複合魔法で気化ガソリンを含んだ空気塊を前方へと送る。

？そして、メインデイツシユはおれの担当だ。放出系魔法「スパーク」によつて起こした火花で、火を付けて爆風へと変える！ 巻き起こる炎の旋風が、直立戦車を吹き飛ばした。

「……よし、上手くいったな」

「油断するな！ まだ敵は残ってる！」

？先程の爆風によつて、殆どの直立戦車は「人型」では無くなっている。恐らく戦闘継続は可能だろうが、ゴーレム魔法での強化は不可能。ならば、一条でなくとも装甲を抜ける。

「移動系のみだぞ！ 直接掛ける奴だと、相克が起きる！」

？地面の土砂——割れたアスファルトなどを硬化魔法で強化して、移動魔法で思い切りぶつける。数分もしないうちに、直立戦車は全てスクラップと化した。

「よし、次は大型装甲車両を片付けに行くぞ！」

「了解です！」

？魔法師の戦闘というのは、意外と地味なものもあるのだ。急な白兵戦などにおいては、自分や自分の周囲だけに魔法を掛けて戦う。けれども、普通は相克を起こさず大規模な効果が得られるよう、事前に発動する魔法を割り当てる。事実、三高の実戦演習も「突発的戦闘への対処」と「グループワークによる戦術立案」の二種類に分かれていた。

？故に、魔法の副次的効果を理解して、多彩に操る魔法師が一番求められる。国外・国内問わずライセンス基準が、一点特化のBS系に厳しいのはそれが理由なのだ。

？現代の戦場に、英雄は必要ないのかもしれない。



？三高の脱出組が乗る装甲車に、ゲリラ兵が移動魔法を掛けようとする。理澄が慌てて領域干渉でそれを塗り潰す。

「やば……やっぱり来たね。こんな車で移動してるって、割と『訳あり』だからか。自分達で言うのも何だけど」

？魔法科高校生を含め一般市民は、船や普通の大型バスなどで避難している。コネがなければ、装甲車などには乗れる訳がないのだ。敵もそれを理解しているから、「大物」狙いで襲撃しようとするのだった。

？だが、魔法は効かないと判断したのか。次は、装甲車の側面にRPGを撃ち込んでくる。障壁魔法で強化していなかったら、装甲板に穴を開けられてしまっただろう。

「……もう、やってらんない！——十七夜、一回出るから後で乗せて！」

？ゲリラ兵を倒してしまおう、そう理澄は決めた。そして、運転中の十七夜——彼女は大型車両を動かした経験があると言って、運転役を買って出ていた(車高の高い乗り物は空間把握能力の訓練に役立つらしいが、明らか公道での走行は違法である)——に彼は声を掛ける。「置いて帰ろうかしら」

「それ、マジでやめてよー！」  
「待って、武倉！ 僕も行く！」

？車より一回り大きい障壁魔法で弾丸が車内に入らないようにして、理澄は軽やかに車外へと飛び出す。吉祥寺もそれに続いた。

？移動装甲を維持したまま、自己加速術式と「跳躍」でゲリラ兵達の中に突撃する。魔法師がライフルを持った相手に突っ込んで行くとは思わなかったのだろう。あちらは泡を食っている。

？相克を防ぐため、攻撃に使う魔法は2人とも「インビジブル・ブリット」だ。基本コードを軸にした魔法は部分干渉であり、誤爆を防ぐことが出来る。

？着弾ポイントの面積を小さくして圧力を高めた「インビジブル・ブリット」を敵の四肢へ連続発動し、手足をめちやくちやに折ってし

まう。複雑骨折どころか、神経にもダメージが入り、もう彼らは動けない。

「小さい魔法式とはいえ、何度も発動するのは面倒だね」

「? なんとか掃討を終え、CADを軽く叩き理澄はぼやく。」

「一つの点からいくつかポイントを自動設定するよう改良した方がいいかも。帰ったらやろう」

「式に収束系を混ぜて、着弾点が偏るようにした方がいいのかな……でも、そうすると重くなるよね」

「基本コード系術式の売りである『発動の容易さ』が潰れるのもなあ」

「? こんな状況で呑気に魔法式のアレンジの話ができる彼らは「マッドサイエンティスト」なのかもしれない。」

「——早く追いかけて戻らないとね。十七夜のやつ、ほんとに置いていきそうだから」

「武倉の普段の行いが悪いんじゃないかな……」

「? 装甲車とはかなり距離が出来てしまっている。地面すれすれを移動する「跳躍」で、2人は出来るだけ最短距離で車へと戻ろうとしていた。」

「……!?!」

「? その時、理澄は装甲車——正確には燃料タンクに「振動加速系」の術式が掛けられる兆候を感じた。このままだと車は爆発するかもしれない。中にいる仲間達がそれに気付いているのかまでは、こちらからは窺い知れなかった。しかし、気付いていなかったとしたら……。」

（この距離だと、領域干渉はマズい）

「? 彼の魔法特性ゆえに、干渉力こそ四葉随一を誇る。ただ、パワーで押し切る分、細かい照準は非常に苦手だ。特に遠過ぎる対象に対しては、大雑把な掛け方しかできない。周辺の魔法を全て塗りつぶしてしまつたら、次の対処に間に合うか分からなかった。」

（もう仕方ないか）

「? 刹那の間にそこまで考えた理澄は、あまり取りたくはなかった選択肢を選ぶ。CADに触れる時間も惜しく、手のひらを相手のいる方角へと向ける。」

? 精神干渉魔法「ワルキューレ」。精神に死を与える魔法。霊子を辿って術者の精神に照準を合わせ、彼はその魔法を放つ——手応えで精神の「停止」を確認し、軽く息を吐いた。

「ねえ、今のつてさ……」

? 吉祥寺が奥歯に物が挟まったような言い方で、そのように問いかける。

? エイドスの改変を感じ取れるのが魔法師。自分が使えない魔法だとしても、どこが変質したのかは感覚的に理解できるのだ。

「……僕の魔法なんだ」

? 対して、理澄は簡潔に答えた。

? 要領を得ない返答だが、吉祥寺は理解出来てしまう。「人を殺す」という用途だけにしか使えない魔法を使いこなしている意味。武倉理澄という少年は、魔法師社会の闇と共に生きているということだ。

「——ねえ、武倉。いつか、すごい発見をしようね」

? 吉祥寺は多くは語らず、明るい希望だけを告げた。

? そして、彼が日のあたる場所で生きていけますように、と心の中で祈る。昔、自分は「一条将輝」に人生の全てを救われた。そんな風に、理澄にも「救い」が現れるといいなと思ったのだ。



? 大型車両の片付けを終え、おれ達は分担して敵魔法師兵を追っていた。そんな時、おれの端末に着信が届く。こんな時なんだよと思いつつ、音声操作で電話に出る。

『もしもし、ヤク? 生きてる?』

「お前か……出なきや良かった。まあ、電話してくるっていうことは脱出出来たんだな」

『うん。それでさ、「周公瑾」って男をそっちで見えない?』

? 理澄は妙な質問をしてきた。そんな男、おれは知らない。

『ウチ……というか、黒羽の搜索網をすり抜けた忌々しい奴だよ。そして、「崑崙法院」の生き残りだ——この騒ぎに乗じて、横浜にやって来たという目撃証言があるんだけど……見つけたら、即殺してくれて構わないから！ それだけ！』

？プツリ、と通話が切れる。あちらも合間を縫って慌てて掛けてきたのだろう。

「崑崙法院、か……」

？思ったよりも静かに、その単語が口から出る。

？お母様に悪夢を齎した巨悪。そして、おれを不幸な境遇に落とし込んだ元凶——それこそが、崑崙法院だ。

？お母様を傷付けた人体実験に、彼が関わっていたのかは定かではない。けれど……許せない。これはもう理屈の次元を超えていた。

「……」

「——夜久！ 中華街に残兵が多数逃げ込んでいるらしい！ 引き渡しするよう勧告するから、一緒に来てくれ！」

？一条がこちらへ走ってきたので、喉元まで出た言葉は空に掻き消える。おれは、何を言いたかったのだろう。

「……ああ」

「大丈夫か？ 顔色が悪いぞ？」

？彼は心配そうな顔をした。だけど、流石に理由は言えない。

「平気だ。早く行こう」

？まずは、やるべきことをやるべきだ。そう自分に言い聞かせ、己を奮い立たせる。

「あまり大人数で行ってもアレだからな。他の人達は、魔法協会の警備に向かうらしい」

「確かに。それでいいんじゃないか」

？中華街は東西南北、四つの方角にある大きな門が主な入り口だ。そこを閉じてしまうと、ビルの間隙くらいしか通路はない。その上、その隙間もパイプなどが通っており、よほど体が柔らかいなどの技能が無いと通れないだろう。

？つまり、中華街と外を隔てるのは結果的に門だけということだ。

「門を開ける！ さもなくば、侵略者と内通していたものと見做し、しかるべき対応を取らせてもらう！」

？振動系魔法「拡声」を使って中華街に向けて、一条が警告を発する。最悪の場合は、強行突破をする心積りなのだろう。だからこそ、おれにも同行を求めたに違いない。

？まあ、まともな対応なんて期待しても無駄だ。投石や、下手すれば魔法。その辺りが飛んでくるだろうと覚悟し、警戒したまま待つ。だが、ゆつくりと門が開き出したので、拍子抜けしてしまう。

「……周公瑾と申します。ああ……いえ、本名ですよ？」

？20代くらいの中性的な容姿の青年が、拘束した侵攻軍兵を数人連れて、門から姿を現した。

？けれども、おれは敵兵のことなど気にならない。だって、周公瑾といえど……さつき理澄が言っていた名前ではないか！ そう理解した瞬間、頭の中で思考が廻りだす。無意識のうちに、魔法式が構築される。

？おれの魔法、おれだけの魔法——精神構造干渉魔法「マギ・インテルフェクトル」。魔法師のアイデンティティを破壊し、魔法力を失わせる為の術式。

？それが、周公瑾の魔法演算領域を変性させた。彼はもう魔法を使えない。普通の人間と、何も変わらないのだ。

「なっ……」

？周は自分の身に何が起こったのかに気付いたようだった。青ざめた顔で、口をパクパクとさせている。

「お前、一体何を……!?!」

？一条が叫ぶが、無視をする。おれは周に近づき、彼の胸ぐらをぐつと掴んだ。

「お前らはどうして、お母様を狙ったんだ？ そうじゃないといけな理由は、どこにあったんだ？」

？その言葉に、周は顔をキョトンとさせた。予想もしていないことだったのかもしれない。

「答えろ！」

「？おれはそう凄み、返答を待つ。すると、彼は肩を震わせて笑い始めた。

「ふふふ………そうですか。貴方、『息子』なんですね！ これは驚いた………！」 『四』に終わらせられたのなら、私のこの結末も許せるというものです！」

「？ケタケタと壊れたおもちゃのように笑い続ける周。

「………けれど、まだまだ甘ちゃんだ！ 私はあの事件以前に、あの組織から追い出されていましたが。それでも、奴らの動機くらい分かります」

「？彼はそこで一度、言葉を切る。そして、怖いくらいの真顔でその続きを述べた。

「『誰だって良かったし、どうだって良かった』のです。興味のあるサンプルがあつて、それがちようど手の届く範囲にあつた………試してみたいかなるでしょう？」

「——お前ッ!!!」

「？そんな理由で、そんなくだらない理由で。

「？お母様は苦しまなければならなかったのか。

「？叔母様は傷付かねばならなかったのか。

「？何とも、やるせなかつた——思わず、周の首を手で掴む。思い切り握ると、筋がみちみちと鳴つた。

「殺してやる………」

「？ゴムパイプを潰すみたいに、首をきゅつと締め付ける。このまま死んでくれ——」

「——やめろ、夜久！」

「？一条がおれの肩を掴み、周から引き剥がした。

「………重要な被疑者だ。この後の為にも、殺しちやいけない」

「？止められると分かつていた。理澄なら止めなかつただろう。だけど、いま側にいるのは一条だ。

「？それに、意味もないのだ………コイツ1人を殺したところで、溜飲など下がらない。だって、国ひとつ滅ぼしても、四葉は幸福になれなかつた。」



「うう……！」

？渦巻く感情をどう整理したらいいのかわからなくなり、おれは地面に踞って大声で泣いた。

優しくするより憎んでほしい

? 国防海軍の特殊部隊が強襲揚陸艦を制圧し、戦闘終了を宣言したのは夜の10時ごろであった。

? 戦いが終わっても、全てが元どおりになる訳ではない。様々な後処理が待っている。捕虜の尋問、遺体の回収、その他諸々……。けれども、おれ達のような民間協力者は特に仕事もない。手伝いたければ手伝えるだろうが、今は何も手につかなかった。

? だから、おれは魔法協会のロビーにある椅子にただ座っている。ここは避難民達が家族などの安否を確認する為の集合場所になっており、多くの人々がひっきりなしに足を運んでいた。

「……悪かったな」

? 隣に座る一条がポツリと言った。多分、周公瑾の殺害を止めたことを気にしているのだろう。

? 結局のところ、周は死んだのだ。奥歯が何かに毒を仕込んでいたらしい。あつけない幕引きであった。

「いや、気にするなよ」

? 別に彼は何も悪くない。真つ当な思考の持ち主ならば、誰だっておれの行動を止めた筈だ。

「それでもだ。お前を深く傷付けたことには違いない」

? しばらくの間、沈黙が続いた。このままだと堂々巡りなのが、どちらも分かっていたからだ。

「そういや、陸軍の……何だったか。実験特殊部隊が中華街に、あの後に入りましたらしい。海軍に美味しいところを取られたからかな……」

? 数分たっぶり経って、一条がようやく別の話題を提供してきた。

? 陸軍の実験特殊部隊。もしかして、従兄弟が所属していた所だろうか。

「その部隊ってさ——」

? 独立魔装大隊とか言ったりするのか、と尋ねようとした時。ある女性の声がそれを遮る。

「——こんな所で機密情報を話すのは感心しないわね」

? 振り向くと、軍服姿の女性が居た。初めて見る顔だ。けれども、  
一条は彼女を知っていたらしい。

「藤林さん……でしたっけ?」

「ええ。お久しぶりね、将輝くん。……えっと、そちらは?」

? 彼女がおれの方に目を向けたので、自己紹介をする。

「津久葉夜久です」

「はじめまして、藤林響子です。よろしくね、夜久くん」

「藤林さんは、九島閣下のお孫さんに当たるんだ」

? 一条がそんな補足を入れた。確かに名字だけ聞けば、「九」の血縁  
だと分からなかっただろう。

「ああ。九島閣下って、あの変なジジイか」

「ばつ、馬鹿野郎! ——すみません、藤林さん。コイツ、根はいい奴  
なんですけど……」

「ふふふ、気にしないで。確かに孫の私から見ても、祖父は変な人だ  
わ」

? 響子はおかしそうに笑うのみだった。割と失礼なことを言っ  
てみたつもりだったのだが、怒ったりなどはしないようだ。

「まだ時間ある? せっかくだし、お話ししましょ」

? そう言っつて、魔法協会の奥へと進んでいく。おれ達は顔を見合わ  
せ、彼女の後に続いた。協会内にある会議室で、適当に向かい合っ  
て座る。そもそも、何のために呼ばれたのか。

「貴方達の推理通り、ウチは海軍にお鉢を奪われちゃったのよ。中華  
街のお掃除は必要だったし、結果的には良かったけれどね」

「やつぱり、そうだったんですか……」

「でもね、本来海軍戦力は沖縄あるいは北海道に集中している筈。何  
処かが圧力を掛けて、海軍特殊部隊の訓練ルートを変えていたのよ」

? 何処かと言っているが、そんなことができるのは十師族以外に無  
い。つまり、響子は「どこの家がやったのか知ってる?」と聞きたい  
訳だ。それが、一条かどうかも確かめなかったのだろう。

「少なくとも、一条家にそのような事実はございません。自分の言葉  
だけでは信用できないならば、父に直接問い合わせて頂いても構いま

せんよ」

「？一条がきつぱりと言いつ切る。確かに日本海側ならともかく、横浜方面に回す意味は無い……そんなことを考えていると、不意にある事実気づいた。」

「そもそも、密かにルートを変えさせていたということは……：侵攻を予期していながら、わざと情報を隠蔽していたということですよ？」

「ええ。そうなるわね」

「？そのことについて尋ねると、彼女も頷いた。同じところまで辿り着いていたようだ。」

「さつき、将輝くんには一応質問したけど。実際のところ、こんな芸当が出来た家は限られてくるわ。関東に地盤を持っていないと。つまり、七草、十文字。あるいは、四葉……」

「？響子の「四葉が関わっているのではないか」という推測は当たっているだろう。論文コンペ前、理澄はずっと欠席していた。タイムミングが完璧過ぎる。」

「……何処の誰がやったのかは知りませんが。こんな戦争を起こされて、おれだって迷惑してるんです。おかげで、コンペで発表できなくなりました」

「？おれに「精神干渉魔法」の発表をさせない為に、四葉は大陸情勢を放置しておいたんじゃないのか。何だか、そんな風にも思えてきた。いや、それは穿ち過ぎか。」

「本当にそう。迷惑な話よね——2人とも、今日はありがとう。あと、新潟基地行きの軍用機があるから乗って行ったら？」

「？おれ達はその好意に甘えることにした。そろそろ、家に帰りたいからだからだ。そして、ここまで親切にしてくれる響子の目的は、最初からこちらとの接触だったのだろう。だけど、見込み違いだ。」

「？前提として、戦闘やそれに類する裏仕事は畑違い。元々は「実験体の精神を弄る仕事」を担当していた。最近、第四研に近づいてすらいないが。また、四葉との関係はよろしくない上、唯一のメッセンジャーである理澄も必要なこと以外は言っていない。」

？そういう意味では、おれは普通の魔法師なのである。コネも使っていないければ、何の意味も為さないので。



？夜久と将輝との話を終えたあと、藤林は暫定的に設置された中華街内の独立魔装大隊本部へと戻ってきた。

「お疲れ様です」

？藤林の帰還に気づき、すぐさま敬礼をしたのは達也だ。彼はムーバルスーツ姿だが、フルフェイスのヘルメットだけは外している。待機中で暇だからか、テーブルでCADを弄っていたらしい。調整用の機械が幾つか側に置かれていた。

「達也くんの従兄弟に会ってきたわよ。見た感じは、普通の男の子ね」  
？彼女は達也の隣に座り、開口一番にそう告げた。

「ああ、夜久ですか」

「スカウトも兼ねようかなと思っていたんだけどね。一条の御曹司がいたから諦めたの」

「良いんですか、それって」

？独立魔装大隊および、大隊の所属する第一〇一旅団は「十師族に依存しない戦力」を増強することが目的である。だから、達也の「本末転倒ではないか」という指摘も正しかった。

「まあ……大丈夫じゃないかしら」

「適当ですね。とはいえ、乗らないと思いますけど。彼の魔法は戦闘向きじゃない」

「そうなの？ 九校戦で十文字くんを倒していたのに」

「詳細は言えませんが……『魔法師として』ならば、四葉特有の色が一番出ていますよ」

？四葉家の本質は、精神とは何かを追い求める研究機関だ。その視点から見れば、夜久の「精神構造干渉」は紛れもなく王道。そして、深

夜が持っていたものよりも精度が高い。

「そんなこと言ったら、私だつて戦い向きの魔法とは言い難いわよ。戦闘だけが魔法じゃないわ」

「これは一本取られましたね」

？揃つて笑い合う、達也と響子。部隊の中でも年が近いからか、2人は割と姉弟のような関係なのだった。

「――藤林、戻っていたのか」

？隊長である風間玄信少佐が姿を現した。彼は立ち上がつて敬礼しようとする部下達を手で押しとどめる。

「やはり、市街地戦は厄介だな。魔法や爆弾で吹き飛ばす訳にもいかん」

？風間は椅子にどっかりと腰掛けると、疲れたように溜息を吐いた。

？日本へ侵攻してきた兵達は、中華街で匿ってもらつつもりで逃げ込んだのだろう。それを利用して「中華街に攻め込んだ敵兵から、民間人を保護する」というお題目を立て、大隊は中華街に突入したのである。そして、あちらが反撃してきたのを理由に戦闘を行ったのだ。

「民間人とゲリラの区別が付きませんか。こちらは受け身に廻らざるを得ません」

『『再成』のおかげで損害は最低限まで抑えられたがな……恩に着るぞ、達也』

？達也は静かに頷く。彼の魔法によって、隊員らの傷を戻していたのだ。

「この後はどうしましょう?」

「二〇一の別部隊が引き継ぐ。それに、公安のほか各組織がガサ入れのチャンスだといきり立っている……鉢合わせする前に引き揚げるぞ」

「了解です」

？独立魔装大隊は、魔法装備を主装備とした実験的部隊であり、その性質上機密レベルが高い。おいそれと所属を明かせないので、別部隊に折衝を任せることにしたのである。

「それにしても。真田さんが残念がっていたわ。『サード・アイ』の実戦投入が出来なかったらって」

「使い所がありませんでしたからね。仕方ないですよ」

「微笑みながら達也は返事するが、内心では忸怩たる思いを抱えていた。

「？どうあれ、大規模な『マテリアル・バースト』は使えない。夜久の行使した「誓約」<sup>オーリス</sup>によって、兄妹の魔法演算領域は一部閉じられている。これは、夜久しか解くことのできない呪い。彼が母親からの愛を求める限り、魔法の効果は続くのだろう。

(……本当に哀れだよ、夜久)

「？だからこそ、達也は深雪を連れて四葉を出なければならぬ。自分の叔母——真夜を絶対に倒さねばならない。

「？四葉が崩壊した時、夜久も母親から解放される。そうなれば、きっと全てが解決するのだ。



「？横浜に戦火が広がった日の夜。

「？真夜は、四葉本家の邸宅内にある一室に足を運んでいた。その部屋に自由に入れるのは、ほんの一握りの人間のみ。部屋を管理している使用人ら数人と真夜、そして葉山だ。四葉の血縁でも、真夜の許可を取らないと入ることは許されない。

「？部屋に入ると、清潔な白いベッドが一番に目に入る。その他には大した家具もなく、室内は殺風景な印象だ。ベッドでは1人の女性が眠っており、彼女の容貌は真夜にとってもよく似ていた。

「姉さん……」

「？様々な感情を奥底に込め、小さな声でそう呟く。

「？眠っている女性は、真夜の姉である深夜だ。彼女は、3年前——沖縄海戦の時からずっと眠り続けている。想子感受性が飛び抜けて

高かった深夜は、アンテナナイトのノイズによって、想子体にダメージを受けた。元々、過度の魔法行使で弱っていた身体だ。故に、彼女の命は風前の灯であった。

？しかし、解決する方法が無いわけではなかったのだ。肉体と想子体のズレによって身体に不調を起こしているのであれば、魔法演算領域を閉じてしまえば良い。そうすれば、意識的に行わない限りは、周囲の想子を取り込んで体内を循環しなくなる。けれども、その選択は「魔法を喪う」とことと同義だ。そのような酷な宣告をしていいのか。誰もが迷っていたのだ。

？ある日のこと。病床に臥せっている深夜が、急に甥に当たる夜久を呼び出した。人払いがされていて、その時に2人がどのような話をしたのかは誰も知らない。だが、その後には深夜の魔法力はもう失われていた。理由を夜久に訊ねても「叔母様が誰にも言うなと言った」の一点張りで話にならない。

？では、深夜に訊けば良い話だったのだが、それも叶わなかった。そもそも、想子体へのダメージを和らげたとしても、弱ってしまった身体が急に治る訳でもない。ただ単に、これ以上悪くなるということはないというだけなのだ。数日後には、彼女は意識を保つことも難しくなっていた。主治医曰く、「体力が戻らない限りは目覚めないだろう」ということだ。

(このチューブを抜いてしまったら、姉さんは呆気なく死ぬのよ)

？点滴や人工呼吸器の管を見つめ、真夜はそんなことを考える。姉は生命維持装置に頼って、無様に生きながらえているのだ……簡単に殺せてしまう。何回もそんな想像をした。でも、踏み出せない。今までの人生、たくさん人を殺しているのに。

？自分は心の何処かで、深夜が目覚めるのを待っているのか。本当は和解したいと思っっているのだろうか。遥か昔のように、仲が良かった姉妹に戻りたいと――

(――違うー！)

？真夜は勢いよく首を横に振った。綺麗にセットしていた髪が少し乱れる。



(そんな訳ないじゃない……私達は憎しみあっていたんだから)

?唇をきゅつと歪め、複雑な笑みを浮かべる。そして、深夜に語りかける。

「そうよね? 酷い姉妹だわ、私達……」

?もちろん、返事は無い。だから、勝手に返事を考える。そうして、真夜は1人で納得して頷く。3年もの間、彼女はここへ来るたびに何度も何度もそれを繰り返していた。

「また、来るわ」

??そう言い残し、真夜は姉の元を去る。今日も殺せなかつた……と  
思いながら。

今が思い出になるまで

?あの戦争——横浜事変のあと、国内に九つあるすべての魔法科高校は休校となった。

? 妥当な判断だろう。その時はすっかり気を持っていた生徒達が、帰還後にPTSDになってしまう事例も多発している。このまま魔法実習を強行すれば、ドロップアウトが増えてしまう。つまりは、魔法力の喪失だ。

?とはいえ、おれはそういう状況とは無縁だ。生まれが生まれだからだろう。「死」の第四研と戦場、どちらの空気もさほど変わらない。

? 休みなのをいいことに、一日中ベッドでダラダラと過ごす。HARの設定を弄って、食事を枕元まで持つて来させれば完璧。優雅な休日とはこのことだろう。

「……そういえば。叔母様の容態はどうなのかな」

? することが無いと、考え事ばかりしてしまうものだ。記憶がぐるぐると巡って——叔母様に呼び出された日のことを思い出していた。



?あの頃のおれは中学一年生だったが、ずっと四葉の村に住んでいた。

? というのも、津久葉家がおれの世話に匙を投げて以降、第四研で寝泊まりすることが常となっていた。研究所にいた理由は簡単で、本家の邸宅には足を踏み入れることを許されなかったから。また、分家との繋がりが薄い為に泊めてくれる親戚もいない。単なる消去法である。

「——夜久様。御当主様がお見えになられています」

「えっ?」

? けれど、本当に珍しく——何なら、最初で最後だった——お母様

がおれの住む部屋へやってきたことがあった。

「深雪さんと達也さんの演算領域に『誓約』<sup>オース</sup>を掛けてあげなさい」

？ 部屋に入るなり、お母様はそう言った。

？ 端的な言葉だったが、すぐに理解できた。少し前から、「誓約」の魔法を練習するように言われていたから。第四研にある実験体で何度か試し、その全てを成功させていた。その結果を見て、おれを認めてくれたのだらう。

「やってくれる？」

？ 一も二もなく頷いた。お母様のお願いならば、おれは何だってやる。たとえ、それがどんなに非道なことであっても。

「ありがとう。私は良い息子を持ったわ」

？ 微笑んだお母様は、とても優しい声で言う。

？ だけど、すぐに能面みたいな表情になった。一瞬の幻のようなそれ。本心なのか、嘘なのか。誰も答えを教えてはくれない。

(どうして、こんな魔法で生まれちゃったんだらう)

？ 何度も考えたことだ。「流星群」<sup>ミューティア・ライオン</sup>を持っていたなら……それだけでなく、物質構造に干渉できたならば。どうだったのだらう。仮にそうであれば、お母様はもつと態度が違ったのか。分からない。

「……じゃあ、お願いするわ——この子達よ」

？ 部屋のドアが開いて、2人の人間が入ってくる。これが、従兄妹達との初めての邂逅だった。

「お前が夜久か」

？ 兄の方が最初に口を開いた。見れば分かることを一々確認するのか、と思いつながら返答する。

「ああ、そうだよ」

「そうか」

？ 会話はそれだけだった。妹の方は何も言わない。ただ、おれを静かにじっと見つめるのみだ。

？ 2人を部屋の端に並んで座らせる。おれはCADを手に取り、彼らの魔法演算領域に向けて「精霊の眼」<sup>エレメンタル・サイト</sup>を向けた。解像度が上がった精神構造の情報が、脳へとダイレクトに流れ込む。

? おれにとつては、見慣れた景色でもある。たいして苦勞もせず  
に、演算領域を閉じてしまえた。

? やったことは簡単だ。まず、達也の魔法演算領域の形を一部変え  
て、深雪の魔法演算領域と繋ぐ。それによって、2人の無意識領域で  
決定される変数が同期できる。すると、深雪は達也の演算領域内も自  
分の変数で定義が可能だ。そして、魔法を制限する術式で、達也の「分  
解」に制限を掛ける。

? たったそれだけのことであり、この一連の工程を一つの魔法式で  
集約している。おれが魔法を維持する限り、彼らの演算領域は封印さ  
れるのだ。

「終わったぞ。さっさと帰ってくれ」

? おれはそう言つて、彼らに背を向けた。兄妹が部屋から去ってい  
く音が聞こえる。もう出て行つただろうと思い、そつと振り向く。

「……お母様?」

? 一緒に戻つたと思つていたのに、お母様はまだ部屋にいた。何も  
言わずに、こちらへと近づいてくる。

「いい子ね。……その魔法、絶対に終わらせてはダメよ?」

? 白くて冷たい手が、おれの頬を柔らかく撫でる。今、すごく親子  
みたいだと思つた。

「うん」

? やっぱり、嘘でもいいや——だけど、思うのだ。

? 仮初の愛でこんなに嬉しいのなら、本当の愛はどれほど素晴らし  
いものなのだろう?



? けれども、おれに「誓約」の魔法式を学ばせていたこと。そして、  
その魔法を行使させたこと。それらは、本来の術者——叔母様の死期  
が近いことを意味していたのだ。それから1ヶ月もしないうちに、叔

母様の病状はひどく悪化したらしい。何度か、使用人達が噂しているのを耳にした。

「?ある日のこと。急に「深夜様が会いたいと仰られている」とメイドに言われた。」

(それにしても、叔母様が何の用なんだろう)

「?伊豆にある四葉の別荘へ向かう車に乗りながら、おれはそんなことを考える。今まで特に叔母様と関わりがあつた訳でもない。お母様とよく似てはいるが、全くの別人。特に思い入れは無かつた。」

「?別荘は山奥にあるから、車でもとても時間が掛かる。最初は起きていたけれど、眠くなつて寝てしまった。だから、何時間移動したのかは分からない。気づけば、もう目的地であつた。」

「……………こんにちは。叔母様」

「?通された部屋に入ると、叔母様はベッドの上で起き上がつていた。本を読んでいたらしい。サイドテーブルには、葉の挟まった文庫本が置かれていた。」

「?ガーディアン——元々担当していた桜井穂波が死んだ後、後任の者が送り込まれた——は部屋に居なかつた。おれは身内であるし、問題無いと判断したのかもしれない。それとも、叔母様が「入らなくて良い」と言い含めたのか。」

「来てくれたのね」

「?叔母様は椅子を指差した。座れ、ということらしい。」

「……………真夜は元気がしら?」

「?さあ、あんまり会わないから……………」

「?沈黙がこの場を支配する。こういうことは言っちゃいけないのだろうか。」

「?そうだったわね——貴方は私の魔法を引き継いでいるんだから」

「?そして、私の犯した罪も。叔母様はそう続けた。」

「?犯した、罪?」?

「私はね……………自分の魔法で、真夜の記憶を全部意味のないものにしちやつたの。良かれと思つてよ? でも、それは間違いだつた」

「?事情は何となく知つていた。けれども、叔母様本人の口から直接

聞いたのは初めてだ。

「……真夜は、決して私を許しはしないわ。だけどね、いつかあの子が貴方を愛することが出来るようになれば。少なくとも……私の魔法を許してくれたことになるの」

？おれを通して、叔母様はお母様を見ていた。

「だからね、貴方が生まれてよかった。私の命が尽きても、精神構造干渉魔法は無くならない。これからも、真夜と向き合えるから……」

「……ふざけるなっ！」

？叔母様に限らず、みんな一緒だ。誰もが、精神構造干渉を「四葉深夜の魔法」と言う。

？でも、精神構造干渉は誰かから貰った訳では無い。確かに、この魔法によつて多くの哀しみを抱えていてる。もつと他の魔法だったら、と思わない日はない。それでも、「夜久」という人間を確立するアイデンティティだから――

「――おれの魔法だ！」

？ある考えが、頭をもたげた。

？叔母様から魔法が消えてしまえば……皆、おれを否定するようなことを言わないんじゃないだろうか？ 無意識にCADをポケットから取り出す。

「CAD!?! 貴方、まさかっ！」

？起動式が演算領域を回り、魔法式として投射される。

？精神構造干渉魔法「マジ・インテルフェクトル」。発動したそれは、叔母様の「魔法師としての人生」を消し去った。

「どうして……」

？おれは呟いた。どうして、こんなこととしてしまったんだろう。あまりにも突発的で、意図したことではなかった。叔母様は想子に酔ったのか、頭を抑えている。

「――奥様！ どうされましたか!?!」

？勢いよくドアが開き、泡を食った様子の女性が転がり込んできた。間違いなく、深夜のガーディアンだ。

？やってきたということは、魔法を発動したのはバレている。もは

や、言い逃れはできない。

「心配しないで、莉子。私が頼んだことだから」

？最初に口を開いたのは、叔母様だった。

？おれは目を丸くする。そんな事実は、全くもって存在しないのだ。

「ですが……」

「私が言ってるのよ。納得できない？」

「いえ……」

？莉子——彼女は「桜シリーズ」第一世代の桜宮莉子という——は、はつきり言い切られると反論出来なかったようだ。どうすることも出来ず、彼女は部屋から出て行った。

「——さて。やってくれたわね」

「ごめんなさい……」

？謝って済む問題でない気はしたが、素直に謝罪をした。

「でも、私には勇気がなかったんだわ……。死んでしまうことで、真夜の弾劾から逃げるつもりだった。自分の問題なのにね」

？ポツポツと叔母様は話し始める。懺悔の言葉だった。

「いずれは……全部向き合わないと。——あのね、夜久さん。これだけは聞いて？ 真夜が子供を作れるかもしれない、って聞いた日……本当に嬉しかったのよ」

「あの子が良い母親になれなかったのは、きっと私のせいね。姉なのに、見本を見せてあげられなかった」

「深雪のこと、魔法以外で褒めてあげたことがあったかしら。どうして、今まで気づかなかったのかしらね？」

「どうだって良くは無かった。だけど、あれくらいキツく当たらないと、周囲は納得しなかったわ。ガーディアンという立ち位置があって、ギリギリ保たれる均衡なの」

？長い話だったし、感情のままに話題が転換していく。

？おれは黙って、その全てを聞いた。合いの手を入れるのは無粋だと思っただから。

「——貴方が生まれてきて、本当に良かった」

? 先程聞いた言葉と似通ってはいたが、重みが違った。

「これからも辛い思いをさせるでしょうけれど……真夜に思い出を作ってあげて。それができるのは、貴方しか居ないの」

「叔母様……」

「私が話したこと……誰にも内緒よ。そして、今日のこと内緒。私が生き延びる為に望んだことにするわ」

? そうして、叔母様は優しく微笑んだ。涙を流しながら、おれも笑った。



「……思い出、出来てるのか?」

? 高校生になって、色々なことがあった。

? 一高の退学に、三高への転校。三高での九校戦優勝など。おれにとっては、印象的な出来事であるだろう。けれど、お母様にとっての思い出になるのか。

? だが、叔母様の願いだ。奪ってしまった思い出を埋めることで救ってあげて欲しい——そう言われたら、やるしかない。

「——あつ、電話鳴ってる」

? 端末に着信が入っていたことに気づく。布団の中で音が籠っており、聞こえにくくなっていたのだ。

「もしもし」

『夜久、起きてるか? どうせ、暇してるだろ? ウチの家でゲームしないか? ジョージと武倉も来てる』

? スピーカー越しに一条の明るい声が聞こえた。

「まあ……行ってやってもいいぞ」

『何なんだ。夕飯までに来いよ。待ってるからな』

? そこで、通話は切れた。さて、今から行くべきなのか。夕飯までにということとは、ご飯を食べていけということだ。



? 一条家の食事をご相伴に預かることは何度かあった。当主夫人の一条美登里が腕を振るって作る料理は、味が良くてとても美味しい。理澄や吉祥寺は「研究所の食堂はマズいから」という理由で、かなりの頻度で食べに来ていた。

「HARで調理できる料理には限りがあるし……。たまには、違うものが食べたい気もするな」

? 布団から出て、服を外出用のものに着替える。鞆に荷物を適当に詰め、玄関の扉を開けた。

「……ねえ、叔母様。今、おれはあんまり辛くないよ」

? 夕焼け空を見上げて、おれは呟く。

? 決して幸せではないし、お母様は未だに向き合ってくれない。それでも、悲しみを偶に忘れられる時がある。

? 三高の皆で食事をする時。一条達と一緒に遊ぶ時。理澄のくだらない悪巧みに渋々付き合う時——自分自身の悩みが不意に消え去るのだ。

(お母様にも、そんな時があるのかな)

? あって欲しい、と願う。一瞬でも……過去の苦しみから解放されて、それがお母様の安らぎになれば良い。

「——あつ、いたいた！ おーい！」  
? 急に大きな声が聞こえた。目を向けると、理澄と一条、吉祥寺の姿が。

「散歩がてら、ヤクを迎えに来たんだ。ゲームも疲れてきたし」

「何のゲームやってたんだ？」

「VRのシミュレーションゲームだ。ジョージが知り合いの教授から貰ってきたらしい」

「魔法で街を破壊するゲームだよ。監修していたのに横浜のアレで発売期になったから、つてモニター代わりにくれた」

? 確かに、そんなゲームを今発売したら世間から非難轟々だろう。

「面白そうだな。おれもやりたい」

「言うと思った」

? 一条の家に向かって、皆で歩き始める。夕陽はもうすぐ沈みそう

だ。  
暗くなる前に、と早足で歩いた。

## 来訪者編

黙ったままではいられない

? 魔法科高校も、流石にずっと休校という訳にはいかない。スケジュールも詰まっているので、再開しないと一年で規定のカリキュラムを終えられないからだ。高等学校で学ぶ一般科目の上に、魔法系カリキュラムを上乘せしているので、どうしようもなくタイトな時間割なのだ。

? 一般科目はライブ授業ではなく映像授業なので、動画を個人の端末へオンライン配信すれば何とかなる。けれど、魔法系はそうもいかない。魔法実技は学校の設備が必要だし、理論の授業動画は学内端末からしかアクセスできないのだ。だから、何とかして授業を開始させねばならなかった。

? という訳で、三高も対面授業が再開した。家にいても暇だし、始まったことは大いに喜ぶべきことだ。

? 登校準備をしていた朝のこと、葉山さんから映像通話が来た。リビングの画面に映像を映し出し、話しながら朝食を食べる。内容は「USNAに動きがある」ということだった。どうやら、四葉の縁者の存在についての真偽を判断する為らしい。要は、おれのことだ。

「USNA? それはまた変なところから」

? ジャムをたっぷり塗った食パンを齧りつつ、おれはそんな返事をした。

「七草か一条が使っているメールを覗き見されたのやもしれませんが。それを真に受ける、かの国もかの国ですが」

? つまり、四葉の係累が第三高校に通っていることがバレたと。だが、葉山さんは割と落ち着き払った態度だったので、このことは許容範囲なのだと理解できた。

「留学生を送り込むそうですよ。しかも、交換留学でない大盤振る舞い。ここ最近の情勢では、あり得なかったことです」

? 魔法師の海外への移動は原則禁止されている。過去には、「魔法

因子の掛け合わせ」という目的で海外交流が盛んな時期もあった。けれども、亡命などのトラブルが多かった為に廃止されてしまったのだ。強い魔法師がいなくなるだけでなく、魔法技術も流出してしまう。それは、どの国も避けたいことであった。

「第三高校に？」

「魔法大学と第一高校、第二高校も対象だそうです。この辺りは、カモフラージュでしょう」

？そう言ったあと、葉山さんは改めて居住まいを正す。

「——理澄様に対処をお願いしてはいます。とはいえ、スパイだからといって殺す訳にも参りません。そんな行動は余計に相手の神経を逆撫でするだけ……ですから、夜久様も『慎重な行動』を心掛けて下さいね」

「おれはいつだって慎重ですよ」

「それは良うございました」

？彼はニコニコした笑顔を崩さない。だけど、その完璧な表情管理の下では「信じられない」と思っているに違いなかった。今までのおれの行動を考えれば、無理もないことである。

「ところで、お母様は……」

「真夜様は、今日の師族会議の為にご準備されています。夜久様に直接お伝えすることが叶わない故、私にご連絡した次第です」

？本当はお母様が連絡しようとした、は明らかかな嘘。でも、葉山さんが気を遣ってくれているのが分かるから、おれもわざわざ何か文句を言おうとは思わない。適当に礼を言って、通話を終えた。そろそろ、学校へ行かなくては。学校の近所に住んでいるから、1限目が始まるギリギリでも本当は大丈夫だ。けれど、専科——三高での一科生を意味する——では朝礼があり、遅れると反省文を書かされてしまう。それが嫌なので、ちゃんと真面目に通っている。

？教室に入ると、殆どの生徒が揃っていた。クラスメイトに「おはよう」と挨拶し、おれは教壇の前に立つ。皆が不思議そうな顔でこちらを見る。行動の意図が分からないからだろう。

「——USNAからウチにスパイが来るらしいぜ！ 何かは知らない

が、ここへ調査しにくるとかそういう話だ！」

？先程聞いたことを、おれはクラスで思い切り喧伝した。こんな面白い話、言わないでいられるだろうか？ 理澄とはクラスが違うから、止められることもない。言いたい放題である。

？おれの話信じているかは知らないが、そういう話題を好戦的な三高生はとても好む。「一条を狙おうつてののか？」だの、「よし、USNAと全面抗戦だ！」だの、教室はとんでもない大盛り上がり。途中で担任が入ってきたが、皆の話を聞いてそれに関連する話題へと変わった。朝礼そのものに遅刻したら怒るが、それ以外では非常にノリが良い担任なのだ。

「……ところで、津久葉。その話をどこから聞いてきたんじや？」

？四十九院が根本的な疑問を尋ねてくる。その質問を待っていた。とはいえ、「四葉からです」は普通にマズい。葉山さんに怒られる。

「理澄から聞いた。アイツ、情報通だからな」

？クラス中の視線が集まる中、おれは良い笑顔でそう言い切った。彼は頭を抱えることだろう。そして、お母様にもめちやくちや怒られる。

？これくらいしないと、今朝の嫌な気分は吹き飛びそうになかった。



？横浜の一件についての対応、という名目で開かれた臨時師族会議はオンラインにて開かれた。本来ならば、魔法協会関東支部で行われる。けれども、まだ全システムを稼働できる状況ではない為にそれは取りやめとなった。

？そして、今回の議題は「横浜事変における四葉家の隠蔽疑惑」について。九島家がいくつかの情報に基づいて出したものだ。だが、四

葉家当主——四葉真夜は何とも余裕綽々であり、「結果的に対処できただけ」と堂々とした態度で開き直る。

「——では、四葉家に隠蔽の意図は無かったと？」

？九島真言の問いに、真夜は薄く笑みを浮かべたまま頷いた。

「ええ。共有した資料を見て頂くとお分かりになられるかと思いますが、今回の話は春の一件に遡ります」

？他の当主達へ画面共有で見たものは、反魔法団体「ブランシュ」の資料。

「魔法科第一高校内で暗躍していた『エガリテ』という組織の元締めが『ブランシュ』です。今まで特に大きな動きが無かった為、公安は静観していましたが……。今春、一高内が反魔法思想に塗り替えられる騒ぎがあり、検挙に動かざるをえなくなりました。そして、こちらに『依頼』を」

？実際のところ、その依頼を受けたのは「黒羽」だ。それを理澄がやりたがったので、黒羽貢は彼に実行役を任せただ。次期当主としての「実績」作りにもちようど良かった。

「少し待ってくれ、四葉殿。関東地方、特に都内は七草家と十文字家の領分だろう。なぜ、貴家が？」

？七草弘一は軽く手を挙げて発言をする。それに対し、真夜は少し鼻を鳴らして反論した。

「そもそもの原因は、反魔法思想を持つ生徒と七草家との間で起きたトラブルではありませんか。七草家にこの件を任せると、遺恨が残る可能性があるというのが公安の判断でした。十文字殿も御子息が第一高校に通われていたので、同じ理由で避けたそうです」

？トラブルと聞いて、苦虫を噛み潰したような顔をする弘一。彼にしてみれば、迷惑を被っただけなのにといい思いが少しあった。

「まあ、それは尤もだ……。けれども、そもそも十師族の戦鬪行為は師族会議にて全ての家が共有すべきもの。なぜ、今まで明かさなかったのですか？」

？真夜の言葉に納得はしたが、十文字和樹はその中にある違和感を見逃しはしなかった。

「それは勿論、四葉家はその仕事を請けなかったからです。流石に十師族の縄張りに他の十師族が入るのはよろしくないでしょう？　なので、結局どこが担当したのかまでは知りません」

「？分家が請けた仕事は、本家の預かり知らぬこと。実態はともかく、書類上は全く血縁関係がないのだから。」

「だけど、途中まで乗った話ですもの。気にはなるでしょう？　なので、情報だけは集めました。すると、ブランチの支援者に元『崑崙法院』関係者がいることが発覚しましたの」

「？場の空気が一気に凍る。彼女の口から出た「崑崙法院」という単語。それは、「あの事件」を想起せずにはいられない。」

「崑崙法院は我々四葉家と因縁が深い……事情を聞く為に捕縛できないか考えていました」

「？作り物のような笑顔のまま、真夜は言葉を重ねる。」

「——そして、いくつかのセクションにご協力頂けないか、とは声を掛けました。それだけのことですわ」

「……事情は分かります。それに四葉殿のお気持ちを考えれば、少しばかり無茶をしてしまうのも仕方ありません。だが、海軍はいささか大袈裟すぎやしませんか？」

「？十師族内でも比較的四葉寄りの立ち位置を取っている六塚温子が、真夜に寄り添いながらも言うべき苦言はきちんと呈した。」

「海保が信用出来なかったからです。横浜事変においても、明らかな不審船を見逃しています。彼らの仕事ぶりには問題があることは明らか。——それに、海保の方にも以前に一度お声掛けしていますのよ。その時は、ターゲットに国外逃亡されましたが」

「？これでも信用できるか？という問いに、誰も答えられない。」

「内部で何か問題が起こっている可能性がある、か……」

「やはり華僑との繋がりが出来てしまっているのでしょうか？」

「海保だけでないのではないかと？　他にもあるはずだ」

「？もはや、四葉家よりも別のことへ問題は移ってしまった。とはいえ、そっちの方が大事なのだ。」

「？最終的には、疑わしい組織内の浄化の為に情報を精査して、対処」

に当たってもらおうということで、師族会議は決着がついた。



「——というのが、師族会議であったことだ」

？一条家当主の一条剛毅は、息子の将輝に事の次第を伝えていた。

？つまり、四葉家は自分達の用事の為に独自で動いていたこと。そして、それが偶然にも横浜事変の役に立ったこと。また、発覚した深刻な内部腐敗の問題のこと。これらによって、四葉は「十師族に相応しい行動をしていたか？」という糾弾を全て躲し切った。

「いつも思うが……言い訳が上手いな、四葉って」

「そういうことを考える担当が居るのかもしれない。昔は七草殿の方が口が上手かったんだが……」

「一高の件を出されると、やっぱり分が悪いか」

？七草の面子が潰れた、という理由で一人の生徒が退学処分になったのだ。もちろん本人だつて悪いし、一高側の非常に杜撰な対応など、様々な事情が噛み合った結果ではある。とはいえ、七草家はこれらに関係する話題で強気に出れない。

「ところで、どうだ？ 彼らの様子は。特に、四葉殿の息子じゃない方だ」

「夜久は分かるが、武倉も？ アイツはエクストラの家系なだけだろ？」

「いや……あの後に、改めて調べたのだがな。武倉という家は、魔法技能開発研究所由来では無かった。遡れば百家のどこかに辿り着くらしい、程度の家だ」

？武倉に限らず、四葉の分家は「百家支流」レベルの家柄に偽装している。数十年前まで遡って、家系図などを弄つてあるのだ。そこまですらないと、出自を隠すということにならない。

「ただ、息子の理澄は養子らしい。だから、十七夜家の令嬢と同じなのかもしれないな」

？四葉家次期当主になる可能性のある分家の子供達は、皆「養子」と



いう形で戸籍に登録していた。もしも当主に選出された際に、四葉の血を引く家として世間にバレると大問題だからである。

「なるほど」

「ただ、武倉というのは『業界』では有名な家ではある。要は、何でも屋つてやつだ。武器ブローカーの三矢に海外の顧客を紹介したりとかな。他にも政治献金をかき集めたり、広告代理店の真似事したり。何かと多方面に顔が広い」

「……確かに、夜久の戸籍を作ったと言っていたしな」

「四葉も厄介だが、ああいう手合いも別の意味で厄介だ。あまり気にしすぎることは無いが、心の何処かに留めておけ」

「？剛毅はそう言つて、息子との話を締めくくる。けれど、将輝の方はまだ父親に言いたいことがあった。」

「悪いが、親父……もう少し、話しても良いか？」

「何だ？」

「その武倉が、『USNA政府が各魔法系教育機関に留学生を送り込むらしい』という情報を掴んでいる。親父は何か知らないか？」

「？剛毅は難しい顔をして、黙り込んだ。たっぷり数分は時間を使い、再び口を開く。」

「正直な話……それは初耳だ」

「俺も単なる噂話だと思つていたんだが、今の話を聞いて……ちよつと、な」

「確かにな。一応、少し調べておく。……言つてくれてありがとう、将輝」

「？その情報が本当ならば、かなり大変なことだ。臨時師族会議の開催を魔法協会へ要求することも視野にいれねば——そう考えつつ、剛毅は将輝に頷きかえした。」

## ロスト・センチメンタル

?三高にUSNAのスパイがやってくる——そんな話は、二学期の終わりに留学生を受け入れるという告知があったことで現実味を帯びた。とはいえ、冬休みを挟むので噂も沈静化するだろう。元はと言えば、おれが撒いた種ではあるのだが。

?冬休みも普段の休みと同じように、皆で集まって遊んだ。また、夏と違って宿題の免除は無い。問題集を終わらせる為に、通話を繋いで宿題を進めたりもした。

?そして、正月。朝早くから、初詣の為に神社へと赴いた。空気が冷たくて、口から吐く息が白くなる。

「めちやくちや寒い!」

「そうだね。だけど、雪が降らなくて良かったよ」

?一緒にいるのは吉祥寺だけで、一条と理澄はここにいなかった。  
?理澄は四葉家の慶春会に参加する為、大晦日の数日前に帰省している。「一年で一番お小遣いが貰える日だから行かないとね」と、本人は嬉しそうに言っていた。そして、一条は家でもてなす仕事に駆り出されていた——どうやら、一条家では多くの客人を迎えて、新年のお祝いを盛大にするらしい。一応誘われはしたが、流石に断った。

?それに、おれは寝正月の方が馴染み深い。慶春会は出禁になっていたからだ。

「吉祥寺は良かったのか? 一条の家でお祝いしなくて」

「大晦日と正月は、研究室のみんなまでテレビを見るくらいでちょうどいいんだ。のんびりしたいしさ」

?彼も似たような理由で、一条の誘いを断っていた。という訳で、2人だけで神社へと足を運んだのである。

?賽銭を投げ入れ、鈴を鳴らす。二礼二拍手一礼。もちろん、願うのはただ一つ。

「何をお願いした? 僕は研究が上手くなりますように、だけど」

?その問いに、「お母様と仲良くなれますように」だと正直に答え

た。嘘をつくど、願いが遠のく気がしたから。

「お母様、つて呼んでるんだ。意外」

「笑うなよ。おれは結構良い生まれなんだぞ」

「そうだね……でも、親がまだ生きてるだけで羨ましいよ」

? 面白いえば、中学生の時に吉祥寺は佐渡島に住んでいたと前に聞いた。その頃は、佐渡侵攻が起きた時期とぴったり一致する。彼の親は、新ソ連兵に殺されてしまったのだろう。

? 返すべき言葉を見つけられなくて、石畳にある亀裂の数をただ数えた。

「……悪いな」

「ううん。それによつて、人生で最高の相棒と出会うことになった。その運命を掴む為には、両親の命すら差し出さねばならなかったのかもしれない……だけど、たまに考えるんだ。佐渡侵攻が無かったら、どんな生活をしてたかなつてね」

? 湿っぽい空気になってしまった。とはいえ、この状況で急に空元気を出すのも変だ。黙りこんで、境内を歩く。

「……あの人、とても目立ってるね」

? あちらも沈黙に耐えかねていたのだろう。吉祥寺がそつと話しかけてきた。

? 彼の視線を辿つて目を向けると、怪しげな金髪碧眼の少女がいた。キョロキョロと周りを見渡す行動も怪しいのだが、何より参拝者の目を引くのはその服装だ。今どき誰が着るのか、というようなミニ着物を彼女は着ていた。

「何だ、コスプレ撮影か?」

「それにしても、カメラマンが見当たらないけどね」

? じつと見ていると、不意に目が合った。その途端、少女は急に走り出す。「見つかった!」と言わんばかりの態度だ。

「追いかけてみるか」

「ええ!?!」

? おれと吉祥寺は走つて、少女の後を追う。逃げられてしまうことは無かった。何故かと言えば、彼女は履いていた高いヒールのせい

で、地面にすっ転んでいたからである。

「大丈夫か？」

？手を差し出してやると、少女はヨロヨロと立ち上がる。

「……ありがとう。助かったわ」

？そう言つて、彼女は澄ました顔をする。勝手に逃げて勝手に転んだだけなのに、その事実は元から無かったことにしたらしい。

「私はアンジェリーナ・クドウ・シールズ。最近、日本へ来た留学生よ。長いから、リーナで良いわ」

「もしかして、君は第三高校に……？」

？留学生という言葉で、吉祥寺がそう尋ねる。

「ええ、そうよ」

？少女——リーナはあつさりと頷く。

？第三高校へ留学してくる人間、つまりはUSNAのスパイだと言うことだ。しかし、スパイにしては詰めが甘すぎやしないか。こっちが心配になるレベルだ。

「新学期はよろしくね」

？その呑気ぶりに、何だか気が抜けてしまう。

「ああ、こちらこそ。まあ、三高は良いところだぜ」

？少なくとも、それは本当のことだ。スパイの任務があつたとしても、彼女は楽しめるのではないだろうか。



？正月も瞬く間に過ぎ、三学期がスタートした。

？何とか宿題も提出出来たので、おれはホツとする。問題集がやけに多くて大変だった。理澄はギリギリまで終わる気配が見えなかったよう、四葉本家の屋敷で部下に宿題を手伝って貰ったらしい。その部下の人も可哀想だ。

「——津久葉。どう見ても、あんな可愛い子がスパイの訳無いだろ

……」

「？おれ達の視線の先には、三高制服を着た金髪の少女——アンジェリーナⅡクドウⅡシールズの姿が。生徒会役員に連れられて、校内を案内してもらっているようだ。」

「知らねえよ。おれだつて、聞いた噂を言っただけだ」

「？クラスメイトの言葉に、おれは投げやりに答える。」

「？今の三高を賑わすのは、もちろん留学生の話題。USNAからやってきたリーナは、あつという間に校内のマドンナとなった。綺麗な顔立ちなのだが、髪型がツインテールであり、それが親しみやすさにもなっている。」

「？一色と一緒に並べば、金髪ツインの揃い踏みになるかと思いきや、あちらは最近髪を切つてショートボブに変えた。なので、髪型被りを見ることは叶わない。」

「ジョージと夜久は、正月に一度会ったんだよな？ アンジェリーナⅡクドウⅡシールズさんだ」

「？昼休み。食堂のテーブルで待っていると、一条がリーナを連れてきた。理澄と吉祥寺を含め、5人で食事をする。」

「USNAか……。海外なんて行ったことないから、想像もつかないや」

「魔法師の海外渡航は禁止されてるからね。国外の魔法研究者ともオンラインでしか会ったことないよ」

「それにしても、スパイが来るかもみたいな噂があつたけど……。全くそんなこと無さそうで、本当に良かったよ。武倉、お前どこから聞いてきたんだ」

「家の取引先。流石にソースは言えない」

「どうせ、変なデマ雑誌の記者だろ。それがインターネットの掲示板」

「？理澄は真面目くさつた顔で答えるのを、おれがわざと混ぜっ返し、ネタに変えて終わるはずだった——リーナが動揺した態度を見せるまでは。」

「どうした、リーナ？ 調子悪いのか？」

「？そう尋ねると、彼女は慌てて表情を取り繕う。」

「いえ。まさか、私がスパイと言われているなんて思わなくて……」  
「変なことを言つて、ごめんなさい。三高生は、そういうくだらない話題で盛り上がりがちで……嫌な思いをしないように、皆にもそれとなく釘を刺しておくよ」

「？一条がそうフオローしたことで、その場は丸く収まった。彼女も「気にしてない」と言ってくれたので、話題を他のものに変えて、また和やかに昼食は進んだ。」

「リーナって、九島閣下の親戚なの？」

「それ、さつきも聞かれたわ。日本ではとても有名なのね。……そうよ、私の祖父がクドウ将軍の弟に当たるの」

「？日本では常識——十師族当主の名前くらいは何となく知っている——の十師族の枠組みも、海外ではそう有名ではないらしい。」

「そういう縁もあつて、私に留学の話が来たみたい。日本語も少しは話せるし」

「なるほどな」

「？カバーストーリーとしては、それなりに出来ている。感心していたら、理澄と目が合った。どうやら「後で話がある」と言いたいようだ。」

「ところで、リーナは今どこに住んでるんだ？」

「学校の近くのマンズリーマンションよ。家具や家電が全部揃つてるから、すぐに住めて良かったわ。初めて来た国で、買いに行くのは大変なものね」

「？現代の物件であれば、H A Rが元々入っているのが殆どだ。それにH A Rの性質上、家電や家具もセットになっている。わざわざ別々には導入しない。こんなことは一般常識だ。それはきつと向こうの国でも変わらない。」

「？やはり、リーナは普通の生活をしていないのではないか。スパイ……にしては微妙なところだが、何か特殊な事情を抱えているのは間違いないさそうだ。」

◆  
? 放課後。おれは理澄に呼び出されて、校内の男子トイレに来ていた。流石にリーナも入ってこれないからだ。遮音シールドを張り、端でコソコソ会話する。

「――十中八九、彼女が『アンジー・シリウス』だね」

「シリウス、って……あの?」

? アンジー・シリウス。USNA軍最強の魔法師部隊「スターズ」の総隊長であり、国家公認戦略級魔法師「十三使徒」の1人。

「うん、そのシリウス」

「とてもそうは見えないけどな……」

「スターズの総隊長は純粋な魔法力のみで決まる。まあ、それでもあの若さは異例だけどね」

「いや、見た目の話だよ」

? どう見ても、あんな見た目の軍人がいれば騒ぎになるだろう。どこからどう見たって、未成年にしか見えない。

「ああ……それね。多分『仮装行列』を使って、姿を変えているんだと思うよ。九島の秘術があらゆるでも伝わっているのだろうね」

「だが、なんでそんな大物をわざわざ? 本業がスパイの奴、いくらでもいるだろうに」

「簡単なことだよ。四葉というアンタツチャブルでも、『ヘビィ・メタル・バースト』を打ち込めば死ぬだろ」

? そんなアメリカカンジョークみたいな気分で考えているのか。確かにそんなもの撃たれたら、おれだって普通に死ぬ。というより、別に戦略級魔法じゃなくなっちゃって死ぬだろう。

「暗殺が目的なのかね」

「最悪の場合はそうだろう。けど、恐らくは拉致が第一目的。……という訳で、僕がヤクの護衛役として暫くは一緒だ」

「護衛って言ったって、学校の外はどうするんだよ。常に一緒にいたら余計変だろ」

？そうになると、理澄と四葉との関係が露呈するかもしれない。それはそれで問題になる筈だ。

「……よそうするんだよ」

？理澄がモゴモゴと小さな声で言う。聞き取れなかったので、「なんて？」と聞き返す。

「だから！ 女装するんだよ！」

？女装……この男がやるのか。面白過ぎるだろう。想像するだけで面白い。

？おれは腹を抱えて大笑いする。呼吸困難になりそうだった。

「——で？ その時の名前は？ 理澄のままじゃ、意味ないだろ」

？散々笑ったあと、おれは話を本筋に戻す。理澄は慚然とした顔のまま、その問いに答える。

「メロディ。黒羽と仕事をする時に使うコードネームなんだ」

「コードネーム、ねえ……あそこらしいセンスだ」

？黒羽の双子、その弟の方も女装させられているのではなかったか。黒羽家当主の趣味が終わっているような気がしてきたが、そうではなく多分「プライバシー保護」なのだろう。それに弱そうな見た目の方が、敵の油断も誘える。

「家にいる分には大丈夫だと思うよ。特にヤクの住む地域は学生街だ。夜も明るいし、戦闘には不向きだと思う」

「じゃあ、人気の少ないところに行けば良いんだな」

？理澄は嫌そうな顔でため息を吐いた。

「そう言っつて、首を突っ込もうとするからさ……僕が女装してまで、前と一緒に行かないやダメなんだよ」

「嫌なら来なくてもいいぜ」

「放っておいたら、『マジ・インテルフェクトル』を使うでしょ。そんなもの、ホイホイ使われちゃ困るの。しかも、USNAの魔法師相手に」

？早々に切り札を封じられてしまった。あれを使えないとなると、攻撃手段は放出系に絞られてくる。

「横浜事変の時はさ、ゴタゴタしてたから……魔法の詳細は特に周囲



に分らないけど。実際、僕も『ワルキューレ』を使ってる」

「へえ、使ってたのか」

「固有魔法は組み上がるスピードが速いからね。——って、そろそろ戻ろうか。ずっと居座るのも変だ」

？密談を終えて、トイレから出る。ここまでしななければならないのは面倒だ。けれども、今のおれにはUSNAの監視が付いているのだろう。しかし、拉致は流石に嫌である。お母様と本当に別れてしまうではないか。だけど、おれは一つ気になることがある。

？もしも、おれがUSNAに連れ去られてしまったら——四葉は総力を挙げて、迎えに来てくれるのだろうか。一国を滅ぼしてくれるのだろうか。

(答えはもう分かりきってるか)

？そんなセンチメンタルな感情は、今の四葉にはもう存在しないのだろうか。残っているのは、過去の苦しみと後悔だ。

## 合理的よりも感情的に

?リーナは自分の住むマンションに戻ってすぐ、同居人——生活面でバックアップをしてくれている、シルヴィア・マーキュリー・ファースト准尉に弱音を吐いていた。

「もう、私は無理です……。だって、『スパイ』って学校中で言われているですよ! 本国の情報統制が失敗しているとしたか思えません!」

?テーブルに突っ伏して、メソメソするリーナ。

?たくさんの不安を抱えて、異国にやってきたのだ。そして、いきなりのスパイ呼ばわり。当たっているだけに、偶然だと笑い飛ばせない。もうターゲットにバレているのではないだろうか……。そんなことも頭を過ぎる。

「流石にあり得ませんよ……。気にせず、堂々としていたら大丈夫ですよ」

「シルヴィは行ってないから、そんな呑気なことが言えるんです……。! もし本当に露呈しているなら、大事なんですからね!」

「いや、あの『ヨツバ』なのですよ? 我々の動きを知っているなら、とつくに動いている筈です。けれども、襲撃なども今のところはみられません。情報漏れは無いと見るべきでしょう」

?アンタツチャブルとまで言われる、あの悪名高い四葉家である。なのに、特に動きは見られない。つまり、まだ気づかれてはいない。シルヴィアはそういう論理で、リーナを元気付けた。

「そうですね……。ごめんなさい、なんだか弱気になっていたみたい」

「一気に環境が変わりましたからね。仕方ないです。……もちろん、リーナがちよっぴり子供なのも理由にありますけど」

「ちよつと!」

?シルヴィアは慰めだけではなく、からかいの言葉も混ぜてきた。リーナは不満げに頬を膨らませ、唇もツンと尖らせる。

「もう、そういうところですよ。——とところで、ターゲットはどんな感じでしたか? 『夜の女王』の息子でしょう?」

「このまま拗ねていたら、話も進まない。それはリーナも理解していたから、彼女は素直に問いに答えることにした。」

「……彼、本物なのですかね？　あまりにも『らしくない』というか……実力を隠しているようにも見えなくて」

「その感想を抱いたのは、午後の歓迎会を兼ねたレクリエーションのとき。一年生達で魔法を使ったミニゲームを行ったのだ。そのゲームは「単純な移動系魔法で金属製ボールの制御を奪い合う」という簡単なルール。リーナは持ち前の高い魔法力で、十師族直系の一条将輝と互角の戦いを繰り広げた。けれども、ターゲットの夜久相手には彼女がまさかの全勝。心から悔しそうに——怒ってCADを叩きだす夜久を見て、拍子抜けしてしまったのである。」

「実際、四葉直系の割に夜久の演算能力はそれほど高くない。深雪や理澄どころか、新発田勝成にも劣るレベルだ。精神に関する魔法に魔法演算領域のリソースを多く割いている為、他の分野に関しては「優秀な魔法師」の範疇に留まる。だから、フラッシュ・キャストの併用などの搦め手を使うならばともかく、単純なスピード・干渉力の勝負ではどうしようもない。」

「ペンタゴンの調査資料では、『彼は認知されていない』とありました。もしかしたら、魔法力の問題から彼は重要な立場でないのかもしれない。特に護衛もつけないで一般社会に紛れていることへの説明も付きます」

「なるほど。それは一理ありますね。それならば、説得次第で『亡命』後に積極的に情報を提供してくれる可能性も……」

「想定していたプランは、不意打ちで夜久を襲撃して拉致するとうシンプルなもの。四葉の血統の魔法因子だけでも有用である故に採用された乱暴すぎる案だが、研究に協力してくれるのならばありがたいことだ。」

「？とはいえ、今の段階では皮算用に過ぎない。だが、それでもリーナは少し安心することができた。」

◆  
「おれは一条家に遊びに来ていた。夕食も食べていけと彼は言うので、ご相伴に預かることに。キッチンからは出汁か何かの良い匂いがする。食事が出てくるまで、おれは一条と色々駄弁っていた。」

「理澄や吉祥寺は？ 研究が忙しいのか？」

「おれの監視をすと言っていた割に、理澄は側には居ない。抜け出すことが出来なかったのだろう。あるいは、そうすぐにスターズは動かない筈だという判断か。」

「ジョージ達は魔法大の留学生との交流があるらしくてな。それで来れないらしい」

「へえ。大変なんだな」

「あーあ。真紅郎くんに会えないなら、意味無いよ」

「？ 一条の妹の茜が、テーブルに皿を並べながら嘆く。彼女は吉祥寺に恋する乙女なのである。」

「お前はジョージに家庭教師を頼んでる癖に……。ちよつと会えないくらいで贅沢だな」

「乙女心は繊細なのー！ 毎日、真紅郎くんに会ってる兄さんには言われたくない！ だいたい、何の権限があつて、あたしの恋路を邪魔するのよー！」

「だってなあ……。このままだとジョージは小学生に手を出す、やばい男になってしまうし……」

「言つても、4歳差だろ？ 別に問題ないんじゃないか」

「？ おれは茜の肩を持ってやった。好きだと言ってるんだから、ハッキリさせてやれば良いのと思ってるからだ。」

「夜久さんは話が分かる！ 兄さんもこの紳士ぶりを見習つたら？」

「？ 茜が目を輝かせ、兄に文句を言う。しかし、一条の方はすげない返答をするのみ。」

「もしもコイツが紳士なら、日本中の魔法科高校生が退学処分になつてしまうな」

「うるさいな。あれは七草が悪いんだ」

「そういえば、夜久さんって一高を追い出されて三高に来たんだったね。すっかり忘れてたけど」

「5月の終わり頃に一高を退学になり、編入試験を受けたのが6月初め。思えば、三高生としての時間の方がもう長いのだ。」

「——将輝が家に連れてきた日は、一体どんな子なのかと思ったがな。」

今は真紅郎君や理澄君共々、息子の良い友達で居てくれて嬉しいよ」

「不意に会話に入ってきたのは、一条家主の一条剛毅であった。夕食の時間になったから、やってきたのだろう。」

「……どうも。お邪魔しています」

「剛毅はおれの素性を知っている。そう思うと、毎回顔を合わせるのが少し緊張するのだ。」

「ゆっくりしていきなさい」

「彼は静かに頷いて、そう声を掛けてきた。」

「おれに父親はいない。生物学上はもちろん存在するが、お母様の卵子が一番安定するものが遺伝子工学の観点から選別されて選ばれたのみ。単なる番号を付けられた試験管だ。」

「だから、「父親」という概念はあまり身近なものでなかった。何だか、変な気分になってしまおう。」

「——さて、皆が揃ったところで！ ご飯にしましょうか」

「美登里の言葉で、夕食の時間が始まる。茜や瑠璃——一条家の末っ子だ——に揶揄られる一条を見て笑ったりして、楽しい食卓となった。」

「食後のデザートを食べていたとき、急にリビングの大型モニターが点く。誰も操作していないのに、画面に砂嵐が映る。」

「誤作動？」

「誰かが呟いたとき、画面が切り替わった。すると、仮面を付けた黒フードパーカーの人間が映し出される。その仮面は、前世紀カルチャーにありがちなアニメキャラのものだ。奇妙なその見た目は、十師族が住む家にハッキングを仕掛けるという行動とマッチしておらず、なんとも言えない不気味さを感じさせる。」

『ハロー。ジュツシゾク・イチジヨウフアミリーのみんな……で良いのかな?』

? 流れてくる音声は少年の声だ。だが、加工されている可能性もあるので分からない。

「誰だ? まず、ウチのホームオートメーションシステムをハックできるなんて……」

? 映像は録画データらしく、剛毅の問いに答えることはなかった。

『僕は「七賢人」と名乗っていてね。USNA政府や軍などに情報を提供している、いわゆる情報屋みたいなものかな。イチジヨウの人間なら分かると思うけど、「あの情報」を流して日本への調査を仕向けたのも僕だ』

? あの情報。多分、おれの出自に関することだ。

『ただ、ゲームステージはイチジヨウの管理する地域。USNAのエージェントを自由にウロウロさせちゃうのは、ちよつとアンフェアだよな? だから、少しばかりプレゼントだ。——奴らの目的は「ターゲットの拉致、最悪の場合は暗殺」さ』

? 謎の人物は高らかに笑い出す。そして、画面は黒く暗転。

『手助けするもよし、見捨てるもよし。エンディングは君次第! では、良いゲームを!』

? 最後は音声のみで、このようなセリフで終わった。

「——ふざけた奴だ!」

? 映像が流れ終わって、一条がそう吐き捨てる。

「一体、何だつてんだ……ゲーム? 馬鹿にするのも大概にしろ!」

「落ち着きなさい、将輝。——夜久君、君はUSNAに狙われているのだな?」

「少なくとも、そういう話は聞いています」

? 女性陣が驚くのを余所に、おれは知っていることを答えた。

「ふむ……」

? 葉山さんは理澄に対処を頼んだと言っていた。つまり、USNA相手に政治的な駆け引きを行う筈だ。そして、スターズに手を引かせ

？だから、一条に情報が渡る前にけりをつけるつもりだった筈だ。しかし、現状ではUSNAのアレコレが伝わってしまった。謎の人物によって。

「……一条の管理地域で同盟国とはいえ、他国のエージェントに好き勝手やらせるのは好ましくない。しかし、あちらも簡単に尻尾を掴ませはしないだろう」

？剛毅は将輝の報告から、ここ最近のUSNAからの入国者データを集めていた。けれども、今「七賢人」を名乗る謎の人物からの情報を聞くまで、四葉とUSNAの小競り合いに気付けなかったのだ。

「証拠が無ければ、我々も動くに動けない。だが、今の君は将輝の友人だ。だから、出来る限りのことはしよう」

「今回の件で今後開かれる師族会議で、ターゲットの名前を上げない、と約束して頂ければそれで十分です」

「ふむ……確かに、七草殿辺りがうるさいだろうしな。ターゲットは研究所ということにでもしておこう」

「ありがとうございます。確約はできませんが、今後『便宜』を図るようには伝えておきます」

？この会話内容で薄々バレそうな気はするが、剛毅は決定的な「四葉」というワードを出さなかった。これが彼の誠意なのだろう。それが分かったから、おれは素直に礼を言った。後で理澄をどやして、お母様に報告させよう。



？魔法大生との交流を終えた理澄は、幼馴染の文弥を呼び出して情報共有をしていた。

「——今回の一件は、USNA側が『シリウス』を暗殺する為に企てられたものだって？」

「結局のところ、これは政争なんだよ。スターズ総隊長という地位に、

戦略級魔法持ちの『シリウス』をあてがったことに抵抗する勢力……  
当たり前だけど、それは存在する」

？四葉の係累「ごとき」の調査に、シリウスを動員する意味などない。単に、異国で孤立させるためだけだ。

「正確にはアンジー・シリウスを推した、ヴァージニア・バランス大佐の派閥を蹴落とす為だよ。シリウスが死ねば、軍内部のパワーバランスは大きく変化する」

「けど、戦略級魔法師だよ？ 戦力として手元に置いておきたい、って普通なら……」

「叔父様たちは、達也をどうしようと思ってる？」

？その指摘に、文弥は俯いてしまう。分かりやすい例が、あまりにも身近にあった。

「五輪滯のような虚弱体質ならばともかく、健康体な戦略級魔法師は危険過ぎる。それに、シリウスは総隊長になれるくらいだ。間違いなく、現代魔法においてもエキスパート……平時でも便利使いできるけど、その意味は戦略級魔法をその辺に放置しているのと同じだ」

？魔法師だって、人間だ。自由を持つ権利はある。理澄もそれは分かっているが、戦略級魔法師に対して恐怖を抱く人々への理解はあった。なぜかといえば、その感情は彼を可愛がる分家当主達が抱く思いと同じなのだから。

「シリウスを恐れているからこそ、夜久さんを使って暗殺を成し遂げようとしてるってことか」

「アイツの戦闘力を調べる意図もあるだろうけどね。四葉が殺してくれるなら御の字、無理ならば自分たちで……ってところだろう」

？どちらにせよ、任務失敗でのMIAとして処理されるということだ。

「まあ、他にも色々理由はあるんだろうけど……それらが複合した結果かな」

？理澄の脳裏には、エドワード・クラークの姿が浮かんでいた。反シリウス派——要は反魔法系の一派だ——を嫉しかけることで、スターズと四葉との相打ちでの消耗を狙う作戦とも考えられる。また、



アークティック・ヒドウン・ウォーもエドワードとロシアの戦略級魔法師——イーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフが組んで行ったことだろう、と彼は推測していた。

「それで、ウチはそのバランス？って人をバックアップするんだっけ」「そう。四葉は全面的にバランスを助ける。当分の間、シリウスを保護することも含めてね。ちよつと前に、亜夜子ちゃんがUSNAに行つたのはそれが理由」

？文弥の双子の姉である亜夜子は、少し前にUSNAへと渡つていた。それは、バランスとの交渉を進める為だったのだ。本当は理澄が行くつもりでいたのだが、「学校を休み過ぎると不自然」という理由で変更された。

「そうだったんだね。姉さん、笑うだけで全然教えてくれなかった」「アメリカが反魔法主義に染まっても困るからね。僭越ながら、我々がお手伝いしてやろう……って訳。亜夜子ちゃんと入れ違いに、勝成さんが渡米して反魔法団体を潰しまくる。それまでの間、僕達はシリウス暗殺計画が遂行されないように妨害するんだ」

？要は、黒羽・武倉・新発田の有力分家が勝手にする仕事ということだ。四葉本家が命令したのではない。そもそも、真夜が夜久の為に動くなんてあり得ないのだ。このタイミングに合わせて分家側が提案したプロジェクトを、損得勘定で一応許可した程度のことである。USNA中枢とのパイプは、あつて困ることはまず無い。

？納得したように、文弥は何度も頷く。そして、あることに気付いた彼は理澄に問うた。

「夜久さんには、この作戦について言ってるの？」

「言つてない。教えたら教えたで、めちやくちやな理屈で邪魔してきそうだし……」

？夜久の思考は、「真夜の気を引けるか」だけである。だからこそ、合理的なものの考え方は彼の脳内に介在しない。

？言葉に出すことなく、理澄と文弥は思いを一つにする。それは、困つたものだ……という心からの嘆きであった。

？

願いごとの叶う日はいつ？

？USNA——つまり、スターズとの激突。

？それを語るには、夜中に理澄とコンビニへ夜食を買いに行こうとした時から始めねばならない。

「女装するんじゃないかったのか」

？理澄は数日前から、おれの家に上がり込んでいた。警護と監視を兼ねてなのは明らかだ。だからこそ、コンビニに行くだけでも彼は付いてくるのである。だが、今のおれ達の服装はジャージ。理澄はその上に、ボア素材のブルズンを羽織っている。どこからどう見ても、男2人にしか見えないだろう。

「一条家も結局噛んでる訳だし……警戒にそこまで力を入れなくて良くなった。逆に、ウチや黒羽の人員の存在に気づかれる方が厄介だ」  
？以前に、「七賢人とかいう奴が一条に四葉のトラブルをバラした」ということを理澄に話した。それによって、作戦の方向性が変わったらしい。詳しいことは聞いていないので、どう変化したのかは知らないが。

「確かに、一条家配下の魔法師はウロウロしてるもんな。名目としては、横浜事変を理由にした警戒辺りだろうが」

「でも、一条方面から僕も知ったというテイで『友達が心配だから』という誤魔化しが効くし。これはこれで、ラッキーだったかもね」

？CADをポケットに突っ込み、玄関から外へと出る。ここから先は、突っ込んだ話は出来ない。扉を開ける前に振り向き、言ってしまうことを言う。

「あんまり心配してないくせにな」

「心配してるよ。お前がいなくなったら、達也と深雪に掛けた魔法は解けてしまうんだから」

？その言葉で何となく予想がついた。おれに警護を付けるようにしたのは、お母様ではなくて分家連中であると。葉山さんは、やっぱりおれに気を遣っていた。

「……まあ、いいや。おれもUSNAに連れ去られたら困るし」

? あちらの都合とはいえ、こちらも得をしているのだ。おれ単身で  
スターズと事を構えれば、中々苦しい状況に追い込まれた筈である。  
「あつ、サブ端末忘れてきた。マネーカード持つてるか?」

? コンビニの前まできて、おれは忘れ物に気付く。電子マネー派な  
ので、マネーカードを持ち歩かないのだ。

「あるよ。僕はカード派だから」

? 現代のコンビニは無人であり、金銭のやり取りは自動精算機で行  
う。そして、入り口でマネーカードを差し込むか、電子マネーシステ  
ムと同期させるかで、店内に入ることができる仕組みだ。万引き防止  
の為に導入されており、そのまま商品を持ち去ると警察に通報され  
る。

? 電子マネーアプリは端末情報が抜かれる可能性があるので、用心  
深い人間は支払い用のサブ機を持ち歩いている。

「差しといてくれよ」

「僕に払わせる気でしょ……」

? 彼は仕方なさそうな顔で、財布からマネーカードを取り出す。そ  
して、差込口にカードを入れた。ゲートが開き、店内へと足を踏み入  
れる——その時だった。

「……………」

? 店の奥から人間が飛び出してきた。帽子とマスクをした大柄の  
男だ。浅黒い肌をしている。

? 待ち伏せされていたのか。けれど、こんな場所で仕掛けてくると  
は。思ったよりも金沢の警備態勢が厳しく、とうとう痺れを切らした  
のかもしれない。

? けれど、おれ達がこのコンビニへ行くことを何故知っている?

答えはその場ですてこなかった。

「——Activate! ”Dancing Blades!!!」

? 男がそう叫んだ瞬間、ナイフのようなものが何本も彼の懐から飛  
び出した。

(あれはダガー!?)

? しかし、ダガーはおれ達に刺さることなく反転した。理澄の魔法

によるものだ。持ち前の干渉力でダガーに掛けられた相手の魔法を塗り潰し、改めて加速魔法を掛け直したのだろう。

？普通ならば、障壁魔法で感知した物理エネルギーを相殺する形で加速系を使う、という二段階での対処を求められる。おれだって、1人ならそうした。

「逃げるぞー！」

？もちろん、おれも何もしていなかった訳ではない。ダガーが飛んできた時点で、手近にあった商品を店の外に放り投じている。万引きシステムの性質上、監視カメラの映像が警察へと転送されている筈だ。

？公共の機器による情報収集に係るプライバシー侵害の防止等に関する法律——通称「一九八四法」によって、街路カメラ利用の申請はかなり厳しい。あとで「怪しい男に襲撃された」と訴えても、その証言だけでは街路カメラのデータ検索に許可は出ない。けれども、別件で映像証拠があるならば話は別だ。

？警察関係者は皆、一九八四法に苦渋を舐めさせられている。街路カメラを調べられるならば、おれのしたことも嚴重注意で済みます。何なら、こっそりと礼も言ってくるだろう。

「おい、そっちに行つていいのかよ？」

？理澄が人気のない公園の方へと走っていくので、並走しながら尋ねる。

「人の多いところだと、ややこしいことになるだろ！ どうせ、他にも集まってくるんだから！」

？一条傘下の魔法師などが参戦してくることを考えてらしい。人が多くなると、誤射の可能性も上がる。魔法が一般人に当たりました、なんて洒落にもならない。

「!？」

？公園に辿り着いた途端、違和感を抱く。このまま立っていると危険だという感覚に従って、おれ達は「跳躍」で上空に飛び上がる。勘は外れなかった。

(これは『ムスペルス Heim』……)

?それなりに得意魔法だからこそ、分かる。おれが使うものよりも威力が高い。スピードも規模も、桁違いだ。

?間髪入れず、仮面の女が襲いかかってきた。今使われた魔法の術者だろう。おれは「マンドレイク」を使って、女の動きを鈍らせる。確かに、その魔法で間合いを取る時間は取れた。だが、相手は自分の周囲に「サイレントウェーブ」を掛けて、再び攻撃を仕掛けてくる。コイツ、相当の手練れだ。

「クソッ！」

?理澄は先程の男と交戦している。この女は、おれがケリをつけなといけない。けれど、正面から戦う必要は無かった。というより、ダメージを与えるタイプの精神干渉魔法は対策されている。だから、使っても意味は無い。

?ある精神干渉魔法を発動し、遊具の陰に隠れる。この魔法は、視覚情報を固定する。一定の時間、相手の記憶を更新させない。「そこにいた」という情報を定着させ、空間認識を阻害する。魔法名は、端的に「記憶固定」。第四研発の精神干渉魔法としてはポピュラーだ。

「理澄は置いて帰るか……」

?おれと違って、あちらは戦闘向きの魔法師。多分、やられて死ぬことはないだろう。

?悠々とした足取りで、公園を出て行く。仮面の女は、それに気づくことはない。認識が歪められているので、周囲の状況と結びつけないのだ。

「もう寝よう」

?時計を見ると、一時を回っていた。夜食を食べ損なったが、仕方ないことである。家に戻って、さっさと布団に入った。



?夜久に置いていかれた理澄はといえば、戦闘をとづくに終了して

いた。

今晚の戦闘は、狂言であったのだ。日時を決めてこそいかなかったが、公園に誘導したのは意図的なもの。ここには、理澄の部下が構築した人避けの結界が張られていたのだ。

「お疲れさまです。中々、やりますね」

「そちらこそ。やはり、ヨツバのエージェントなだけはありません」

? 襲撃してきた男——ラルフ・ハーディ・ミルファクと彼は気安く話していた。この二人は、元々グルだったのである。先回りして待ち伏せしていたのも、単に行く場所を理澄が事前に伝えたからに過ぎない。しかも、コンビニの監視カメラは事前に「システム障害」という名目でオフラインになっていた。

? ラルフはUSNAで総隊長代行をしているベンジヤミン・カノープスの命を受けて、リーナの亡命を助ける任務を帯びていたのだ。要は、バランス派閥の人間ということである。

「——ラルフ、一体どういうことですか?」

? その様子を見て、リーナが鋭い視線で睨みつける。どう見ても、内通のシーンだ。そう思うのも無理はない。

? しかし、ラルフは落ち着き払った態度だ。そして、リーナにある単語を告げる。それは、彼女が出立前にカノープスから聞いた「合言葉」であった。「誰を信用していいか判断がつかない時、その言葉が標になる筈です」と言われていたのだ。

? それを聞いたならば、彼女はラルフを信用せねばならない。

「……信じましょう。ワタシはベンを信頼していますから。だから、貴方の行動に意味があると考えます」

「ありがとうございます。……総隊長殿、落ち着いて聞いてくださいね。今、スターズ内部では不和が起こっています。そして、総隊長殿の身に危険が及んでいるのです」

? カノープス少佐殿からのメッセージです、とラルフは小さな手紙を取り出した。リーナはそれを受けとり、文章に目を通す。

「暗殺……? しばらく、日本に身を寄せろ? ヨツバと取引は済んでいる……」

？衝撃の事実が並んでいたが、何とか彼女は全てを飲みこんだよう  
だ。

「敵を騙すには、まず味方から……その為に私もマーキュリーも、総隊  
長殿には真実を告げておりませんでした。お許し下さい」

？リーナの暗殺が突発的に起こらないよう、彼女の周囲の人間だけ  
は、何とかマトモな人間が捻じ込まれていた。日本で一緒に暮らして  
いたシルヴィアもそうだ。

「いえ、謝る必要は無いわ。ラルフ、私の手助けをしてくれていて、本  
当にありがとう。ベンにも、お礼を言っておいて頂戴ね」

「かしこまりました」

？話が纏まったところで、再び理澄がラルフに話しかける。

「さつきまで、他の場所で反シリウス側の人員と一条家の人間が交戦  
していたようです。数人ほど拘束されたようなので、日本での作戦継  
続は不可能……という訳で、我々の仕事も終わりということですよ」

「そうですね。——総隊長殿をよろしく願います」  
「もちろんです」

？ラルフと理澄は固く握手をする。数ヶ月間とはいえ、一緒に仕事  
をしたパートナーだ。そうして、彼はリーナに「お元気で！」と言  
い残して、この場所を去っていった。

「——さて。また明日、と言いたいところだけど。夜も遅いし、家まで  
送って行くよ……リーナ」

「ええ！ ワタシの正体、知ってるの!？」

「当たり前でしょ」

？理澄は呆れた顔をして、「元の姿に戻ったら？」と言う。ようや  
く、リーナは「仮装行列」を解除した。

「……学校では知らない振りしようと思ったのに」

「それは残念」

？そこからは、特に会話も無しで歩いていく。彼女がシルヴィアと  
合流したのを確認して、理澄は踵を返す。そこに、一台の自走車が停  
まった。

「——理澄様。お乗り下さい」

? 運転席の窓から、彼のガーディアンである青年——名瀬北斗という名である——が顔を出した。

「あつ、北斗。お疲れ」

? ドアを開けて乗り込むと、すぐに車は走り出す。運転しながらも北斗は、別働隊だった黒羽についての報告を彼にする。

「黒羽様による、スターズや一条家の誘導は上手くいったようです。文弥様は『ダイレクト・ペイン』で助太刀されていましたし」

「それは良かった。一条が絡み出した時はどうなることかと思っただけど、何とか収まる場所に収まったね」

? 四葉の係累の存在という情報が漏れ、拉致寸前までいったところで、それを逆手に取った作戦を立てて成功。これを大戦果と言わずして、何と言うのか。

「ただ、そろそろ夜久様にもお伝えした方がよろしいのでは?」

「そうなんだよねえ……」

? 分かつてはいる。しかし、夜久は「狂言だったから、お母様が心配してくれなかつたんだ!」などの理屈を捏ねて怒りそうである。

「御当主様も、一体アイツの何が気に入らないのかな……」

? 理澄個人としては、真夜も夜久を受け入れる必要があるのではないかと思わなくもない。けれども、意見するなんて怖くて無理だ。彼にとって「四葉真夜」は恐怖そのもの。何度顔を合わせても、緊張してしまう。

「お気の毒ですよ、夜久様は……。生まれてくる場所は選べませんからね」

「それはそうだけどき」

? 真夜の息子として生まれ、一度も母親に愛されたことの無い少年。けれど、いつかは……。そう願いつつ過ごしている。その姿は、あまりにも哀れだ。そのことを考えると、とやかく言えなくなってしまう。

? 津久葉家が問題ばかり起こす彼に手を焼いたのも、結局は真夜の問題に行き着くからだ。彼女に変わる気が無いのなら、子供を注意したってどうしようもない。性格を落ち着けるには洗脳くらいしか無



いが、それは同時に魔法力を下げてしまう。だからこそ、最終的に放置するしかなかったのだ。

？ここ最近の夜久は落ち着いているが——今後、どうなることや。理澄はそう思い、頭を抱えた。

## 人生に中指を立てた

? 日本に残ったリーナは、しばらくはそのまま生活を続けることになった。最終的には、四葉家管理の島に住む予定だが、留学期間を狭めるのは難しかった——圧力を掛けることは簡単だが、四葉家によってなされたと分かると意味がない——ので、3学期いっぱいまでは三高に籍があるのだ。

? 同居人だったシルヴィアは、本国へと引き揚げていった。作戦そのものが「なかったこと」になり、日本に居てはならなくなったからだ。彼女は本当のことについて黙っていたことを何度も謝り、「元気でいてくださいね」と言い残した。

? 話し相手がいなくなった途端、部屋は妙に広くなる。寂しさを紛らわしたくて、テレビを点けてみた。朝のニュース番組では、アナウンサーが先日の出来事から始まるニュースを読み上げている。

『USNA籍の不審船を日本海側で発見』

『スターズ総隊長の交代劇。前シリウスは実験部隊への配属か』

『同盟国』 USNAが日本で行った極秘作戦』

? ここ最近、日本を騒がすのはUSNA絡みのことばかり。自分もそのUSNAの人間だった筈なのに、画面の向こうで語られているのは、少しも実感が湧かないことだった。

(……まず、本当に狙われていたのかしら?)

? 話し相手がいないと、悩みが堂々巡りする。

? 本当は、「シリウス」を排除する為、周囲が自分を騙していただけなのではないか。あの時、自分は丸め込まれただけなのではないか——つまり、USNA軍から放逐されたのではないのかという疑念だ。

? 部下の前では毅然とした対応を取っていた彼女も、今は単なる高校生少女だ。不安ばかりが大きく膨らんでいく。

(ベンやシルヴィとも連絡は取れないし……)

? カノープスの指示によって、四葉家に身を寄せたりナ。だが、名目上は自分の意思で亡命したことになる。だから、誰とも通信することができない。真実が明かされることを恐れ、あちら側が番

号などを全て変えてしまっているのだ。繋がらない端末は、更に不信感を煽る。

(軍に入ったあと、電話どころか手紙すらくれなかった。けど、悲しくなかったわ)

? 膝を抱えたまま、昔のこと……自分が軍人になるまでのことを思い出していた。

? 10歳足らずの時、リーナは軍人養成課程のスクールへ徴兵された。魔法の才能があるという理由だけで、親と別れての生活を強制されること。側から見れば、不幸な出来事だったのかもしれない。

? けれども、彼女にとっては救いでもあった。何故なら、生まれ育った家庭は良いものではなかったから——彼女の同世代を上回る魔法の才能と類稀なる美貌。どちらも素晴らしい神からの贈り物であったが、それ故に両親は自分達の子を「本当の子と思えない」と感じてしまったのだ。

? 親達が精一杯、娘を愛そうとしたのは確か。でも、子供は親の心の機微を敏感に感じとる。「愛されていない」という自覚が、いつも彼女の心にはあった。

? だから、USNA軍は初めて「自分を受け入れてくれた」場所だ。入隊する頃にはもう、ステイツへの愛国心は家族を守るも同然の意味となっていた。

「だけど……また、『要らなく』なったの?」

? 決定的な言葉が口から溢れでた途端、リーナの目から涙が溢れ出る。拭おうとするが、止まるものでもない。

? 再び、「家族」に捨てられた——もちろん、これは真実でないのだ。しかし、彼女の中では唯一の筋の通った論理だった。もう必要とされてないのか、と考えれば考えるほど、絶望感が増してゆく。

? 誰もがリーナに対して、言葉足らずだったのだ。

? カノープスは、文面ゆえに真意を伝え切れなかった。シルヴィアやラルフなどの部下達は、脱出準備に追われていて、あまり気に掛ける余裕もなかった。また、リーナは年下の子供ではあるが、それでも彼らの「上司」であったのだ。彼女自身の弱さを想像するのは、どこ

か難しいところがある。

？その上、これからの庇護者である筈の四葉家はもつと酷かった。彼らにとって、リーナはUSNA交渉における道具でしかない。「回収」した後は、大した説明もしなかった。

「――学校、行かないと……」

？ふと時計を見れば、家を出る時間になっている。ちゃんと通わなければ、不審に思われてしまう……そう自分を叱咤し、ノロノロとした動作で制服に着替える。先行きも分からないまま、学生の振りをするのは辛くてたまらなかつた。夜久や理澄と顔を合わせて、今まで通りの態度でいられるだろうか。進もうとしない足を無理やり動かし、彼女は家を出た。



？悲しかつた。全てが狂言だったなんて。

？心のどこかで、おれは「お母様が心配してくれるのではないか」と思っていた。分家が主導したことであっても、おれの警護への許可を出したのはお母様。それが「息子だから」でなかつたとしても、魔法が惜しかつたとしても良かった。四葉にいて欲しい、と思っっているならば――けれども、何もかも違つた。USNAとのパイプを繋ぐ方が大事だっただけだ。おれの存在は、さして重要でない。

？希望は、何度も打ち砕かれている。もう慣れたものだ。

？ため息をついて、理澄からのメールを閉じた。別に、彼には怒ることもない。最初からスタンスが違うのは知っている。利害の一致、刹那的な友情。それはそれで、心地良く思う。

？一人で抱え込むよりは、ずっとマシであるから。三高生としての生活で、おれはそんな事実を知つた。心の痛みを忘れさせる、モルヒネのような絆。根本的な解決にならない現実逃避だ。

？学校に行こうとして、マンションのアプローチから地上を見た。

特にさしたる理由はない。何となく、覗いてみただけ。

「……あれは、リーナか」

？迷いがあつたのは、彼女の様子があまりにおかしかったから。フラフラと弱々しく歩いている。髪も結えておらず、手櫛で梳かしただけのようだ。

「——おい、どうしたんだよ！」

？階段を駆け下り、声をかけてみる。彼女は振り返り、おれに縋り付いた。どうしていいか分からず、なすがままになる。

「……お願い！　ワタシをUSNAに帰して！」

「遅れてきたホームシックか？」

？軽い冗談で返したが、そんなどころではなさそうだった。

？しかし、どうして帰りたいのか。彼女は自らの意志で亡命をしたのではなかったか。なんだか気になり、おれは事情を訊くことにした。

「——それで、帰るってどういうことだ？」

？おれ達は、部屋の玄関に並んで座る。とりあえず、学校は休むことにした。1日くらい休んでも大丈夫だ。

？周りの目が無くなった途端、リーナはズビズビと泣く。けれど、おれの問いには答えてくれた。

？

「違うの、本当は帰ったってどうしようもないの。だって……もう居場所なんか無いのよ」

？ティツシユで鼻をかみつつ、彼女は訥々と己の境遇を語る——要約すれば、「自分はUSNAに切り捨てられたかもしれない」ということだった。

？確かに、USNAは四葉とのパイプを作る為、リーナから「シリウス」の看板を剥ぎ取ったのだ。四葉の思惑はともかくとして、支援者は彼女に良かれと思ひ、工作を行ったのだろう。しかし、彼女自身はそんなことを望んではいなかった。軍に人生を支配されてでも、国の為に最期まで戦い続ける。それで構わなかったのだから。

(そんな……)

?リーナを可哀想だとも思う。でも、同情よりも今は衝撃の方が大きかった——信ずるものの為に尽くしても、救われるとは限らない。  
?ガツンと横から殴られた気分である。どうしようもなく、頭がクラクラして吐きそうだ。思わず笑ってしまった。

「……何笑ってるのよ」

?目を擦ることで涙を拭っていたリーナは、こちらに顔を向けた。鼻の頭が少し赤い。

「いや?」

?おれは騙し騙しの逃げで、どうにかしようとしていた。しかし、その道すらも答えが見えてしまったのだ——もう分かっている。

(おれに、お母様は救えない)

?これまで、ずっと尽くし続けた。けれど、もう最初から限界だったのだ。

?叔母様は、新しい思い出を作つてやれと言った。自分には不可能だから、と。でも、どだい無理な話で……「あの日」から、お母様の時間は止まったまま。未来など、ありえない空想に過ぎないのだ。

?お母様の幸福は、過去にしか存在しないのだから。

「お前と、おれの人生はよく似ているよ——特に、報われないところが」

「……失礼ね」

「間違いでもないだろ」

?互いに闇を抱え、どん底で傷を舐め合う。今のおれたちにはお似合いだ。

「ねえ。今ここで、『ヘビィ・メタル・バースト』を発動したら、どうなるかしら……」

?彼女は、不意にそう呟いた。そして、慌てたように「冗談よ?」

撃てるスペックのCADも無いし……」と誤魔化す。

「やってみろよ」

「え?」

「戦略級魔法はともかく、何か適当に撃つてみるよ。『自分はこの間にいるんだ!』って。帰る場所も無いなら、何したっていいじゃないか」

? 現状の不満に対するカウンター。

? 不幸自慢をすれば、許されるといってもいい。けれども、そうするしか無かった。鬱屈した感情をどうにかしたい。

「でも……」

「——じゃあ、お前は良いのかよ！ 生きてる意味も分からず、死体みたいな人生を過ごしても！」

? 堰を切ったように、言葉が溢れ出る。

「おれは嫌だ！ こんなクソみたいな人生なんて！」

? 自分が生まれたことが、そもそも間違いだっただの。四葉であるとか、お母様と向き合うとか——それは本当の問題では無かった。

「そんなこと、ワタシだって知ってる！ 人生がどうしようもなく最悪だっただけ！」

? リーナはCADに手を伸ばした。瞬時に、魔法式が展開される。プラズマの閃光が舞い、玄関が吹き飛んだ。外の景色がよく見える。

「……」

? リーナは自分のしてしまったことに驚き、ぽかんとした顔をしている。

? 開いた壁の穴から、おれは地上へと飛び降りた。まだ上にいる彼女へ向けて、おれは言う。

「模擬戦でもしよう。2人揃って、退学とかなろうぜ！」

? 精神干渉魔法「エンセオジェン」を発動する——脳神経を介して幻覚を見せる魔法。そして、副次的にアドレナリンを大量放出させる効果もある。どうしようもない現状を忘れ、享樂的に生きるしかなかった。

「望むところよ！」

? 彼女はようやく微笑んだ。

? どちらも得意系統が放出系だから、プラズマがバチバチと散る。周りへの被害も気にせず、魔法を撃ちまくった。途中で警察などが止めに来たが、認識障害で逃げ出して何度も暴れ続ける。

? とにかく楽しかった。おれ達は笑い転げながら、CADを操作する。1人じゃないだけで、心強かった。

「——いい加減にしろ！」

？そんな時。空気弾がおれ達へと大量に降り注いだ。見れば、一条と理澄が立っていた。騒ぎを聞きつけ、学校から飛んで来たのだろう。

「何が不満なのか知らんが。ウチの管理地域で好き勝手暴れるな。流石に、正式な書面で抗議させてもらう」

「好きにしろよ。本家に送ったって、無視されるだろうしな」

？険しい顔の一条へ向けて、そう吐き捨てる。

「リーナも一体どうしたんだ。学校を休んだと思えば……」

？理澄がそう尋ねたが、リーナは不敵な笑みを返す。

「貴方の——ヨツバの言いなりになんてならないわ。だってもう……どうだって良いもの」

「四葉!? シールズさん、それは一体……」

？一条がそう言った途端、理澄が魔法を発動して気絶させた。黙らせようとしたのだろう。

？けれど、そのせいで彼はおれの魔法に対処出来なかった。使ったのは、精神干渉魔法「ルナ・ストライク」。あちらは想子ウォールで術式の効果を和らげる。でも、おれが最大出力で放った魔法。ダメージは免れない筈だ。

「ぐっ……」

？案の定、理澄は呻き声を上げた。追い打ちに、おれは精神干渉魔法「ランドエスケープ」を発動した。この魔法は、相手の深層心理を表出させる。少しは精神ダメージを受けているので、効果があるだろうと思つてのことだ。

「……!?!」

？驚いたことに、彼の心象風景は恐怖に塗りつぶされていた。逃げ出したい、耐えられない、怖くて仕方ない——意外なほどの負の感情を感知して、おれは拍子抜けする。

？鳥の鳴き声のような高い声が出た。それは、理澄の口から出ているもの。彼は気が狂ったように、地面を爪で掻き毟っていた。指先は血塗れだ。



「あの……彼、どうしちゃったの？」

？リーナが引き攣った顔でそう尋ねてきた。聞かれても、おれだつて分からない。

？戸惑いつつ、しばらく理澄の様子を見ていた。彼の体が何度か想子光に包まれるが、魔法式は途中で崩壊する。最初は意味が分からなかったが、途中で合点した。「ワルキューレ」を自分に使つて、失敗しているのだ。

？魔法師には、高い自己防衛本能がある。自らを傷つけるような魔法は、無意識下でキャンセルしてしまう。

「……死にたがってるのか」

？何故かは知らないが、彼の深層心理は「恐怖と自傷」で占められていた。「四」というコミユニティに生きる故の不幸。可愛げのない理澄にすら、それは存在したのだ。そう思うと、可哀想になつてきた。

？おれは彼を抱え上げ、リーナの方を見た。

「そろそろ逃げるか。認識障害を使えば、検問も抜けられるだろう」

？都内辺りまで行つてしまえば、逃げる事が出来るだろう。後のことは、これから考えれば良い。

「……彼も連れて行くの？」

「嫌か？ 別に置いて行つても構わないが。重たいし」

「こんなになつちやつたから、ちよつと気の毒だし……良しとしましようか」

？そうと決まれば、とおれ達は歩き出す。鬱憤ばらしをしたからか、足取りも心なしか軽い。歌い出したい気分だった。

## 世界にサヨナラを

? 精神干渉魔法「記憶固定」で、目撃者の記憶を改竄して、北陸地区から早々に逃げ出す。警察や一条家の追手ならなんとかなるが、四葉まで話が回ると厄介だからだ。

? キャビネットに乗る際は、リーナの「仮装行列」が役に立った。顔や身体を変えられるからだ。ただ、日本人の見かけでは無い。価値観が違うから当たり前である。しかも、彼女は架空の人間を作るのは苦手らしく、どれも既存の人間を基にしているという。それを聞いて、元の人間の知り合いがいたらどうしようと少し不安になった。

「気にすることは無いわ。売れてない地下アーティストの顔よ? 知ってる人なんて稀なんだから」

? リーナ——今の姿は、浅黒い肌に黒髪だ——が呑気そうな口ぶりと言う。

「詳しいんだな。売れてないのに」

? そして、おれは金髪で緑の目をした優男風の姿になっていた。

? ついでに、キャビネットの床に転がっている理澄は、ヒッピーみたいな見た目にさせられている。「この姿にしておけば、死にそうな酔っ払いに見えなくもないから」という理由らしい。

「顔のモデルにするには、ちょうど良いのよ。たまに動画を見るわ。けど、パフォーマンスは本当に最悪。下手過ぎて、工場に住んでるみたいな気持ちになるわ」

「へえ……」

「ところで、この人……本当におかしくなっちゃってそうだけど。大丈夫なの?」

? 彼女は理澄を指差し、心配そうな顔をした。

? 彼は「ワルキューレ」を自分に掛けて死ぬことが叶わないと気づいたのか、次は自分の爪で首を掻き切ろうと何度も引っ掻き続けている。

「大丈夫……な筈だ。まさか、ここまで効くとは思わなくてだな」

? 精神干渉魔法というものは、どれも危険なものと一緒に纏めにされが

ちである。けれども、この類の魔法はいくつかの分類に分けられる。

？一つは、情動干渉の魔法。使い手こそ選ぶものの、割とポピュラーな魔法だ。簡単な洗脳なら出来てしまうという点では危険だが、精神へのダメージは少ない。

？例外は「ルナ・ストライク」くらいだろう。精神に直接ダメージこそ与えるが、これは情動干渉系だ。本質としては、幻影によるショックで意識の抑圧を緩めて精神を暴走させるもの。その暴走によって、結果的に精神へダメージを与えるのだ。

？二つ目は、精神に直接干渉する魔法。殆どは固有魔法であり、定式化されているものは少ない。

？先程使った「ランドエスケープ」は、第四研で開発された魔法であり、現在の使い手はおれしかいないはずだ。深層心理を表出させる、という言い方をしているが、エイドスの一時的な改変で「無意識領域を意識領域に情報を書き換える」という解釈が正しい。その為に蓋をしていた感情が、一気に襲い掛かってくるのである。

「……あつ、収容されたな」

？キャビネットの長距離用トレーラーへの収容動作が終了した、というアナウンスが流れた。

「ラウンジに行く」とジュースが飲めるぞ。行ってきたらどうだ？」

？長い間乗ることになるので、トレーラー内はそれなりの設備が整っている。ラウンジもその一つだ。

「そうするわ。……ヨルヒサはどうするの？」

「コイツが起きても困るからな。ここに残しておく」

？リーナは軽く頷き、キャビネットから出て行った。しばらく、端末をみて時間を潰す。

？ふと視線を落とすと、急に理澄と目が合う。ようやく、正気に戻ったらしい。血走った眼が、こちらを睨み付けている。

「……何だよ。そんなに自分の思い通りにならなかったことが不満か？」

？おれがリーナを唆して叛逆させたと思っているのか……そう思ってた。尋ねた。

「……お前に僕の気持ちが分かる筈ないっ！」

? 理澄の叫びに、おれは冷静に言葉を返す。

「分かる訳ないだろ。四葉の為に生きてるような、お前の気持ちなんか」

「そうでもしないと、僕はこの世界で生き残れなかった！ 四葉の人間として生きるしか、手段は無かったんだ！ 正気に戻ったら、耐えられる訳がない！」

? 生まれたくなんかなかったのに、と泣き出す理澄。

「——それで？ だから、何だっというんだ？」

? 彼には、彼なりの「弱さ」があった。それに対しては、共感できなくもない。生まれてしまった不幸を嘆くこともそうだ。

? けれど、彼は「四葉内での自分の立場」を失うことを恐れている——生きることが怖いんじゃない。自分の持っているもの全てを失って、生きていく自信が無いだけだ。

? その抛り所を無くしたとき、彼はどうするのか。

? 興味をもって、おれは魔法を行使した——精神構造干渉魔法「マジ・インテルフェクトル」。魔法師を非魔法師に変える、最低最悪の魔法。

「……別に、お前の作った環境は悪くなかったよ。それなりに楽しかったしな。このまま分家側に付けば、割とマトモな生活も出来たんじゃないか。けどな——」

? そこで、言葉を一度切る。でも、それじゃあダメなのだ。

「——結局、この世界そのものが問題なんだよ。理不尽そのものが形作った、この世界が。見ないふりをしていても、現実には常に教えてくれる」

? 四葉家内では、「魔法の価値」でしか存在意義を得られない。けれど、お母様はその魔法ゆえに、おれを酷く厭っている。二律背反の「生きづらさ」への答えは、誰も教えてくれない。

? 世界は、あまりにもおれに厳しすぎる。

「……そうだね。けど、世界の終わりなんて僕は見たくなかった。こんな酷い世界でも、終わらせたくなかった。でも……失敗しちゃった

ね」

？CADを投げ捨て、理澄は立ち上がった。完全に諦めたからか、表情は思いの外晴れやかだ。

「じゃあね、マザコン野郎。僕は全てを失ってなお、這って生きるような勇氣はないんだ」

「どうする気だ？」

？彼は薄く微笑むと、端末で誰かに電話を掛けた。話し振りから、どうやら通話相手は彼の部下らしい。

「——うん、いま送った住所へ適当に攻撃してくれたら良いから。……今まで、ありがとう」

？通話を終えると、理澄は座席に黙って座った。会話も特になく、ただただ静寂がキャビネット内を包んでいる。

「——！」

？急に、理澄の輪郭が揺らいだ。

？あつ、と言う間もなく、彼が生きていたという痕跡は無くなった。何も知らなければ、幻影を使って逃げたと思えなかつただろう。

「分解、か……」

？司波達也の持つ、究極の分解魔法。それによって、彼は死んでいった。何故、そんな死に方を選んだのか。おれには、何もわからない。

「……じゃあな、馬鹿野郎」

？死は、悼んでやるべきだろう。おれは小さく手を合わせた。

「——お待たせ！ 持ち出せるメニューがあったから、買ってきたわよ！ ……つて、あれ？ 彼はどうしたの？」

？ジュースや軽食の載ったトレイを持ち、リーナがご機嫌で戻ってくる。彼女は狭い車内を見渡し、理澄の不在に気づく。

？彼の臆病さを表現するならば、死んでいったという言葉は不適當だ。だから、短くこう答えた。

「アイツなら、逃げたよ」

◆

？夜久とリーナが引き起こした問題により、四葉家本邸は上も下も大騒ぎであった。しかし、唯一の例外が。それは、四葉家当主——真夜の執務室である。

「あら、理澄さんが死んだ？」

？紅茶のティーカップに口をつけ、真夜は少し驚いた顔で葉山へ問い返した。

「達也殿からの報告でございませう。深雪様の身边に危険が及んだゆえ、咄嗟に『分解』を行使し……後で確認すると、それが理澄様であったと」

？司波邸に極めて攻撃性の高い魔法が発動される気配がしたため、達也は「精霊の眼」を辿り、全ての関係者を「分解」した。それにより、理澄と彼のガーディアン、他数名が亡くなったという。

「まあ、次期当主候補が一人減ってしまったわね。——分家の方達は、どう言っているの？」

「武倉はもちろんのこと、黒羽が相当な怒りようで。達也殿を四葉から排除すべきだと、こちらへ猛抗議を」

「理澄さんに非が全くない、というのなら、それも一つの選択肢でしようけれど。攻撃したのは、確かなのでしよう？」

「達也殿が虚偽の申告をしていなければ、そうなりますな」

「じゃあ、放っておきましょう。どうでも良いわ」

？本当にどうでもよかつたのか、真夜はのんびりと「紅茶のお代わりを貰えるかしら」と葉山に言う。

「それで、夜久様のことでございますが……」

？紅茶を差し出ししながら、葉山がおずおずと主人に告げる。

「何かしら？」

「これまで一条家が見て見ぬ振りをしていたのを良いことに、放置して参りましたが……流石に今回の件は問題でございませう。師族会議に持ち込まれる前に、手打ちにする必要があるかと」

「……仕方ないわね。藍霞さん呼び出してくれるかしら？」

？ 渉外は武倉家の担当ゆえ、彼女に任せる必要があった。

「それが……理澄様の死で、大変なショックを受けている様子で……。とても、交渉を出来る状態では無いかと」

「そうだったわね」

？ 大きいため息を吐く真夜。どうして、面倒なことは揃ってやってくるのだろうか……彼女は何だか腹が立ってきた。思わず、CADに触れる。

？ 「夜」が生まれ、一筋の光条が流れる。

？ 真夜の固有魔法「流星群」が、ティーカップとテーブルを貫いた。

？ 廊下で控えていたメイドが慌てて部屋へと入り、ホウキなどで掃除を始める。真夜が癩癩を起こしたときは、すぐに片付けないと自分も殺されてしまう。それを知つてのことだった。

「お気持ちは分かりますが、真夜様……」

「分かつてるわよ」

？ その時、葉山の端末が軽く震えた。「失礼します」と彼は言い、部屋の隅で通話に出る。

「——いえ、流星に……。だが……いや、仕方ありませんな。奥様にお繋ぎします」

？ 顔色悪く、葉山は真夜に報告する。タイミングは最悪だったが、言わない訳にもいかない。

「申し訳ありません、奥様……。夜久様が、どうしてもお電話をと」

「嫌よ。さっさと切つて頂戴」

「しかし、夜久様は『繋いでくれないのならば、次は都内で暴れる』の一点張りです……」

？ この状況でそれをされると、隠蔽が非常に厳しい。理澄の死によつて、分家が瓦解しているのだ。あまりにも、手が足りな過ぎる。

?そのことを理解したから、真夜は諦めてスクリーンの前に立つた。

『お久しぶり、お母様』

?画面の向こうの夜久は、いつも通りの笑顔だ。

「……私も忙しいのよ。貴方の相手をする暇は無いわ」

『理澄が死んだからだろ? 一条とのトラブルを解決するカードが出せない訳だ。』

「……どうして知っているのかしら?」

『そんなことはどうでもいいだろ。——なあ、お母様……おれ、勘違いしてたよ。頑張ったら、貴女のことを救えるって。そう思ってた。けど、間違いだったんだな』

「……なに?」

?真夜が身構えるが、夜久は寂しい笑顔で言葉を続ける。

『ごめんなさい、お母様』

?マズい、と思った時にはもう遅かった。想子の奔流が、真夜の身体を包む。幻影の衝撃を受け、彼女がカーペットに崩れ落ちる。

「奥様!」

?葉山が必死に叫ぶが、平凡な魔法師である彼にはどうしようもない。

?夜久は精神構造干渉魔法で、真夜の精神に干渉した。そして、真夜の知識——過去に深夜に書き換えられた「記憶を知識に変えた精神部位」の部分を抹消したのだ。

『……最初から、こうすれば良かったんだ。おれが息子だから、ダメだったんだ』

?夜久はそう呟き、ブチリと通話を切った。画面はブラックアウトし、もう何も言わない。

「奥様……」

?倒れ込んだ真夜を起こすべく、葉山がそっと近づく。

「——あら、葉山! 姉さんがどこに行ったか知ってる?」

「へ……」

「一緒におやつを食べる約束をしていたのよ! 弘一さんの話がした



くって、楽しみにしていたんだけど……姉さん、すっぽかしたのかしら」

？無邪気な態度で、姉や元婚約者の話をする真夜。その姿は、葉山も非常に見覚えがあった。

「ま、まやさま……!？」

？昔の。「あの事件」の前の……四葉真夜の姿だ。

「そうよ、わたしは真夜よ。——どうしたの？　なんだか、老けたみたいに見えるわ！　疲れてるんじゃない？　あつ！　お父様のところへ行行って、葉山にお休みを頂戴って言ってあげる！」

「いえ、大丈夫ですから……大丈夫」

？懐かしい思い出が蘇り、葉山は泣きそうになる。本当に現実ならば、救われるというのに……。

？実際は、何も変わりはない。事態は改善していないのだ。でも、もはやどうしようも無かった。

「変なの。泣いてるじゃない」

「ええ、変ですな……」

？こうなった以上、四葉本家はもう無理だ。けれど、奥様だけでもお守りせねば——葉山はそう考えた。

？彼は「スポンサー」から四葉家へ送り込まれた、所謂スパイである。いざという時、四葉家をコントロールする為の立場。しかし、今の彼にできることは少ない。優先すべきことは、一つだった。

「……真夜様、聞いていただけますか」

？彼は、かつての主人に語りかけた。

？貴女に会わせたい人物がいらっしやいます、と。

## 悪夢から逃げられない

? 現代は情報化社会である。

? 故に、ぼんやりしていても様々なことがすぐに耳に入ってくるのだ。適当にニユースサイトをピックアップすれば、師族会議についてのゴシップが沢山流れてくる。

「——師族会議、四葉は無断欠席を続けてるらしいぜ。一条家が『誠に遺憾』という声明を出したらしい。けど、今は誰も対応できないんじゃないか」

? コンビニで適当に買った朝食を食べつつ、おれはそんな話をリーナにした。

? おれ達は今、都内のビジネスホテルに滞在している。理由は簡単で、宿泊費が安いからだ。端末の自動支払いシステムは足がつくので、マネーカードか現金しか使えない。そのせいで、割とギリギリの生活だ。

? 死んだ理澄のCADにマネーカードが数枚挟まっていたので、おれはそれを拝借して使っている。けれども、そろそろ使用期限が近づいてきていた。マネーカードは一定期間を過ぎると、残金が口座に戻る仕組みになっているのだ。

「貴方が……ヨツバのボスを倒したのよね?」

「倒した、というのとは人間味が悪いな。おれは、お母様を救ったんだ」

? どうせ夢を見るなら、良い夢の方がいい。だから、悪夢を消し去った。それだけのことだ。

「それで、その師族会議? というのは日本では相当重要なのね。魔法師社会の方針に影響を与えるレベルと聞いたし」

「極秘ではないから、今回はそこまで重要でもない。でも、おれ達の件が議題だったと思うからな……」

「まあ……あれだけ破壊したものね」

? 素性は公開されていないものの、「過激派魔法師によるテロ」として大きく報道されていた。反魔法主義者がいきり立つようなネタだ。魔法師排斥の世論が加速していくかもしれない。

「七草なんかは、四葉を十師族から脱落させる良い機会だと睨んでいただろう。けれど、その前にこっちは勝手に瓦解した訳さ」

「？ただ、そのことは外野には分からない。何かしらの目的を持って、地下に潜ったのでは……今、彼らは猜疑心でいっぱいなの筈だ。」

「けど、これからどうするかな……。ちよつと、考え無しにやり過ぎた。問題は色々あるが、主に金銭面が悩ましい」

「？何をすることも、金が必要ということに直面していた。」

「真面目に働いてみたら？ 短期のバイトとかで」

「身分証明書がいらぬ仕事に限るとなると、暗殺とか産業スパイとかになるぞ」

「？昔に理澄が冗談で「黒羽の仕事を回してあげようか？」と言っていたのを思い出した。あれもきつと、同じような仕事内容だったに違いない。」

「世知辛いわねえ……」

「？その時。急にイヤな感覚がした。首の後ろの産毛が逆立つような、そんな妙な気分。それを感じた途端、おれはリーナに思い切りつき飛ばされた。」

「？瞬間、窓ガラスに亀裂が走る。リーナの展開した対物障壁が、破片が散乱することを防ぐ——その一連の情景を、おれは横倒しになった視界で見っていた。」

（敵襲!? 何処の差し金だ?）

「？思考が回るが、答えは出ない。」

「？けれど、都内に地盤の無い一条がこんな短時間で探し当てるのは不可能だろう。それならば、七草辺りかもしれない。とはいえ、推測に過ぎないから分からないが。」

「？窓の外から襲撃者——小柄な女性であった——が、部屋の中へと飛び込んできた。彼女は目にも止まらぬ速さで動き、リーナの懐へと飛び込んでくる。このスピードで動けるということは、自己加速術式を使っているのだろうか。」

「？けれど、少女の攻撃はリーナに当たらない。「仮装行列」で座標を変えていたのだ。既に彼女は少女の背後へと回っていた。」

「Activate!」 Dancing Blades!」

?リーナが叫ぶ。見覚えのある魔法だ。案の定、ナイフが一斉に飛び出してきた。しかし、少女は冷静にそれらを避ける。驚くべき反射神経だ。

「……………」

?精神干渉魔法を掛けようと、おれは少女を「精霊の眼」で見たと、ある事実が発覚——彼女は、魔法師ではない。

?それならば、これは何だというのだ。異常なスピード、身体操作……。常人のものとは思えない。

(マズい!)

?少女がバネのように跳ね、こちらへと向かってくる。何とかしないと。

?おれは「ルナ・ストライク」を行使した。ダメージを受けたのか、少女の動きが止まる。すかさず、背後に回っていたリーナが少女の首筋にナイフを当てた。

「…………降参だ。アタシのパワーなら、今からでも素手でアンタの首を捻じ切れるよ。けど、その前に後ろの奴に殺されちまう」

?少女が男勝りな口調とともに、両手を上げた。おれは拘束系の魔法、つまりは移動系魔法「停止」で彼女の動きを完全に止める。それを確認して、リーナがナイフを相手の首から離れた。

「アタシはナッツ。暗殺者というか……そうだな、『忍者』というのが近いかな」

?オー、ニンジャ?とリーナが言う。吹き出しそうになったが、何とか堪える。

「忍術遣いとは違うのか?」

「違う。アタシは魔法なんか使えやしねえよ」

?少女——ナッツはそう言つて、軽く肩をすくめた。

「津久葉夜久、だよな? アンタには恨みはないよ。ただ、仕事を依頼されただけだ」

「雇い主は?」

「……………」

?その問いには、彼女は押し黙る。依頼主は明かせない、というプロ意識があるらしい。

「別にいいぞ。魔法で聞き出すだけだからな」

「魔法師つてのは、何でもアリだな……言うよ、言えば良いんだろ?普段はナッツで通ってるが、本名は榛有希。全員が忍者で構成されている、政治的暗殺結社『亜貿社』の社員だよ。ただ、実はウチの会社の上はヤバい奴らでな……」

?ナッツ、もとい有希はそこで言葉を一度切り、溜めを作った。

「——裏社会の闇の闇。悪名高き『アンタツチャブル』の一族、その裏部隊。そう言えば、分かるか?」

「なんだ、黒羽だったのか」

?一条や七草と違って、まだ動機が分かるだけマシだ。

?理澄の「自殺」の理由がおれにあるのではないか、と彼らは推測したのでらう。それか、お母様を「救った」ことについてか。記憶の一部を消去する魔法を使える術者は、四葉におれしかない。

?四葉分家は特に身内への執着が強い。けれど、彼らも今は余裕が無い筈だ。よく手駒を動かさせたな……というのが正直なところである。

「黒羽を知っているのか?」

?厨二めいた言い回しをしなくとも、分かってくれたかもしれない——そう気づいたのか、少し恥ずかしそうに早口で話す有希。

「親戚だよ」

?殆ど顔を合わせたことは無いので、あまり思い入れは無い。だが、有希は顔をサツと青ざめさせた。

「マジかよ……アンタも『四葉』の人間か。おかしいと思ったんだ、アイツが報酬を前払いするなんて!」

?アレの同類と事を構えるなんて、まっぴらごめんさ。彼女はそうも続けた。

「アレ?」

「……可波達也だよ。アンタも知ってるだろ? 親戚なら」

「特に面識は無いけどな」

「アタシはアイツを殺し損ねたせいで、ヤミに飼われることになったんだ」

？ヤミ。確か、黒羽ではコードネームを使用しているという。リズムメモロデイであったように、単純な言葉遊びが命名の法則の筈だ。それならば——黒羽文弥が有力である。その彼が、普段と違って子飼いに報酬を先に渡した。

？その理由を考えようとしたとき、何かがチラツと光った。有希の端末に着信が来たのだ。

「出てもいいぞ」

？移動系魔法を解除する。逃げようとしても、リーナが何とかするだろう。

？有希は小さく頷き、端末を操作した。

「——もしもし、クロコ？ 悪いな、ちよつと失敗しちゃったよ……いや、話すのは大丈夫だ。何だよ——えつ、黒羽家が会社から撤退した!? それどころか、消息も掴めない?」

？スピーカーに変えろ、とジェスチャーする。有希はそれに応じたので、端末のスピーカーの音に耳を傾けた。通話相手は男のようだ。

『ええ。大口のスポンサーが消えた訳ですが、社長的には都合が良いでしょうね……』

「一体、黒羽に何があったんだ? ……そもそも、ヤミの奴はどうやら情報を隠蔽していたらしいぞ。今回の的——四葉の縁者だとき。的本人が言うにはな」

『なるほど、お家騒動的な。最近出回ったゴシップと照らし合わせる……四葉家内でゴタゴタが起きていたのかもしれない。彼らも、こちらへ弱みを見せたくなかったのでしょうか』

？男の推測は割と真実をついている。この察しの良さから考えるに、彼は裏社会の情報屋でもしているのかもしれない。

「アタシ達は黒羽に切り捨てられたということか……。今日日、ペットの破棄は条例で厳しく取り締まられるっていうのにな」

『そのようですね。これから先は、たぶん厳しいですよ。我々は黒羽に近かったですからね』

「最悪だな。かといって、抜け忍はロクな目に遭わないのがセオリーだ——」

? さつきから言葉のチョイスがいちいち面白い。

? 会話を聞いて、リーナが小さく口笛を吹く。やはり、忍者が好きなのかもしれない。

? 電話が切られたあと、リーナが最初に口火を切った。

「——ねえ、ヨルヒサ。このニンジャを助けるってのはどうかしら。ニンジャの会社を乗っ取るのよ」

? とんでもないことを言い出した。流石に、おれも驚かないではない。

「は?」

「え?」

「このままだと、ニンジャも行くところが無くて困るじゃない。それに、ワタシ達も特にアテがない訳だし」

? 確かにそうだと、おれは納得した。手の中のCADをポケットに捻じ込む。

「洗脳一つで済むしな。やるか。——ナッツ、とか言ったな。抜け忍になりたくなかったら、会社に案内しろよ」

「おい、そんな簡単に結論出して良いのかよ……」

「思い立ったら即行動がモットーだからな」

「明るいモットーをこんな最悪に感じたことないぜ……」

? 相棒も合流させていいか、と有希は尋ねたあと、疲れたように深い溜息を吐いたのだった。



? 今の日常が、ずっと続くと思っていたのに——窓の外を眺めながら、文弥はそう小さく呟いた。

? 全てが崩れていった。四葉家は、もはや過去のものだ。

？ 現当主の四葉真夜が、一族の統率が困難になってしまったから。彼女は、もう全てを忘れてしまっている。いまや、中身は単なる12歳の少女なのだ。

？ そんな真夜と、昏睡状態のままである姉の深夜は、葉山の手引きでスポンサーの元へと引き取られた。また、本家の中でも調整施設を担当していた者や、精神干渉系を中心に研究していた者——要は津久葉家である——は、スポンサーに囲い込まれた。使える、と「元老院」に判断されたのだ。

？ けれども、四葉の私兵でしか無かった自分達は違う。つまり、バックアップしてくれた本家がなくなれば、力を失ってしまうのである。

？ 師族会議の弾効から逃れるべく、四葉との縁を切らねばならなかったのが何よりの証拠だ。「四葉の裏仕事」を担当していた黒羽家——もしも表舞台に引きずり出されれば、好奇の目で見られるのは間違いない。故に、夜逃げ同然で逃げ出す必要があった。

？ そして、それは黒羽だけに限らない。新発田や武倉、他の分家にも言えることだ。特に武倉などは、完全に空中分解しているらしい。でも、今の自分達には手を差し伸べてやることも不可能だ。

「……文弥、大丈夫？」

「うん。心配かけてごめんね、姉さん」

？ いつもなら、文弥を揶揄う姉も心配そうに声を掛けるのみ。

「……こんなになっちゃうなんてね」

？ 亜夜子が小さな声で呟いた。文弥も同じ気持ちだった。

「理澄兄さんがいたら、こういう時……どうしてたかな」

「案外、四葉家に乗っ取っちゃったりしてたかも。『チャンスだ！』って言うって。それで、他の十師族も丸め込んじゃうの」

「あはは……そうかもね。きつと、そうだ」

？ でも、理澄はもういない。

？ 生きた痕跡すら残さず、この世から去ってしまった——司波達也の魔法で。

「僕、怖いよ……。理澄兄さんがどうという理由で、死にたがったのかは



分らないよ。だけど、何も考えずに殺しちゃうなんて」

？ 気付いて、止めてくれれば良かったのに。そんな心の叫びは、きっと彼には届かないだろう。

？ 文弥も亜夜子も、達也とは仲が良かった。慕っていたと言っても良い。それなのに。いや、だからこそ……忘れていたのだ。彼の「異質さ」を。

「理澄さんは忘れていなかっただわ、ずっと。深雪姉さまを害するようなことをすれば、間違いなく……達也さんは自分を殺すだろうって」

？ だから、人生に絶望したとき……その手段を選べた。未遂に終わらない、完璧な自殺の方法として。

「僕には無理だ。こんなに追い詰められているのに……。それでも、『生きたい』って思っちゃうんだ！」

？ いま、黒羽の屋敷はほぼ無人である。

？ 貢と使用人の殆どは、理澄の弔い合戦に向かったからだ。また、黒羽以外の分家からも多くがそれに参加している。

？ しかし、弔いというのは少し違うかもしれない。彼らは「四葉の人間」として、最後まで生きたかったのだ。かの「大漢報復」のように……それが自己満足であったとしても。

「そうね……私達は何者にもなれなかつたわ」

？ 亜夜子も悲しそうに目を伏せた。双子達は、父親と運命を同じくすることはどうしても出来なかつたのだ。死にたくなかつた。

？ 達也を許せない気持ちもあるが、復讐をして満たされるとも思えない。天災のようなものと思うしかなかった。幼馴染が殺されたことも、これから父や部下達が死んでゆくことも。

「行きましょう。——黒川達が待つてるわ」

？ 亜夜子と文弥に付いていく使用人は、たったの二人。文弥の教育係であった黒川白羽と、亜夜子の元ガードイアンであった矢作瑞穂だ。残していく子供達の為に、貢が選んだ「一番信頼できる部下」であった。

？ 今から4人は東北——「六」の管理地域に向かうのだ。新発田勝

成が伝手を使い、六塚の傘下に入ったので、その縁で声を掛けて貰ったのである。勝成と双子達は、理澄を介した知人でしかない。けれども、彼は行き場を失った親戚を放っておけなかったのだろう。

「うん……」

？文弥は不安そうな顔のまま、姉の手を握る。亜夜子もまた、その手をギュツと握り返した。

## 別離編

君は友達だから

？ 亜貿社へと向かう途中で、有希の相棒であるらしい情報屋——鰐塚単馬と引き合わせられる。見た目は地味な男だ。けれど、黒羽からいくらか情報は貰っていたとはいえ、おれ達を探し当てたのである。なかなか凄腕の情報屋に違いなかった。

？ リーナが「ニンジャ村出身？」だの、「ニンジャって若く見えるのね、ワタシより年上だったなんて」だのウザ絡みをし、有希が「殺されてえのか？」とガンを飛ばす——そんな小競り合いをしている彼女らを尻目に、おれは鰐塚から話を聞く。

「社長室は建物内部に位置しており、外からの侵入はできません。そして、社員であつても部外者の引き入れは禁止です。せいぜい、入れても応接室までですね」

？ それも稀ですがね、と彼は冷静にコメントした。

「入る分には問題ないんだよ。認識障害を使えば良いからな。一番ネックなのは、洗脳が効きやすいか……忍者の異能ってのは、魔法じゃないんだよな？」

？ 本人曰く、有希は先天的に「フィジカルブースト身体強化」の異能を持っているらしい。ただ、それは意思でオンオフが決定できるのみで、魔法演算領域のような拡張性は無いようだった。

「ええ。でも、ナッツだつて例外中の例外ですよ。基本は皆、単なる人間です」

？ 非魔法師の口から出た、人間という言葉。それは、魔法師との壁を感じさせるもの。

「……人間じゃない奴らのこと、やっぱり怖く感じるのか？」

？ 魔法師は、自分の魔法に絶対的な自信を持っていることが多い。だから、おれの「マギ・インテルフェクトル」は、魔法師にクリティカルなダメージを与えられる。「非魔法師になってしまう恐怖」はそれ程のものなのだ。荒事よりも交渉が得意だった理澄ですら、魔法を

失うと絶望したのだから。

「怖くはないですよ。なんていうか……別の世界の人？　そういう感じですよ。こんな裏業界にいる以上、それなりに魔法師とも関わりますよ。それでも、『ああ、なんか違うね』と思う程度です」

「そういうもんか。非魔法師は全員、反魔法主義者だと思ってたぜ。最近ではデモもよくやってるしな」

「まあ、原因はおれなのだが。テロの実行犯の正体も明かさねず、捕まりもしなかったら怒りたくなるかもしれない。

「必要悪ですよ。外国に侵略されたりして、今の仮初の平和が無くなるよりは……国防を担う魔法師達の事実上不逮捕特権を呑み込んで生きた方がマシですから」

「マシ、か……」

「そもそも、おれは魔法師社会が好きではない。けれども、魔法師達に対する消極的論は何とも言えない気持ちになった。

「——ここが亜貿社です。古いビルですが……一棟ぶち抜きですからね。景気は良いと言えるでしょう」

「確かに古いビルであった。適当に魔法でも撃てば、崩れるのではないかと思う。」

「じゃ、行くか……」

「？おれはコートのポケットに手を入れたまま、建物内へと一歩踏み出した。認識阻害の術式を掛けているので、特に問題なく進む。そして、社長室の前で足を止め、CADに指を走らせた。

「よし、これで大丈夫だ。黒羽の記憶があるから、割と弄りやすかったな」

「？社長——両角来馬の記憶に干渉し、「黒羽に代わって、四葉関連の担当者が来る」という認識を植え付けたのである。」

「……ナッツ、社長におれ達を適当に紹介してくれ」

「？そして、洗脳の効果を完全にするための指示を出す。魔法だけでは、どうも効き目が薄いのだ。周囲情報から認識を歪めさせないと、非魔法師でもかかりにくい。相手が忍者だというのなら、尚更慎重にせねばならなかった。」

「どう説明すれば良いんだ？」

「おれは、黒羽に代わる四葉の新エージェント。それで、リーナは新入り忍者で」

「ニンジャ！ ワタシが!？」

？リーナが嬉しそうに声を上げた。好きだけでなく、結構なりたかったらしい。

「こんなナリの忍者がいるかよ……」

「あら。ステイツでは21世紀前半から今に至るまで、ずうつとニンジャブームなのよ？ ワタシもシユリケンを投げたことあるわ」

「知らねえよ！」

「まあまあ、ナッツ……」

？鰐塚が有希を押し留める。なんとか落ち着いたので、社長室へとゾロゾロなだれ込む。

「おや、君たちは誰だね？」

「……社長、こちらが撤退した黒羽家に代わる、四葉家エージェントの津久葉夜久さんです」

「おお、そうだったな。すまん、忘れていた。——いやあ、態々ご足労下さって……」

？騙されてくれたようなので、そのあとは適当に相槌を打つ。

？おれの口座を新しく作り、そこへ役員報酬を支払うこと。リーナを社員待遇で会社に置くこと。ついでに、有希の給料を上げること。諸々を取り決めて、社長との交渉（こちらが一方的に言ったただけだが）を終える。「政治的暗殺結社の経営理念云々」と、とにかく話が長くて大変だった。



？亜貿社の寮は、会社がアパートを買い上げて設置されている。おれはそこに住むことにした。ビジネスホテルでの生活は必要に迫ら

れてだったが、どちらにせよ人の多いところに紛れる方が安全であったりもする——自衛手段がある者には。

？社員となったことで偽装戸籍を入手したりーナは「仮装行列」を使って、好きにバイトをしている。忍者体験は3日ほどで飽きたようだった。

？ある日のこと。おれが部屋へ戻ると、2人の人間が勝手に上がり込んでいた。鍵はかかっていたので、明らか不法に侵入している。

「何の用だよ、一条……それに吉祥寺」

？CADを持ったまま、おれ達は対峙する。先に力を抜いたのは、一条であった。

「……戻ってこいよ」

「え？」

「やってしまったことは問題だが、今なら四葉家を理由にして解決できる。前田校長も、『このまま退学にするのは惜しい』って、処分を保留しているんだ。だから……」

？反省して、やり直せ——そう言いたいらしい。

？普通の魔法師であったなら。単にちよつと弊がって、悪いことをしてみた学生であったなら。彼の言葉に頷けたかもしれない。

？でも、津久葉夜久は世間から見れば「四葉」の魔法師だ。自分を利用して価値のある人物だとも分かっていた。

「……四葉を十師族から脱落させて、暫定管理だった東海地域を七草と一条で分割するんだろう。その為に、おれの存在が必要だった。四葉を再建しないと始まらない」

「それは……」

「でも！ 将輝は……お前のことを思って！ 校長だつてそうだ！」

？そうなのだ。きっと、本人は善意で言っている。そこに、沢山の思惑が重ね掛けされているだけで。

「でも、ここで頷く訳にはいかないんだよ。おれは別に、家がどうなるうと知らん。けどな……お母様が憎み、愛した四葉を汚せない」

？手に力を込め、CADを握りなおす。彼らもまた、警戒の色を強める。

「四の系譜の魔法師は……二つのタイプに分かれている。ユニークな固有魔法を持つタイプ、あるいは精神干渉魔法に強い適性を示すタイプ。おれは、ある意味両方だな」

「何が、言いたい？ ——まさか！」

「？ 一条がハッ、と何かに気づいた顔をした。ご名答、とおれは人差し指を向ける。」

「おれの魔法は『精神構造干渉』。その中でも、魔法演算領域を閉じる魔法が一番得意だな。魔法を失うか、それでも強行突破するか……好きな方を選ぶと良い」

「……」

「？ CADを掲げて、おれはニヤリと笑う。彼らは、一体どうするのだろうか。」

「魔法を失っても、茜や瑠璃がいる。一条家が断絶することは無い。だから、恐れることは——」

「——……将輝、帰ろう」

「？ 勇ましい一条の宣言に対し、異を唱えたのは吉祥寺であった。」

「けど、ジョージ……それじゃ」

「僕は魔法がないと……何もできないんだ！ だって——」

「？ 究極の選択を前にして、彼はそう叫んだ。」

「——両親が死んだ後、僕は一条家に拾って貰えた。それは、僕に魔法の才能があったからだ。利用価値があったからこそ、君の側に居ることが許された……魔法を失った時、僕に何が出来る？」

「お前……そんなこと」

「いや、知ってるよ。将輝はね、きつと僕がドロップアウトしても……友でいてくれると。けど、そんな惨めな立場を！ 何より、僕自身が許せない！」

「？ それは、彼の苦悩だった。どうして自分が「一条将輝の友人」で居続けられるか。その意味が分かっている故の。」

「まあ、それが妥当な判断だよな。理澄の奴も……魔法を失って、自ら命を絶ったよ。『全てを失ってなお、這って生きるような勇氣はない』ってな」

？おれはラックから端末型CADを取り出す。何となく、これは捨てられずにいた。唯一残った、彼の生きた証だったから。

「死んだ、のか……!？」

「あの、武倉が？」

「ああ。……アイツが生きていたなら、お前らの望むような『四葉』が実現していただろうさ」

？理澄というより、分家の方針は「マズいものを裏に押し込める」であった。おれの「精神構造干渉」や司波達也の「マテリアル・バースト」などを隠したまま、他家との協調路線を進めていったらう。日本の国防を担い、社会奉仕を行うといったキャンペーンを打ち出して。

？彼が難癖つけて五高に進まなかったのも、同世代の十師族直系との関わりを必要としたからに違いない。

？そして、それは正しい判断だったとは思う。

？今の「アンタッチャブル的路線」が黙認されているのも、お母様の存在ゆえである。四葉真夜が世界の理不尽を一手に引き受けた被害者であるからこそ、誰も口を出すことが出来なかった。でも、代替わりしてしまえば許されなくなる。

「けど、社会に必要とされない魔法を持つ者は……排除されてゆく」

？第四研で実験体を弄り回し、静かに一生を過ごす——クリーンな四葉家が確立したなら、おれの人生はそうなることが確定だった。

「確かに、お前の魔法は冒瀆的なものかもしれない……。でも、言わなければ分からない。現に、俺達も今まで知らなかった！」

「分かってるさ。理澄を排除した以上……新生四葉家当主になる分には、何の問題もないことくらい」

「だったら……」

？一条が言葉を重ねる。彼の気持ちも分かるが、それでも領けない理由があった。

「言っただろ。お母様が生きた『四葉』を否定出来ないって」

？地獄より罪深く、不幸せの蠱毒だった第四研。子供のうちから殺人を教え込まれ、倫理観を歪ませる場所。



? 誇るべき生まれで無いことなど、分かり切っている。でも、おれはお母様に産んで貰ったことを誇りに思う。たとえば、自分しか覚えていなくとも。

「おれのことをまだ友達だと思うなら、帰ってくれ。帰らないなら……もう、お前らは敵だ」

? CADを握り直す。「エレメンタル・サイト精霊の眼」は発動しており、既に覚悟は出来ている。

「……帰るか、ジョージ」

「将輝……。ごめん、僕のせいで……」

? 2人は、おれに背を向けた。玄関まで数歩歩いたところで、一条が言う。

「……本当は、俺も魔法を失うことが怖かった。情けないよな。相棒の手前、見栄を張ったただけだったんだ」

「そうだと思っただぜ。——じゃあな」

? 友人を見送り、おれはドアをゆっくりと閉める。

? この日、おれは第三高校を退学することになった。人生二度目の退学だ。



? 四葉家崩壊の余波は、司波兄妹にも無縁では無かった。

? 理澄の弔い合戦と称し、黒羽貢を筆頭に分家の人間達が達也を襲ったのことも、その一つだ。四葉の魔法師であった彼らは皆、高レベルの魔法師であるのは確か。けれども、達也の敵では無かった。1日足らずで、全員を対処することはできた。

(しかし、それが陽動だったとは……予想外だった)

? 1日——つまりは24時間、達也を足止めすること。それこそが目的であったのだ。

? 達也を襲撃する前、彼らは他の人物らの殺害を行なっている。そ

これは、国防陸軍第101旅団長、佐伯広海少将およびその手駒の軍人数名。そして、フォア・リーブス・テクノロジーCAD開発第三課の社員らだった。

？司波達也の戦力になり得るコネを排除し、「再成」が不可能になるまで時間を稼ぐ。この作戦には、敵ながら天晴れと達也も思ったほどだ。

？第三課が存在しなくなったこと。四葉家という後ろ盾が無くなったこと。それらのために、達也はFLT本社で再び働かされそうになった。要は、実験器具のリカバリ要員である。

？しかし、そんな危機的事態から彼を救ったのは、意外な人物——友人でもある北山雫の父親、北山潮であった。親の都合で一高を退学するかも……という話を軽くしたところ、それを聞いた雫が両親にどうにか助けられないかと相談したのである。

？そのおかげで、達也は北山家の専属CAD魔工技師という名目で、いくらか生活の援助をしてもらうことが出来た。今は父親の持つ家から引越し、兄妹で都内のマンションで生活している。

？失ったものは多くあるが、忌まわしき四葉家から2人は解放された。それだけでも、喜ぶべきことなのかもしれない……楽しんで食事を用意をする妹の様子を見て、達也はそんなことを考えた。

「そういうえば、お兄様」

？食材を切る手を止めて、深雪が話し始める。何かを思い出したのだろうか。

「どうした？」

「今日、雫が言っていたのですが……。近々開催されるパーティに、私達を招待したいそうです。確か、新しくできるタワーの竣工記念パーティだったかと」

「いま建設中のタワーと言えば……東京オフィスアタワーかな。魔法師との共存をテーマにっていて、実際に魔法師も安全装置に関わっている。中々新しい試みじゃないかな」

「魔法師が関わっているなんて、とても珍しいですね。——それで、パーティは……」

「参加しよう。雫の父上には世話になっているし……そうでなくとも、友人の誘いだからな」

? 達也の言葉に、深雪はパツと顔を輝かせた。

「そうですね! 後で伝えておきます!」

「うん、頼むよ」

? 妹の嬉しそうな表情に、達也も顔を綻ばせる。

? ガーディアンという立場に縛られなくとも、お前を絶対に守ってやる——そう、彼は決意を新たにしていたのだった。

## 抱きしめられたら

? 一条達との決別後、十師族関係の追手の姿は殆ど見なくなった。ほんの時折、七草の手の者らしい魔法師を見かける程度である。

? 師族会議が四葉家を廃嫡することにしたのか、「スポンサー」がおれに干渉しないよう各所へ圧力をかけたのか。

? 後者の推測が正しいと分かったのは、それから少し日にちが経った頃。ある人物が、おれを訪ねてきたことで分かった。

「——貴方がわざわざ来るとは思いませんでした」

「いまや、私は単なる老人に過ぎないのでですよ。そう大した者ではありません」

? おれは部屋のテーブルを挟んで、懐かしい人物と向き合っていた。客人は元四葉家筆頭執事——葉山さんである。茶などは無いから、とりあえず水を入れたコップを出しておく。彼は手をつけなかった。

「……お母様は元気ですか」

「ええ。遠い未来へ来てしまった……とは理解しているようです。眠り続けている深夜様のことでは、やはり悲しまれていますが……」

「そうですね。お母様にとって一番馴染み深い人ですしね、叔母様は? けれど、それも時間の問題だろう。いつか……いつかは、叔母様も目が覚める。そうしたら、きっと大丈夫だ。」

「それですね……夜久様。よろしければ……真夜様に、会いませんか?」

「え?」

「もう……真夜様は貴方のことを覚えていらつしやらないのです。このままでは、何とも寂しいことはありませんか」

? 考えないようにしていたことだった。

? もう一度、お母様に会う——でも、全てが「無かったこと」になっても、おれの罪は消えない。素知らぬ顔で、関係性を作り直すことは正しいと思えなかった。

「……やめておきます」

? おれは短く、そう言った。お母様の為にも、会わない方が良い。そのように言葉も重ねる。

「――!」

? けれども、葉山さんはおれの言葉に激昂した。

「いい加減にしなさい!」

「……」

「貴方は怖がっているだけです。『親子』という柵が無くなって尚、真夜様に嫌われるんじゃないかと。そうやって、怯えるだけで良いのですか! 夜久様は!」

? 正論だ。あまりにも、正しくて……逃げ場がない。

「それでも……会えません。お母様には」

「夜久様……!」

「おれ、怖い……。今でも、怖くて仕方ない。お母様の記憶を消したところで、結局何も変わらないんじゃないかって」

? そのあとは、葉山さんの言葉に何も答えなかった。答えを出すことが恐ろしいから。そして、彼は困った顔をしたまま、帰っていった。最後に「決心したら、教えてください」と言い残して。

(おれを叱っただけ、踏み込んでくれたんだと分かっているけどな……)  
? 葉山さんは使用人だった。だから、あんなにも自分の感情を出すことは無かったのだ――あの人がどれだけ優しいのかなんて、分かっている。でも、無理やりに引張って欲しかった。「自分で決断」しただけでなかった。

? 後悔の気持ちを抱えて、おれは泣き続ける。

「――どうしたの?」

? 何時間経ったのだろう。窓の外は暗くなっていた。

「……リーナ?」

「バイト先で賄いを沢山貰ったから、お裾分けしようと思つて……だけど、どうしちゃったの?」

? おれの方へと近寄り、彼女は目が合う高さまでしゃがみ込む。かさり、とビニール袋が床に落ちる。

「ふふ、前の時と逆ね。……大丈夫?」

? 頬が温かい。リーナの手が、おれの顔を挟んだのだ。掌の感触は昔を思い出させる。お母様の手は、とても冷たかった。

? 吸い込むような蒼い目を見つめ、過去の全てを話していく。聖母像へ懺悔するように。

「――怖いのは当たり前よ。だから……ワタシはね、全部忘れることにしたの。両親も、軍の人間も……ワタシの中ではみんな死んでるの。人から負の感情をぶつけられるかもって、不安に思わなくて良いもの」

「おれも忘れたいよ……でも、誰も忘れられない」

? そうでなきや、なぜ「誓約」を維持したままなのか。そして、なぜ理澄のCADを処分しないのか。自分はいっだって中途半端で、優柔不断なんだ。

? やるせない感情をどうにかしたかった。おれは、リーナを巻き込んで床に倒れ込む。

「……いい?」

? 耳元で小さく呟いた。何でもいいから、救って欲しい。一瞬だけでも。自分のカサついた唇を舐め、顔を近づけた。



「――好条件のバイト?」

? 牛丼をかき込みながら、おれはリーナにそう問うた。疲れた体に甘い牛肉の味が染みる。

「そう。緊急時に東京オフィスアタワーの動力源として常駐する仕事よ」

? 下着姿のまま、リーナが端末を左手で操作する。右手は箸を握っているからだ。彼女はローストビーフ丼を食べていた。

? 画面に映し出された文字を読むと、三交代制の勤務体制らしい。日勤・準夜勤・夜勤のどこかに入って、待機するだけの簡単な仕事。放

出系魔法で柱を支える制震ダンパーの摩擦を減らしたり、移動系魔法で柱を回転させたりするようだ。

「他の人を紹介すると、時給が少し上がるっぽいのよ」

「まあ、魔法師なんて数が少ないからな……」

「？使用する魔法の系統を指定していたら、尚更そうだろう。特に放出系は魔法式がやや複雑なので、加速や移動に比べればもつと少数だ。」

「しかも、その殆どは公務員になる。そうでなくてもナンバーズに組み込まれるからな」

「？この仕事も内容的に、まともな魔法師はつかないだろう。アルバイトとしては待遇も悪くないし、時給だって高めだ。だが、魔法科高校や魔法大学を出てまで就きたい職でもない。エクストラのように脛に疵持つような……魔法師社会から爪弾きにされた奴が行き着きそうだ。」

「来てくれる？」

「いいよ、別に。どうせ暇だ。そういうところなら、CADの調整機もあるだろうしな」

「？ここ最近、CADの設定を弄っていない。三高には自動的にアジャストしてくれる装置があったのでそれを使っていたが、今は使えないので放置気味だ。魔法が使えないことはないが、そろそろ何とかした方が良かった。」

「あーそうね。ワタシも思ってたのよ」

「？自分用に調整されていないCADでも、それなりに魔法を発動できるのが優秀な魔法師だ。けれども、やはり違和感は拭えない。」

「？CADの為に働こうか、と意見が一致する。スタイラスペンを走らせ、二人揃って履歴書を記入していく。そんな時、部屋のチャイムが鳴った。ドアを開けると、小柄な人影が。」

「よう。お前らが何しようが勝手だけだよ……近隣住民が文句を言ってる。程々にしろ」

「？あと空気が悪い、換気してくれ。そう言いながら、有希が部屋へと押し入ってくる。」

「ウチにアポ取ってきた奴がいるんだけどな……」

？ 適当な場所に座った彼女は、本題をすぐに切り出した。

「ソイツはカン・フェールと名乗っている。どうやら魔法師らしくてな……魔法絡みは話が面倒そうだから、ちよつと手伝って欲しいんだ」

？ 鞆から紙束を取り出し、机に並べようとする。井の器を持ち上げ、おれ達はスペースを作った。

「魔法師ねえ……」

？ カン。漢字ならば姜。名字的に大亜系だろうか。もちろん、本名を名乗っているかもわからないのだが。

「おそらく、ターゲットは東京オフショアタワー建設プロジェクトに関わっている人間だと考えられる。そんなことをチラツと触れていた」

？ つい先程、話題に上ったワードが出てきた。それゆえ、何となく興味が湧く。

「さつき、このタワーでバイトしようかって話してたんだ」

「バイトお？ 何だよ、チケツトもぎりか？」

「違うわよ。あのね……」

？ リーナが有希に「魔法師を募集しているバイトがある」という話と、タワーについての説明を行う。

「いちいち魔法で動かしておかないと倒れるって、随分と難儀なビルだな……」

「普段は電気が動力源だ。でも、非常時に電気が切れると魔法で動かさないとダメなんだ。これ、結構ヤバいぞ」

「何もしなくても基本は倒れない建造物であってくれよ……」

「尤もだな。元から欠陥構造なのに、魔法で無理やり成立させようとしているのが丸わかりだ」

？ 一応地下はシエルターになっていらしいので、タワーが崩れても生き残れはしそうだが。何なら、ビル付近にいるよりも、安全ではあるだろう。しかし、崩れる前提なのは問題ではないか。

「ふーん。アタシはその辺には近づかないことにするよ」



? とりあえず明日の依頼人に会う時、おれが同席するという話で纏まった。どういう理由で彼が暗殺を依頼してきたのか、改めて尋ねようということだ。



? 次の日、おれは鰐塚と一緒に依頼人と対面していた。ある喫茶店にて、端の方でおれ達はコソコソと商談をする。

? カン・フェールという男は、なかなか男前な見た目だ。長髪を後ろで束ねており、手首には腕輪型CADが。このご時世に、堂々と身につけている人は珍しい。

「この会社、『アンタツチャブル』と繋がっているという噂を耳にしたのですが……本当ですか」

「随分と直球の質問なことだ」

「貴方がたも、こういう商売だ。どうせ、私の素性は調べ終えていらっしやるでしょう」

「ええ。『進人類フロント』の方だとは存じておりますよ」

? 鰐塚がニコニコした顔で、カンの言葉に頷く。相手が持っているであろう思想を考えると、彼は呑気に頷いている場合ではない気がする。まあ、客商売だから仕方ないのか。

? 進人類フロント。魔法至上主義の急進的団体であり、「魔法師こそが人類の進化系である」と唱えている。

「なら、お話は早い。是非、我々の活動を承認して頂きたいのですよ」  
「今の彼らは、ほぼ機能不全状態……そんな噂が耳に入っていないとは言わせませんよ」

「ご冗談を。あの『アンタツチャブル』ですよ? 決起に向けて、地下に潜ったに決まっている」

? 聞く耳を持たない。彼は自分の都合の良いことだけを信じるタイプなのだろう。

「承認、までは分かりませんが……彼らが貴方がたの活動に抗議する、ということは無いです。それだけはお約束します」

「?こういう手合いは、耳障りの良い言葉で誤魔化すに限る。おれの言葉に、彼は満足げな顔をした。」

「それで十分です」

「では、本題へと移りましょう。『処分』したい商品は何でしょう?」  
「東京オフショアタワー建設プロジェクト関係者です。魔法師を使い潰すことしか考えていない、人間の屑達です……」

「?関係者を暗殺することで、建設自体を中止させる目論見らしい。しかし、それは無理な気がする。もう建てかけな訳だし、何人死のうが続けるだろう。とはいえ、そんなことは教えてやらない。適当に「そうですか」と答えておくのみ。」

「?おれはCADの調整の為に、真面目に働こうとしているのだ。こっちが暴れたい気分の人に、暴れてくれたら良いものを。何とも、タイミングが悪過ぎる。」

## 正しさを教えてくれ

？最終的に、カンと亜貿社との間で契約は結ばれなかった。しかも、こちら側からの拒否。後々の遺恨を残さないよう、おれがわざわざ彼の記憶を改竄までしたのだ。「暗殺という小さな解決策では、事態は何も解決しない」という考えを植え付けておいた。多分、亜貿社に行ったことは「みみっちい発想」だったと反省しているに違いない。「北方潮の何がダメだったんだ？ 協賛してた魔法協会のトップも殺せるっていうのに、単なる一会社の社長にビビるのは変だろ」

？指定したターゲットの1人に「北方潮」がいたこと。それが、暗殺計画をストップする理由だった。彼はホクサングループの代表であり、国内でも有数の資産家だ。彼自身は非魔法師だが、魔法師と結婚したことをきっかけに、魔法産業にも最近力を入れているという。とはいえ、新規参入ゆえにCAD開発や魔法式開発などの花形産業に加わるのは厳しい。だからこそ、タワーという前例のない事業に出資したのだろう。

「的の近い人間の1人……それが問題でした」

？鰐塚が苦虫を噛み潰したような顔で言う。ひどく言いにくそうな口振りだが、おれは言葉の先を促す。

「司波達也ですよ。昔……ナッツがやらかしまして。それで手痛い目に遭ったんです」

「なんか、前に軽く聞いたな」

？おれを狙ったときにも、「司波達也」について話していた。よほど、酷い目にあっただろう。

「魔法の詳細については、私は分からないのですが、文弥様の話では……『達也兄さんが殺そうと思ったなら、どこにいても殺せるんだから』という話でした。何とか生き残っているのだし、わざわざアレを刺激することはない。そういうことです」

「なるほどね……」

？納得したおれは、深く頷く。どうやら、黒羽文弥は「例の魔法」を持つ再従兄弟を誇っていたらしい。今でも、それは変わっていないの

だろうか。少し気になった。

「ちなみに、これは興味本位なのですが……」

「何だ？」

「貴方だったら、逆に殺せるんですか？ あの『司波達也』を」

？殺せるのか。その問いをきっかけに、頭の中でシミュレーションが廻る。

「……殺せるかもな」



？東京オフショアタワーの建設は進み、3月終わりにはほぼ完成。全長約2千メートルの超高層タワーは、東京の新たなシンボルマークとなったのだ。

？そして、4月7日——タワーの最上階では、竣工パーティーが開かれていた。

？おれとリーナは、地下35階にある待機室で駄弁っていた。遮音フィールド程度の魔法なら、使用を許されているので張っておく。職場の設備で調整したことで、CADも今はずっと使いやすくなった。「しかし……あの、カンという男。アイツの言ってたことも、強ち間違いではないのかもな」

？待機室を見回し、おれはそう呟いた。豪華な部屋、動画などの娯楽。ここでぼんやりしているだけで、それなりの給料になるのだ。待遇は言うほど悪くない。けれども、非常時の仕事内容——魔法に関してのケアが本当に杜撰なのだ。

「専用CADすら置いていないなんてね。バラバラに柱を回せているの？ タイミングが合わないと、どうしようもないわよ」

？リーナがコンビニで買ってきた菓子を摘みながら、魔法設備関係の文句を零す。

？電気が供給されなくなった場合、移動系魔法でホイールを回転さ

せねばならない。その為のCADは自弁らしいのだ。それは無茶過ぎる。

「しかも、普段は業務が無いわけだし。ぶっつけ本番で、息が合う訳ないでしょう？」

「魔法は繊細なものだ。現代魔法は特にそうで、相克を避ける為に協力は難しい。だからこそ、三高などでは「コンビネーション魔法による戦術」による実戦演習があった訳で。」

「普段から好き勝手しているおれが言うのも変だが、基本的に一般魔法師はコミュニケーションを密にしておいた方が良く。そして、皆が使える平易な魔法を確認しておく。そこまでしてやっと、魔法による共闘が可能になるのだ。」

「強力な固有魔法は属人的なものであり、そんな魔法師は数少ない。四葉にはゴロゴロいたけれども。ところが、魔法師全体の割合で考えると固有魔法頼りの魔法師は1割以下だ。」

「術式を分けないと、長時間の魔法維持は厳しいだろうに……」

「数人の魔法師での協力は定石でない。例外は、儀式魔法の魔法陣システムを転用した、大型CADによる分担だ。」

「儀式魔法は、古式系の精霊魔法に近い。想子情報体を介し、エイドスの改変を行う。魔法師が行うのは無系統魔法による、情報体の継続的な活性化だ。いかんせん、情報体は1人で処理するには負担が大きすぎる。故に、数人で動かす必要があるのだ。」

「きつと、高いからね。調整機も良い機種じゃなかったということ、予算とかが厳しいのかしら……」

「魔法陣は高い。手描きというのものもあるが、特定の改変を行う情報体を生む為の画像パターンが複雑なのだ。単一系の簡単な魔法であつても、大掛かりなものとなってしまう。」

「『魔法師との共存』というお題目だけが先行したんだろ。魔法協会も金を出してくれそうなネタだ」

「共存、ね……。そんなの、理想論だわ」

「？その通りだ。魔法師同士ですら、分かり合うことはできない。おれもリーナも、魔法師社会から零れ落ちているのだから。」

「——随分と言いたい放題ですね。俺も同感ですが」

？不意に、声が割って入った——割って入る？ おかしい。遮音フィールドを掛けていた筈なのに。

「急にすみません。耳が良いもので」

？声の主は、横に座っていた青年からだった。20代後半、といったところだろうか。

「……耳が良いだけじゃないわよね。遮音フィールドに隔てられた声を聞くスキルなんて、なかなかお目にかかれないわ」

「正確には、フィールドで減衰していく音の波長を聞き分けているんです」

？剣呑なりーナの視線にも動じず、青年は肩をすくめるのみ。

「俺の名前は、東雲<sup>しのめぐるき</sup>瑠綺です。お初にお目にかかります、夜久様」

「四葉の人間か」

？おれを「夜久様」と呼ぶこと。導き出せる答えは一つだ。

「元は、武倉の魔法師でした。理澄様亡き今、もう帰るところは無いのですがね。今は、進人類フロントに所属しています」

？青年——瑠綺は、おれ達の前の椅子へと座る。

「まあ、一点特化の魔法師を拾ってくれるところは少ないですからね……消去法ということですよ」

？瑠綺は、堂々と目の前にある菓子を食べ始めた。「夜久様」と言うてはいたが、態度はまるで最悪だ。

「カン・フェールの素性はご存知ですか？」

「本名は岬というらしいな。大陸系じゃなかったようだ」

「ええ。本当の字は別で、『三咲』。……三のエクストラですよ」

「エクストラ？」

？りーナが首を傾げた。馴染みのないワードだからだろう。

「十師族が開発された研究所にいた実験体の……そうだな、いわゆる失敗作だ。非人道的な魔法特性を持って生まれたゆえ、闇に葬られてしまった。魔法黎明期の負の遺産だよ」

「ヨルヒサも割と、とんでもない魔法を持っている気がするけど」

「まあ、それはそれだ」

「第四研は、元より闇ですからね。社会から離れていたゆえに、迫害されることもなかっただけです」

？古巣なのに言いたい放題だ。意外に思い、その理由を問う。

「俺は中途雇用なんですよ。元は『F E H R』前身グループのメンバーでした」

？Fighters for the Evolution of Human Raceの頭文字を取って、F E H R。最近、バンクーパーで正式承認されたとかいう魔法師保護団体だった筈だ。

「軍に徴兵されるレベルにない、魔法因子保有者のコミュニティ……スターズ時代の資料で見たわ」

「その通りです。ただ、どうも肌に合わなくて……」

「魔法師保護団体なの？」

「社会の中で『魔法遣い』として、溶け込む必要がどこにあるのかと。魔法を自由に使いたいだけなら、そういう場所に身を置くしかありません」

？それゆえ、四葉家へと就職した。どうやってかは知らないが、何か方法があったのだろうか。

「そういう点では、進人類フロントはマシですよ。『フェール』を名乗る割に、好き放題魔法を使わせる！という主張ですからね」

「なるほど、フェールという名はF E H Rから取っていたのね」

？エクストラの血統に生まれてしまった岬は、F E H Rの思想に共鳴したのだろう。だから、意識してそんな偽名を使っているということ。

「だが、進人類フロントの方がマシか？ 魔法協会・師族会議の連名で『過激派魔法至上主義者団体』と批判されているんだぞ」

？彼らが内心どう思っているかはともかく、世間に認められている団体ではないのだ。正式承認されているF E H Rの方が真つ当ではある気がする。

「法を無視して魔法を使いまくるなら、それ相応の制裁は必要でしょう」

？魔法を自由に使いたい。けれど、差別されるのは嫌。そんな魔法

師の矛盾した主張を、瑠綺は心底憎んでいるらしかった。

「実際、夜久様も落ちぶれている訳ですからね」

「うるさいな。それは元からだよ」

？追手は滅つた為に、素顔で街を歩けてはいるが、まともな魔法師コミュニティには加入することは無理だ。魔法協会などにノコノコ行けば、普通に拘束されるだろう。

「——それで、用は何だ？ わざわざ、元雇い主の知人に接触する必要がお前にあるか？」

「……今から、このタワーでテロが行われます」

「テロ？」

？おれは目を見開く。隣でリーナも驚いていた。

「魔法に対する粗雑な認識の告発……の筈だったんですがね。結局、暴走してこんな有様です」

「何をやるんだ？」

「タワーを爆破して折ります。——それだけはお伝えしておこうかと。一方的に知っていただけです……何だか目覚めが悪いので」

？そう言い残し、彼は去っていった。おれ達は顔を見合わせる。別に職場が無くなるうとどうでも良いが、CAD調整機の所在をまた1から探し直した。

「……あの男、なんだか胡散臭かったわ。何か、別の目的があるみたい」

？おれも同意見だった。「スポンサー」系統の匂いがする。そう考えたとき、ピースが繋がった。

「……十師族の破壊、だ」

「え？」

「閣下は魔法師社会の刷新を目的としていたんだ……。四葉はスポンサーの目論見通り、在野に散らばった」

？魔法テロを通じて、魔法師の排斥運動を押し進める。そして、その混乱の中で生き残るのは……強い魔法師だけ。それを再び、スポンサーが拾い上げるのだ。

「要は、おれは今でもアイツらに踊らされていたってことだな」



「やはり、一条の話に乗るべきだったか。おれは舌打ちをする。でも、それはそれで何かが違う。」

「スポンサーって？ ヨツバとは違うの？」

「四葉家の”スポンサー”というとき。その殆どが、古式魔法の系譜だ」

「強い魔法師を作り出すには、遺伝子工学を基にした「交配」による開発が早い。故に、魔法技能師開発研究所が稼働したのだ。けれど、昔は——今も遺伝子操作は忌避されている。古式魔法の大家は「穢れ」を内に取り込むことこそ忌避したが、それでも手元に戦力を置きたがった。それが「第四研」のはじまりだ。」

「さっきの男……名字が東雲だったろ。あれは、四葉家の素体を出している家系だ」

「武倉家に送り込まれていた辺り、瑠綺は本家の人間ではなさそう。監視役、あるいはは作業員。遮音フィールドを無効にするといった、諜報のスキルを持っていたことから分かる。FEHRから四葉家に移ったというより、あの国で調査をしていたとみるべきだろう。」

「そして、理澄がおれの動きを鈍らせたかった訳だ。彼は、あの家を心から愛していた。それゆえ、四の「終わり」を誰よりも恐れたのだ。四葉家の崩壊は、すぐそばにあったのだから。」

「でも……そんな人がなぜ、ヨルヒサに情報を？」

「そう、それが謎なんだ。おれに止めさせたかったのか？」

「カン・フェールの素性、進人類フロントの野望。教えてもらえなければ、知ることも無かった。」

「——違う。カンを暴走させたのは……おれだ！」

「記憶改竄の際、適当に嘘の記憶を差し込んだ。構成員の過激な思想を宥めていたシーン——それを確か、彼が意見に同調していたことへ書き換えた。だから、進人類フロントは暴走している。」

「今なら、意味が分かる——瑠綺は礼を言いに来たのだ。「思い通りに動いてくれて、ありがとう」と。」

「……どうしよう。おれ……」

「蒼い顔で、リーナに縋り付く。彼女はまだ、この状況がよく分

かかっていないようだった。「どうしたの?」と言わんばかりの、優しい顔でおれを抱きとめた。

「……どこへも逃げられてない」

? 自由になりたかっただけなのに。自分の力で、社会へ飛び出したかっただけなのに。どうして、世界は何度も「間違いだった」と突きつけるのか。

? 部屋が急に暗くなった。一拍置いて、アラームが鳴り響く。無機質なブザー音は、何も答えを教えてはくれない。

?

## 絶望のはじまり

?リーナは、おれを長いこと抱きしめはしなかった。なぜなら、部屋に異変が現れたから。ガスが流れ込んだ気配をおれよりも先に感知し、CADに手を伸ばしたのだ。

?灰色をした靄のようなものは、不自然な位置で留まる。粒子の大きい気体を通さない障壁のせいで、広がり切らなかったのだ。

「……睡眠系ね。人体に害は無いけれど、体に入ったら一発だわ。対魔法師用に開発された特殊ガスかしら? それなら、どうしてこんなものが……」

?ガスの正体に気づいたリーナが、不思議そうに首を傾げた。

「このタイプは、粘度が高くて中々飛散しないの。ずつと障壁を張るのも面倒だし、早く移動した方がいいわ。——歩ける?」

「うん……」

?手を引かれて、おれは渋々歩き出した。本当はもう動きたくなかったけれど、そういう訳にもいかないのは分かる。リーナは「仮装行列」を発動し、自身とおれの位置をずらし始めた。

「別にそこまでしなくても良くないか」

「この先で、何があるか分からないじゃない」

?おれの意見を一蹴し、リーナは慎重な足取りで進んでいく。こういう言動を見ると、本当に軍人だったんだなと思う。「アンジー・シリウスはもう死んだ」と彼女はよく嘯くが、染み付いた習慣は未だ離れないのだ。

「さっさと脱出しましょ。テロに巻き込まれた時って、災害と違って危険手当とか付くのかしら……? 賃金規定に書いてあった?」

「知らん。そんなの見てない」

「ヨルヒサは、もう少しそういうことを気にした方が良いと思うわ」

?呆れたような顔をし、リーナはおれを嗜めた。

?意外にも、彼女は細かいことを気にするタイプだ。とはいえ、何でも切羽詰まってから気づく——ツメが甘いのは変わりないので、どっちもどっちな気がする。まあ、要は似たもの同士ということだ。

「——!?!」

?あと少しで地上だ、という時。階段の途中でおれ達は足を止めた。ある人物が行く手を阻んでいたから。

「カン・フェール……」

「眠つてくれたならば、説明する手間が省けたのですがね。ですが、ここまで来たのです……。是非、我々の理念を聞いて頂きたい」

?カンは大袈裟に両手を広げ、芝居掛かった口調で話し始めた。こちらの反応など、お構い無しである。

「——魔法師は、理解のない非魔法師に虐げられている。謂れのない迫害を受けながらも、魔法師達は国外の脅威からこの国を守っているというのに。国防軍だけでは、もはや戦力を維持できないからだ。戦闘義務もない一般魔法師の『協力』を評価せず、経済的・社会的に追い詰めているのは許されることではない!」

?彼が熱く語るそれは、魔法師社会の現実だった。コミュニティに所属しないと、魔法師は生きることすら非常に難しい。

?おれやリーナだって、騙し騙し生きているだけだ。亜貿社の不透明な資金の流れを嗅ぎ付けられたら、捕まらない為にも逃げ出さねばならない。おれの魔法で追手の記憶を弄り続ければ、長い間潜伏は可能だろう。逆に……だからこそ、罪は重なり続ける。

「だからこそ、魔法力の有無で国民を二層に分ける必要がある! ナンバーズに限定された特権を、全ての魔法師達に!」

「……その『魔法師の為の社会』で、エクストラの魔法は何の役に立つ?」

?気持ち良く話していたカンが、おれの言葉で黙りこんだ。鋭い視線が、真っ直ぐこちらを射貫く。

「——馬鹿にするなっ! 自分の魔法は……」

「他魔法師の演算領域に干渉し、魔法を使うよう誘導する魔法。通常のマルチキャストと違うのは、複数の魔法を別々の演算領域で処理できる点。それによって、威力は大幅に上昇する」

「そっ、そうだ! だから……」

「ソーサリー・ブースターで十分じゃないか、そんなもの。それなりに

使える魔法師を催眠状態にするより、D・E級レベルの魔法師をバラして機械にする方がマシだ」

「……！」

？おそらく、彼は人生でこのようなことを何度も言われ続けてきたのだろう。だって、本当に有用な魔法ならば、それなりに普通な人生を送れている筈である。

？意味の無い魔法だからこそ、理解されない。それなのに、自分の魔法を使いたくて仕方ない。生まれ持った才能を、誰かに評価してほしいだけなのだ。社会に、同世代に、お母様に。

「……だが、そもそも、お前の願いは叶わないぜ」

「何故だ？」

？怪訝な顔で、彼はそう尋ねてきた。しかし、その言葉を発した途端、フリーズしたかのように動きが止まる。

「——そこまです」

？スポンサーの手先であり、四葉家素体・古式系の魔法師……東雲瑠綺が立っていた。CADを手にしており、何かしらの方法で彼を止めたのは明らかだ。

「意外と聡い方だったんですね、夜久様は。てっきり、我々に乗っかって大暴れして下さると思っていたのですが」

「お前……」

「まあ、どちらでも良いんですが。既に外では構成員と警官隊が交戦中です。『魔法師の起こした史上最悪の事件』として、歴史に残るのは確定しています」

「さつきから、一体どういうことなの？ ワタシ達は何に巻き込まれていて……こんなことに？ 魔法師がそれなりに受け入れられる社会の、何がダメだったというの？ 貴方だって、魔法師でしょう？」

？訳がわからない、と言わんばかりのリーナ。

？それはそうだろう。だって、スポンサーの目的は従来の魔法師増産計画に真っ向から突っかかるもの。国際情勢も無視した、狂つているとも言えるアイデア。

「コイツらはな……魔法師を『飼いたい』んだよ。だから、人間扱います」

る訳にはいかないんだ」

？ 魔法師が、魔法師と非魔法師を管理する社会。

？ 以前——東道青波と共におれは、そのような題目で「十師族の破壊」を目論んでいた。あの頃のおれは分からなかったけれど、最終目標は「古式魔法師の復権」であったのだ。

？ 十師族のルーツは、研究所のモルモット。先祖を辿れば、多かれ少なかれ遺伝子を操作されている。スポンサーの彼らは、そんな人間を排除することが目的だった。四葉という飼い犬を使って。

「そんな、そんなことって……」

「当たり前だろ」

？ リーナの言葉を、瑠綺は遮った。先程と口調も変わっている。

「遺伝子操作？ 受精卵の調整？ デザイナーベイビー？ 人の手によつて作られたものが、”我々”のような純粋な人間と同じ訳がない」

？ さも当然のように言い放つ様子を見て、リーナがギュツとおれの手を握った。おれも握り返してやる。

「……それがお前の本性かよ」

「嫌悪感もまた、人間らしい感情だよ。普段は押し殺していたけどね。」

——改めて、自己紹介しよう。東雲は母方の名で……本当の名字は『十六夜』。もう分かるだろう？」

「百家最強の魔法師……十六夜家か」

？ 十六夜家。伝統ある古式魔法の名家だが、現代魔法を積極的に取り入れることで強化を図った家だ。十師族を頂点とする魔法師管理システムに最後まで異を唱えた家でもあり、調整体や数字落ちに対する差別運動の最右翼でもあった。

「ナンバーズだなんて、そもそも後付け。元より数字が名前にあつただけなのに、研究所の開発番号と混同されてしまった。百家だなんて、嬉しくもなんともない称号だ」

「てつきり、東雲の分家だと思っていたぜ。理澄の下についてたんだろ？」

「武倉理澄については、監視しなければならなかったのさ。アレが動

くせいで、破滅的な四葉が安定志向に進みそうになっていたからな」  
？魔法も厄介だったし死んでくれてよかった、と彼は呟く。

？確かに「ワルキューレ」は、ただ一点「人を殺す」という点では  
屈指の性能を誇っていた。だからこそ、四葉分家の希望であったの  
だ。

「……」

？理澄を自死に追い込むことで、凶らずともスポンサーの追い風へ  
となっていた。何とも、やってられない気分だ。

「——お前らが進人類フロントの代表者か？」

？急に別の声が割り込んだ。

？振り返ると、そこには2人の魔法師が。おれは、彼らのことをよ  
く知っていた。

「司波達也……。それに、司波深雪」

「意外なところで再会したな。津久葉夜久、お前が首魁か？」

「いいや？ リーダーはそこにいるコイツさ」

？おれは未だ固まったままの男——カン・フェールを蹴り飛ばし、  
達也の側へと移動させた。彼は少し屈んで、左手を軽く翳す。

「……死んでいる。心臓が止まったのか」

？どうやら、瑠綺は普通に殺していたらしい。数字落ちのことな  
ど、本当に人間と思っていないのだろう。

「まあ、いい。この男のエイドスで大体のことは分かった。今回の事  
件は、お前がこの男の記憶を書き換えたことが理由にあるようだ」

？深雪を危険に巻き込んだんだ。それ相応の落とし前は付けても  
らう……。彼はそう続け、特化型CADの銃口をこちらへと向けた。  
引き金が引かれ——。

「——は、？」

？達也が一瞬、呆けたような顔をした。魔法が発動した、という手  
応えが無かったのだろう。リーナの「仮装行列」が、「分解」の照準を  
ずらしたのである。

？おれはそのチャンスを見逃さなかった。彼らの魔法演算領域に  
干渉する。常時動かしている魔法だから、すぐにリンクは可能だっ

た。

?つまり、「誓約」の魔法式の出力を上げて、演算能力を大幅に縮小させたのだ。少なくとも、人体を消滅せしめる威力は出せない。

「……貴様！」

?憎しみの籠った声で唸る達也。おれは無視して走り出す。

?時間があれば、「マギ・インテルフェクトル」を使いたかった。けれど、照準を合わせるのは時間が掛かるし骨が折れる。隙を見せるのは憚られた。

「リーナ、逃げるぞ！」

?自己加速術式を掛けて逃げる。這う這うの体で、地上まで上がっていく。

?冷気がすぐそばまでやってきていた。深雪の魔法力は高い。ロックを掛けてやっても、AとB級魔法師レベル。気を抜けば、氷点下の世界に呑み込まれるだろう。情報強化と領域干渉を目一杯掛けて、必死に出口まで走った。

?

「——お前も付いてきてんじゃねえよ！」

?リーナとおれが逃げる横で、何故か瑠綺も追いついてきた。

「そんなこと言ってる場合じゃないだろ！」

「テメエらが撒いた種だろうが！ 肉壁になるくらいの気概を持って！」

「いいのか? この後、絶対にお前らは俺に礼をいう筈だがな！」

「どういうことだ!?!」

?瑠綺はポケットから呪符を取り出し、祝詞らしき言葉を唱え始めた。

「……ビルを折るために用意していた仕掛けだ。数ヶ月前から、事前に大規模結界を張っていた！」

?その瞬間、大地が大きく揺れた。日本でよく見られる災害の一つ——地震だ。瓦礫が崩れ落ちて、先程までいた場所が様変わりする。

?ところが、一步遅かった。達也は深雪を庇いながらも、既に地上



へと飛び出してきていた。

「間に合わなかったか」

？ 瑠綺が舌打ちする。

？ 今の達也は、魔法を満足に使えないはず。純粋な体術のみで対処したのか。

「……古式武術の一つ、『縮地法』だ」

？ 聞いてもないのに、ご丁寧にも使った技術を教えてくれる達也。いや、教えたくなるほどにおれ達が啞然とした顔をしていたのか。分からない。

？ けれども、おれはすぐ冷静になった。何とかしなければいけないと、「マギ・インテルフェクトル」を”CADで”発動した。

「——!？」

？ 起動式が、砕け散る。想子の奔流に掻き消されたのだ。

「使うだろうと思っていたさ」

？ 坦々とした声で、達也はおれにそう言った。

「どんなに強力な魔法であろうと、起動式の露出は避けられない。現代魔法師は、そのルールに縛られている」

「そうだな。だが、それを回避する方法もあるぜ」

？ おれはCADでの発動と並行して、魔法式の構築を行なっていた。もうそろそろ発動できるだろう。

「ああ、自力で魔法式を組み立てることだ。でも——無意味だろうか？」

「は？」

「このフィールドでは、深雪が領域干渉を敷いている。故に、魔法そのものが存在できない」

？ 笑いたくなくなった。彼は、勘違いをしている。自分の妹が、兄を信頼している故のミスがあるというのに。

？ 確かに、深雪は今持ち得る全てのリソースを領域干渉に割いている。息も絶え絶えで、今にも倒れそうな顔。それでも、CADに手を添え続けている。覚悟を背負ったそのパワーを前に、リーナですら魔法を抑えられていた。

「そうはいかないぜ！ 残念だったな！」

？おれの得意魔法が、達也の無意識領域と意識領域を分断する。ルートを魔法式が通ることが不可能になり、イデアへ投影することが出来なくなる——実質的に、魔法師は魔法師でなくなるのだ。

「何故……？」

「お前の妹は、無意識のうちに……領域干渉の選択から外していたんだ」

？達也が魔法を使えなくならないよう、普段から深雪は気をつけていたのだろう。今、それが仇となった。

「あ、あぁっ……！ 私、なんてこと……」

？深雪の顔が絶望に染め上げられた。事実には耐えられなくなったのか、彼女はヨロヨロと地面へ膝をつく。

「深雪！ ……深雪！」

？達也が慌てて駆け寄り、妹の名を何度も呼んで身体を揺すった。おれ達はそれを尻目に、その場を去る。長居は無用だった。

？タワー近くにいる警官隊などにバレないよう、認識障害を使って脱出する。いつのまにか、瑠綺は居なくなっていた。

「ねえ、ヨルヒサ……ワタシ達、どうすれば良いのかしら。魔法師を貶めようとする相手もまた、魔法師だなんて……」

？帰り道。夕食を買って帰る道中、リーナがおれに尋ねてきた。

「……おれも、まだどうしたらいいか分からない。けど、一つだけ言えることがあるぜ」

「なに？」

「なんか、大丈夫な気がするんだよな。今のおれは一人じゃないから」  
？彼女は微笑み、「そうね」と言う。

？もう日が沈みそうだ。どちらか言い出すでもなく、家まで早足で進む。

？そして、その裏で……魔法師排斥運動は加速していく。東京オフシヨアタワー崩壊は始まりに過ぎなかったのだ。

## 罪を数えて生きろ

? 数日後。深雪は、達也の魔法科高校退学手続きを代理で行っていた。もちろん、兄が嫌な思いをして欲しくないと思ったからである。

? 彼女は事務室を訪れ、職員に達也のIDカードを差し出す。あっさりとした態度でそれを受け取る職員。去年にあつた激動の出来事など、忘れてしまったかのよう。自分にとっては忘れることなど決してあり得ない兄の偉業も、他人だところんなものか……深雪は悲しくなった。

「――深雪っ!」

? 今日は、入学式の打ち合わせもしなければならぬ。仕事を投げ出す訳にはいかないけれど、なんだか気分が重かった。それでも、自分を奮い立たせて生徒会室へと向かう。

「雫……それに、ほのかも」

? 既に先客が居た。しかも、今一番会いたくない二人。案の定、彼女らは暗い顔で深雪に謝罪の言葉を述べた。

? とはいえ、これが初めてではない。数日前にも、雫の父親である北山潮を含めて、深雪達の下へ謝罪に訪れていた。

「本当にごめんなさい。私が達也さんを誘ったせいで、こんなことに……」

「待って! 私が達也さんに来て欲しくて、強引に誘ったから……責めるなら、私も!」

「……ううん、貴女達は悪くないの。少しもよ」

? 全て、私のせい。

? 深雪は誰かに懺悔したかった。でも、言える訳がない。四葉が消え去った今、逆に四葉の血縁を明かすことは危険だ。そんなことくらい、分かっていた。

? 自分の罪を数えてくれる人は、どこにもいない。達也すら、深雪を責めなかった。優しさが逆に、心に鋭く刺さる。

「だけど……」

「お兄様を哀れむのはよして。全てを失った訳じゃないのよ」

？夜久の「マギ・インテルフェクトル」は、人の無意識と意識の間にある領域を分断する魔法だ。つまり、事故などによる一般的な魔法技能喪失とは少し違う。

？だから、達也は未だに「精霊の眼」や想子を操る無系統魔法は使える。それどころか、「人造魔法師実験」の為に意識領域に後付けされた仮想魔法演算領域は健在。ルートを介さないまま、魔法式をエイドスに投影するからだ。

？要は、彼が魔法科高校を退学する必要は無かった。学校で「分解」や「再成」を使うことなんて稀なのだから。このまま魔法工学科に進んでも、支障なんてあるはずもない。けれども、そうしなかった。

「本当はね、お兄様は高校なんか通う必要無かったのよ。私が寂しいから、付いてきて欲しかったの」

？事実とは少し、違う。

？達也は妹の為に生きなければならなかっただけだ。「分解」と「再成」という魔法ゆえに。神の如き力を持ってしまったせいで、息苦しい生き方を強いられていた。

？けれども、それら無き今。達也を縛る必要はどこにもない。真の意味で、兄妹は互いに解放されたのだ。

「でもね、そろそろ……兄離れをする時期なのかも」

？それこそが、深雪から兄への精一杯の罪滅ぼしだ。

「実は……お兄様はね、魔法大学に飛び級するの」

「え？」

「どういうこと？」

？キョトン、とした顔をする雫とほのか。

「書き溜めていた論文を送ったら、すぐに入学許可が下りたそうよ。さすがは、お兄様だわ」

？自分に言い聞かせるように、深雪は二人に告げた。死すら超越する力が無くとも……敬愛すべき兄なのだ。

「すごいー！」

「達也さんって……ほんと、私達よりもいつも上を行くよね」

「ええ。だから……気にせず、仲良くしてね」

？深雪は二人に微笑みかけた。

？兄を解放した今、彼女は自分の生き方を見失っている。残された高校生活は、改めて自身を見つめ直すいい機会だ。そう思いつつ、新入生のデータを端末から引き出した。



？案の定と言うべきか、魔法師排斥運動は日に日に進んでいる。反魔法的な内容の記事は毎日のようにネットに出ている上、ワイドショーなどの番組も魔法師批判にシフト。

？挙げ句の果て、親魔法師派国会議員の収賄疑惑——七草家縁者から多額の献金を受けていたというニュースが世間を騒がしていた。

「——ですから！　すぐにでも七草家を糾弾すべきなんですよ！　一条先輩には、正義感つてものが無いんですか！」

「馬鹿！　疑惑の段階で抗議文を出してみろ！　もし事実でなかったら、大変なことになるんだぞ！」

「七草家ですよ！　絶対やっつてるに決まっています！」

？将輝に詰め寄るのは、師補十八家・七宝家長男である七宝琢磨。彼は三高への入学を予定しており、金沢まで引越してきていた。将輝も今まで面識こそ無かったものの、後輩になるのだからと積極的にサポートをしてやることにしたのだ。

？今日も将輝は自室に琢磨を招いて、高校で習う内容を先取りして教えてやっていた。

？七宝家の本拠地は都内近く。それなのに、琢磨が三高を受験した理由は夜久にあった。

？例の「七草家と正面切って戦い、第一高校を退学処分された」話を聞き、彼は色めきたった。自分も一高を入学してすぐ七草家に喧嘩を売ろう……そして、退学処分を受けよう——そんな風に彼は考えていた。

？息子のめちゃくちやなアイデアを聞き、七宝家当主の拓巳は流石に仰天。「それなら最初から三高に行け」と叱り付けたのであった。

「絶対、勝手に七草家宛の手紙とか送るなよ！ お前の親父さんから、『しつかり見張っておいてくれ』と頼まれてるんだからな！」

「……っ、親父が!？」

「当たり前だろ！ 入学前から一高退学を検討する息子、心配で仕方ないに決まってる!」

？将輝が琢磨の説得に骨を折っていた時、乱暴めなノックの音が。

「……将輝っ！ 大変なものを見つけたんだ！」

「吉祥寺先輩！」

「ジョージじゃないか。どうしたんだ？」

？血相変えて走り込んできたのは吉祥寺。ただならない親友の様子に、将輝も意識を切り替える。

「研究所に残っていた武倉の遺品を整理してたら……。こんなものが見つかったんだ」

「手紙？」

？吉祥寺の手には、白い封筒が。「第三高校のエース達へ 武倉理澄」と汚い丸文字で書かれている。この筆跡は、間違いなく理澄の書いた文字だ。

「武倉理澄って……。少し前に金沢で起きた魔法師によるテロでMIAした、あの人ですか？」

「ああ、実は四葉家縁者でな。アイツがいなくなるギリギリまで、知らなかったことだが」

「変わった奴だったけどね。よく学校も休んでたし。今考えれば、四葉の何かしらに関わっていたんだろう」

？将輝と吉祥寺は友人のことを回顧した。本音でぶつかることは最後まで無かったけれど、短い期間ながらも思い出は多く残っている。

「けど、その四葉も今はどうなっているのか」

「お家騒動があった、っていうのが専らの噂ですよ。本当なんですか？」

「ああ、お前は知らなかったか。せつかくだし……」

？夜久は四葉真夜の息子であること。そして、それによって四葉家の継承を発端とした何がしかの問題が起き、崩壊が起きたのだろう。そんな推測を将輝は琢磨に語る。

「……けれど、崩壊って言ったって。四葉家を継ぐことができる人は誰もいないんですか？」

「実際、やろうとしたさ。けれど、圧力がかかった……」

「圧力？」

「親父が言うにはな。詳細は知らん」

？将輝は話しつつ、手紙の封を破って開けた。吉祥寺と琢磨が横から覗き込む。

「これは……」

「武倉が研究してた『魔法式構造のパターンと変則』に関連するものだ。基本コードの研究を進める為に、アイツは魔法式記述の酷似する部分をAIで自動認識させるシステムを作っていたんだ」

「そんなことできるんですか？」

「従来は無理だった。魔法式の文法は変則が多くて、似てる部分なんて殆ど無いから。基本コードが中々見つからない理由も、それだったんだけど……」

？理澄の開発したシステムは、大雑把に似ている部分を集めて効果を逐一確かめ、それらをカテゴリ分けすることで作成したものだ。

？四系統八種全てを網羅することはまだできていないが、「加速・加重」「収束・発散」といった比較的単純な魔法は同システムで解析可能であった。

「いわば、基となる魔法式の共通部分を自動認識して、スーパーコンピュータで変数を書き込む。エイドス上で処理されたそれを、魔法演算領域で一部待機させて『ループ・キャスト』で連続して発動させる。それによって、単純な魔法でも出力を飛躍的に上昇させることができる……」

「待てよ？ 『ループ・キャスト』ってフォア・リリース・テクノロジーの秘匿技術じゃないのか？ それをどうして……あっ！」

? 文面に目を通すと、「四葉にデータが置いてあったからパクった」  
との記述が。

「四葉が盗んだのか……」

「あるいは、実はFLTが四葉傘下か」

「でも、あそこも大量の変死体が出たとかいう噂ありましたよね?  
あり得る話じゃないですか?」

? 仮にFLTが四葉の関連企業なのであれば、何か第四研に繋がる  
研究データを入手することができるかもしれない——「死」の魔法師  
工場とまで呼ばれた、魔法技能師開発第四研究所。機密性が高いとい  
う理由で、未だ一切情報が明かされていない。

? 少年らしい好奇心を刺激され、3人は顔を見合わせて頷き合っ  
た。



「……忖度するだろうから、逮捕とかは無いだろうな。だが、そのせいで更に炎上する」

? 十師族・七草家の収賄疑惑。十中八九、事実だろう。とはいえ、何  
とか有耶無耶にする筈だ。少々無理があろうとも、十師族ならできて  
しまう。

? 寝転びながら端末で情報サイトを見ていると、隣で寝ていたリー  
ナが何かを思い出したように言った。

「ナッツが言っていたわ。親魔法師派の議員を暗殺してくれ、って依  
頼が相次いでいるって。断ってるらしいけど」

「断っている、ということとは……昔からの取引相手ではないのか?」  
「素人も素人、完全な一般人。どこかから噂を仕入れて、ネット経由で  
依頼してくるの」

? それは、なかなか興味深い話だった。

? 魔法師に対する反感がかなり伝播しているということ。けれど



も、魔法師そのものに対する恐怖は未だあるということ。これらが、「殺し屋に依頼する一般人」というアンバランスな事態を生んでいる。「正義感、なのかね?」

「そうでしょうね。歪んでいるけど」

「亜貿社みたいな裏社会でもマトモな所は、まあ動かないだろうが。けど、魔法関係者殺しを請けるのも出てくるんじゃないか?」

「?今までの勢力図を無視して、殺し屋稼業に参入してくる団体が増えそうである。何なら、魔法師による魔法師殺しも。」

「あとは、素人に武器を売る人間とか? どんどん治安が悪くなっていくわね。——でも、日本国内でこんなことしてて……大丈夫なのかしら? 他国に付け入る隙を与えるんじゃないの? そうなったら、あちらも困るんじゃないかしら」

「?お前が言うか、というツツコミを入れたくなかったが、その言葉の代わりに説明をしてやることにした。」

「策はあるんだろう。アイツら、手だけは長いからな。『妖』を海外に放つたりするんじゃないか」

「アヤカシ? デーモンとか……ゴーストとか、そんなののこと?」

「あっちにもエクソシストくらいいるわよ。どうしようもなければ、スターズも協力要請くらいするんじゃない」

「デーモンを祓うエクソシストか。現代魔法学で考えれば、似たようなカテゴリに分類されるだろうけど……古式系の厄介なところは、『約束』の存在だ。ルールを知っていれば単純なシステムも、分からないきやどうしようもない」

「?要は、伝承を理解していなくてはならないということ。そうだな」と、余計に拗れる場合が多いだろう。しかも、派閥が多く分散しているので判断が非常に難しい。」

「?他のアプローチ——例えば、現代魔法でも対抗できないことはないが、それも一握りの強力な魔法師のみだ。」

「詳しいのね。意外」

「四葉時代は、スポンサー側に付いていたからな。それなりに事情は知ってる」

「？おれを嫌うお母様に代わり、四葉家内の立ち位置を東道青波が保証してくれていた。一族内の不和を抑える必要性があったのもそうだが、自分のルーツにも理由があった。」

「？不安定な冷凍卵子の受精率を上げる為か、精子はナチュラルなもの——十六夜家縁者の精子を使用したらしい。この家だけは、先祖を遡っても遺伝子操作の例が一度も無いからだ。」

「？つまるところ——おれには、十六夜の血も流れている。」

「その、スポンサーっていうのは一体何？ ずっと気になってるのよ」「正式名称は、『元老院』。人ならざるモノを封印・管理する集団だ。その特殊性ゆえに表に出ることは無いが、一部の権力者とは密接に結びついている。いわば、裏の支配者という感じだな」

「……アニメの設定みたいだわ」

「？リーナが苦笑いする。確かに、話だけ聞けばそう思うのも当然だ。」

「そういう奴らだからこそ、政治工作は十師族なんかよりも上手い。現代魔法師の奴隷化もすぐそこまで迫ってるな」

「？おれはそう言いつつ、近くにあった袋に手を伸ばした。昼食代わりのポテトチップスが入っていたはずだ。」

「言ってることの割に、呑気ね」

「未だ利用されてたのは癪だが、こうなればどうしようもないからな」「自衛するしか無い、ってことね」

「一番良いのは、スポンサー側につくことだけだな」

「？ポテトチップスを口に放り込む。人工的な味わいが舌先を刺激する。」

「どういうこと？ ヨルヒサも聞いたじゃない。あの男の言葉……」

「十六夜瑠綺の奴は、過激なことを言っていたが……魔法師管理の締め付け具合は、派閥によってバラバラの筈だ。多分、アイツは櫛和派の人間だろう」

「？元老院のシステムには、四大老というものがある。簡単に言えば代表者で、発言権が特別強い4つ家の当主が担う。」

「？その一人である東道青波がおれに協力していたのは、十六夜家を

子飼いとすゝる櫛和主鷹に対抗する為。歴史は浅いものの強力な魔法師である四葉と、血統が長く続いている十六夜。その両方の血を継ぐもの。おれの存在は、彼にとって都合が良かったのだろうか。

？古式魔法師の復権が叶った後、四大老の誰が主導権を握るのか——結局は、政治の話なのだ。

「だから、葉山さんがおれを呼び戻そうとしてるんだ。ただ……お母様に会うのもなあ」

？手についた粉を舐め取り、おれはため息をつく。

「——本当に、それでいいの？」

「え？」

？思いもよらぬ言葉に、おれは固まらざるを得なかった。

「このまま、成り行きに任せるだけで……いいの？」

？返事に詰まってしまったおれを見つめ、リーナは真剣な表情で言葉を重ねた。

？何だかずるい、と思う。何も分からなさそうな顔をして、おれが本当にやらなきゃいけないことを教えてくる。

「魔法をお母さんに褒めて貰いたいでしょ？ その為に、ヨルヒサはこんな世界で諦めずに生きているんじゃないの？」

？だって、ワタシ達って死んだ方が楽じゃない——彼女はあっけらかんと言いつつ放った。

「うん……だけど、おれのことを忘れてる」

「でも、貴方のお母さんに変わりは無いじゃない。今みたいに逃げて、逃げて……それでいいの？ 向き合う勇気が無いからって」

？黙り込んだまま、おれは宙を睨む。

？やるべきことは、もう分かっていた。こんなことをしていても仕方ない、ということくらい理解できる。

？もはや、一歩前に踏み出すしかないのだ。

君のために此処にいる

？わたしの名前は四葉真夜。

？十師族・四葉家の一員なんだけど……その四葉家はもう「存在しない」よう。詳細はよく分からない。だって、知らないうちに遠い未来に来てしまったから。姿見でみる自分も、シックなデザインのドレスが似合う大人だ。どうしてだろう。

？周りの環境だって、何もかも変わっている。葉山さんはもうおじいちゃん。それに、動画で見た弘一さんは、もはや知らない人みたいに見た目が違う。変なサングラスを掛けたおじさんだ。

「……姉様は、今日も目が覚めないのね」

？マグカップに並々注いで貰った紅茶を飲みながら（マナー違反は承知の上。でも、一気にたくさん飲みたいのだ！）、わたしはそう呟いた。

？今の生活になつてから、周りの人間は口うるさくない。次期当主にふさわしい振る舞いを、とかも言わないから、毎日のびのび楽しく過ごせている。けれども、やっぱり姉様とお喋りしたい。病氣らしいけど、早く治ってほしいな。

「しかし、これでも安定しているのですよ。真夜様が、毎日お声を掛けられるようになってからは」

「そうなの？ やっぱり不思議だわ。仲違いしてただなんて」

？前の「わたし」は、どうやら姉様の距離を置いていたのだそう。そんなの信じられない。わたしは姉様が大好きだし、姉様だってわたしのことが大好きな筈なのに。

「ちよつとした……ボタンの掛け違いのようなものですよ。けれども、時は遡りました。やり直すことくらい、容易いものでしょう」

？葉山さんは何だか意味ありげなことを言いながらも、お皿にクッキーをたくさん盛ってくれた。アーモンドクッキーだ。

「あれ？ 量が多いわね。わたし、こんなには食べられないわよ」

「いえ、今日はお客様がいらっしやるのですよ。貴女に会いたい、という方が」

?いつもにも増してニコニコしている。ここまでご機嫌なことは珍しい。良くも悪くも、フラットな性格だから。

「ふーん……。誰なの?」

「それは会ったのお楽しみということ——おや、いらしたようですね」

?扉が開く。現れたのは、男の子だった。

?センター分けの髪は、烏の濡羽みたいな黒。右目の下には涙ぼくろがある。そして、驚くべきことに姉様にそっくり——つまり、わたしにも似ているということだ。

?彼はわたしをみて、一瞬だけ泣きそうな顔をした。唇をわずかに震わせ、彼は口を開く。

「はじめまして。おれの名前は……四葉夜久です」

「……夜久様は、四葉家唯一の生き残り。そう表現するのが”今”は正解でしょうか」

?葉山さんが彼の背を押し、わたしの向かいにある椅子に座らせた。

「……」

「、……」

?沈黙が続く。ティーカップ越しにチラリと前を見るけど、彼はずうっと押し黙ったまま。頼みの綱の葉山さんといえば、「ごゆっくり」と笑顔で部屋を出て行った。

「あの……貴方って、わたしの弟になるのかしら?」

?無言の時間に耐えかねて、おずおずと話を切り出す。

「……弟?」

「えっ、あ……わたしと顔がそっくりだし、『四葉家最後の』って聞いたし……。年下だし……」

?どうしたらいいか分からなくなり、とにかく頭の中にあることを捲し立てる。話しているのは自分なのに、どんどん混乱してしまう。「それに、姉様が起きてくれなくて寂しいから……きょうだいがいってくれたらいいなって」

「——いいですよ」

「えっ!? いいの?」

?夜久は、ようやく薄い微笑みを浮かべて頷いた。怒ってないんだ、と思つてホツとする。

「……よろしくね。姉さん」

「うん。よろしくね、夜久」

?アーモンドクッキーを摘む。そして、彼のお皿に入れてあげた。

「食べましょ? お話したいことも……たくさんあるわ」

「うん!」

?久しぶりに、楽しい時間が過ぎせそうだ。胸が弾む。ここに姉様も早く混ざって欲しいな……とわたしは思った。



「へー。『弟』になっちゃつたの」

?リーナがニヤニヤした顔で、こちらを揶揄う。面白がっているのは明白だ。おれは苦し紛れの反論を吐き出す。

「……だって、仕方ないだろ? 向こうはおれのことを覚えていないんだぜ。いきなり息子ですつてなつても」

「それもそうね。で、魔法は褒めてもらえたの?」

?ぐ、とおれは言葉に詰まる。最も聞いて欲しくない質問だった。

「……ちやつた」

「なんて?」

「拗ねちゃつたんだよ、お母様」

「どうしてよ」

?おれはため息をつき、リーナに向き直る。

「伯母様とお揃いだから」

「ああー……」

?手を額に当て、唸るリーナ。海外ドラマのワンシーンのようだ。「まあ、でも……良かったじゃない、一応」

「お母様がおれを見た、という点ではな。けど、おれ達がスポンサー側についたそもその理由を覚えているか？」

「えっと、何だっけ？」

「？おれはため息をついた。肝心なことを忘れていた彼女のポンコツさに少々呆れてしまう。」

「古式魔法師がのさばるのを何とかしなくちゃいけないだろ？ それで、内部から何とかしようって話だ。おれもお前も、お母様も現代魔法師なんだから」

「ヨルヒサはそういうオカルト魔法師じゃないの？ 血筋がどうこうって言ってたじゃない」

「古式魔法なんて一つも使えないぞ？」

「？十六夜の血を引いているのはその通りだ。けれども、古式系の術なんて教えられていないので使えるわけがない。」

「？それに、四葉……特に本家はCADを使用した魔法を優先して習得する。戦闘魔法師として育てられてもいないから、四葉の戦闘訓練も大して受けていないけれど。」

「使えないんだ」

「ああ、使えない。だがな……」

「？指先で、自分の頭を軽く叩く。頼りないようで、今のところ「これ」が一番の武器だ。」

「古式系の伝承やルール……それは知っている。このことは、古式魔法師に対する大きなアドバンテージとなり得るぜ」

「？フアジイさが古式魔法の肝だ。不可解で不明瞭であればあるほど、強さが増幅されてゆく。逆に、「分かって」いれば然程問題ではない。」

「なるほど……。けど、ヨルヒサって賢かったのね。魔法理論とか、苦手そうだと思うってた」

「……忘れられないんだよ。脳に焼き付けられたものは」

「？四葉家の研究ノウハウやレポート、メモに至るまで……全てを幼少期に植え付けられた。「精神構造干渉」を持つおれは、精神の真髄を研究する為に不可欠な存在だったのだ。研究に投入しないという選

択肢はない。しかし、のんびり教えている暇も無いわけで。だから、無理矢理覚えさせた。それだけのことだ。

「だから、おれの存在こそが第四研のバックアップという訳だ。でも、完全じゃない」

「？そう言いつつ、おれは移動系魔法で重たい金属製扉を退けた。瓦礫が多いので、動くだけで一苦労である。」

「？今のおれ達は、廃墟探索をしていた。FLTの旧研究施設を彷徨っている。旧、の訳は分家の人間らが最期の嫌がらせとばかりに破壊しまくったからである。分家はロクなやつがいなかった。」

「ここにそれがあるっていうの？」

「分家の研究データが残っている可能性がある」

「？四葉分家は、独自に研究員を雇って何かしらやっていた。純粋な研究が目的というよりかは、技術の活用から利益を確保する方が重要視されていたようだが。」

「それを探し出すのが、何かの役に立つの？」

「見てみないと分かん。無いよりは——」

「？おれはそこで言葉を切る。いや、切らねばならなかった。不意に、鈍痛が身体中を走った。脂汗を流しながらも、CADに指を走らせる。」

「リーナ、想子ウォール！」

「？そう叫びつつ、自分も魔法を発動する——精神干渉魔法「脳内麻薬」。読んで字のごとく、脳内に多幸福感をもたらす魔法。そして、これは「ダイレクト・ペイン」の痛みを紛らわせるのに一番有用な魔法であった。」

「(……黒羽の双子が、なぜこんな所に?)」

「？電気もついていないので暗い中だったが、羽根のようなものが途中で勢いを失って落ちてゆくのが見えた。リーナの領域干渉が阻んだのか。」

「ぐっ……、かはっ！」

「？腹部に圧迫感。何者かに殴られた。痛みは魔法で紛らわせているが、衝撃は直にやってくる。その勢いそのまま押し切られ、はつきり



言ってこちらは劣勢だ。

「ヨルヒサ！　つて、ああ！もう！」

？あちらも自分のことで手一杯のようだった。「ダイレクト・ペイン」による痛みのせいで、十全のパフォーマンスができていないのだろう。彼女は、敵から飛ばされるコンクリート片などを必死で躲していた。

「クソ……」

？この痛みの中では、「マギ・インテルフェクトル」を冷静に使えない。あれは意外と集中力を必要とするのだ。しかも、今は「脳内麻薬」を連続発動している。それでも痛いのだ。

「……お前だけは絶対許さない」

？目の前の相手——黒羽文弥は静かにそう言った。

「なるほど。兄貴分の敵討ちつてか？」

「——違うっ！　僕はお前を殺すつもりはない」

？鈍痛が更に強くなった。こちらも「脳内麻薬」を増幅させて耐える。

「ただ……もう僕たちはどうしていいか分からないんだ」

？文弥は涙を流していた。見れば、その横の少女——亜夜子も襲れた顔をしている。着ている衣服も昔見たような派手な服装でもなく、量販店で買ったような安物のトレーナーとジーンズであった。

「新発田さんの好意で、六塚に移ることになっていただけだね。移動途中で襲撃された。どこかから漏れたんだろう。……ガーディアンも死んだ」

？いくら四葉の魔法師とはいえ、多数の魔法師に囲まれば厳しい。言う言うの体で逃げ出し、今に至るのだという。

？そうなると、新発田勝成が怪しいのではないか。自分達が安全に逃げ出せるよう、双子を利用した可能性もある。実際のところは分からないが。少なくとも、文弥も亜夜子もその線を疑ってはいるのだろう。だからこそ、自分達だけで六塚の管理領域に行かなかった。そういうことだ。

「……ここに残ってた研究データは他の奴が持ってたよ。僕らは

黙ってそれを見てた。もう、どうでも良かったからね——殺したいなら、殺せば?」

「死にたいのか?」

「ううん、別に。生きたいよ、今でも。ただ、諦めてるだけ」

?その表情に、あの日の理澄がよぎった。

?彼もそうだったのだろう。人はあまりにも弱い。全てを失ってしまったえば、生きる希望を見出すことはできないのだ。

「……つまんね」

?両手をあげて、降参のポーズをする。「脳内麻薬」だけは維持しているが。

?文弥の眉が吊り上がる。怒りからか、小刻みに震えている。おれを睨みつけ、彼は怒気を孕んだ声で叫ぶ。

「つまらないって何だよ! 勝手なこと言いやがって!」

「そうとしか言いよう無いだろ」

「……そうだよ、僕たちはつまらない人生を生きてた。大人に言われるまま、人を殺してきただけだ。……別に今だって、罪の意識とか無い。でも、そのことを『異常』だと世間はきつと扱う。何も変わってない筈なのに」

?ほぼ洗脳に近いものだったとしても……人を殺せば、罪人に変わりはない。それを赦してくれるのは、四葉だけだった。身内を愛する限り、彼らは「正常」でいれたのだ。

?世間と隔絶していた本家とは違い、分家はそれなりに社会と関わっていた。それ故に、常識とのギャップに悩まされたのだろう。今なら、「正気に戻ったら、耐えられる訳がない!」と叫んだ奴の気持ちも分かる。

「まあ、悪かったなとは思うよ。『おれを肯定してくれる居場所じゃなかった』って理由で、四葉をめちやくちやにしたことはな」

「いや、正しかったんだよ。あんな家、成立しちやいけなかった。だけど……」

?そこからは、言葉にならなかった。文弥は崩れ落ちるように、床に倒れたからだ。気力だけで保っていたのだろう。

「文弥っ！」

？今の今までリーナと交戦してた亜夜子が、弟の身を案じ、攻撃の手を止めた。もちろん、彼女はリーナの手によって拘束される。

「苦戦させられたわ。身体も痛いし……。——何か、言いたいことがある？」

「……文弥だけは助けてあげて」

？そう言くと、彼女は俯いた。弟思いの姉なのだ。

「一つ、聞いてもいいか？ データを取りに来た奴がいたって話。あれ、誰だ？」

「……おそらく、一条家でしようね。一条将輝が居たもの」

「アイツかよ……」

？カツコつけて決別したのに「くれ」とは言いづらい。舌打ちをしなくなった。

「……お前、スパイとか得意だったよな？」

「え、ええ。そういう仕事はしていたけれど……」

『四葉の元関係者』と名乗って、一条家に入り込めるか？

「出来ないことはないでしょうけど……多分、上手くいかないわよ。初期ならともかく、現時点では抜けた人間達が情報を多数売った筈。私に四葉との血縁関係がある、という公式なデータも存在しないし、私を受け入れるメリツトは無いんじゃないかしら」

？秘密主義であったゆえに、逆に存在証明ができない。だから、後ろ盾を失ったが最後、にっちにもさっちにもいなくなる。

「持つてく土産なら、いいのがあるぜ」

？そう、理澄のCADだ。四葉随一の戦闘魔法師が遺したそれは、研究材料として一級品だろう。

「——分かったわ、任せてください。……それで!? 文弥はどうするの？」

「アイツはもう、『異常が正しい』場所に置いてやらないとダメだろ。……安心しろ、悪いようにはしない」

？とりあえず、亜貿社に放り込んでおこう。元上司をいびれて、ナッツも喜ぶに違いない。文弥には災難な話かもしれないが。

？それに、今は魔法師殺しの依頼が多い。リーナがそのせいで結構  
駆り出されているが、一人増えれば彼女の負担も減る。

「……ありがとう。——ごめんね、文弥。私、姉さんなのに……貴方に  
辛い思いばかりさせちゃったわね」

？亜夜子は、気を失ったままの文弥の手を取り、優しく両手で包み  
込む。

？その光景を見て、居場所を失ってなお今日まで二人が生き延びら  
れた理由が分かった気がした。